ボウロロープ侯の娘

neocy

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然オーバーロードの世界にふざけた儀式で転生させられる事になり、

しかもボウロロープ侯の娘とかいう立場になってしまった…

これも悪役令嬢ってやつなんですかねぇ…？

２０１９／１２／２４

日刊ランキング３位というのを見つけてワロタ。

目次

クロエ爆誕

転生どうでしょう　サイコロ転生の巻 ―― 1

ダイジェスト２０ｙｅａｒｓ―クロエ・カティナ・デイル・ボウロープ― ―― 5

クロエ・ファクト３０ ―― 13

クロエ、王宮に立つ。 ―― 17

グレイトプリンス・バルブロ ―― 22

ワーカー・ライヘンバッハ① ―― 30

ワーカー・ライヘンバッハ② ―― 39

年末特別編　キャラ紹介 ―― 48

法国偽装部隊殲滅戦 ―― 53

ベリュース、死す ―― 65

王国頂上作戦―八本指よ、首を洗って待っていろ― ―― 75

おおきなバルブロ、あらぶるザナック ―― 85

バルブロの華麗なる一日 ―― 96

リーたんと奇貨 ―― 102

執事の決意、あと王国パねぇわ。 ―― 114

クロエ奔走録① ―― 127

クロエ奔走録② ―― 144

義姉なるもの ―― 154

クロエ奔走録③ ―― 168

幕間：集う者たち ―― 184

【外伝予告】ババルス帝国闘技場最大トーナメント編 ――

クロエ爆誕
転生どうでしょう　サイコロ転生の巻

「ここは・・・」
　気がつくと、草っぱらに突っ立っていた。
　辺りを見回すと公園のような整えられた樹木に、
　奥には人工物と思われる鉄柱・・・鉄柱？
　・・・!?
　知っているっ・・・！
　私はこの場所を知っている！
　いや！この樹木のレイアウトと「あの鉄柱」をしっている！
　北海道札幌市豊平区平岸４条１３丁目「平岸高台公園」
　札幌を代表する公園にして、
「水〇どうでしょう」の聖地！
　そしてこの構図は前枠、後枠でお馴染みのヤツじゃあないか！
『どうも皆さん、転生どうでしょうのお時間でございます』
　そしていきなり現れたのは大〇洋、というかバンジョー兄弟風の人物だった。
　え、なんだこれは。
　まさかユーコン川下りでもやらされるの？
『さて、ここでドッキリ番組に巻き込まれたと思っている人物がおりますが、
　残念ながらドッキリでも、ましてや水〇どうでしょうの前枠でもございません。
　転生どうでしょうでございます』
　バンジョーをかき鳴らしながら、これまたどこからか現れたカメラクルーの前で喋り出す大〇洋（偽物）。
　というかサラッと転生とか言ってるわアイツ。
　オイオイオイ。
『これからこの人物にはとある異世界に転生していただきますが、餞

別もなく送り出すのは心苦しい。そう思って番組の企画として、転生後の境遇をある程度調整させていただこうと思います』

あーこれ大体読めてきた。

チート能力で無双するタイプの異世界転生だ。

かぁーっ、遂に異世界デビューかぁーっ。

つれーわー、異世界に追いつかれた私つれーわー、かぁーっ。

『という訳で、サイコロ転生。やって参りましょう！

大〇洋でした』

サイコロ転生。

サイコロ転生!?

あっ、これサイコロ使いたいが為のどうでしょう要素か！

クソッ嵌められた！

――――――――サイコロ結果――――――――

立ち位置　異世界モブ現地民

生まれ　ボウロロープ候の娘

タレント　作成した武具の性能が非常に向上する。

――――――――ここまで――――――――

オワアアアアアア

これ生まれのやつからしてオバロじゃあないか！

え？しかもボウロロープってアレか、弔意（超位）魔法で死ぬオッサンだったやん殺意高杉内投手。

モブ現地人はつまるところ本編にすら関わりの無い人物。非ネームド。

敗北者たるボウロロープ候の娘といえば猿以下のＩｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ　Ｑｕｏｔｉｅｎｔの持ち主たるバルブ王子に嫁がされたとかいう程度の描写…

うっわぁ～、ぜってえご破産にしてやりてぇ～。

バルブロに嫁ぐとかみんな不安よな。

松本、動きます。

唯一の救いはタレント、武具作成時に性能を上げるという生産職系

チート異能。
これがあれば家が没落しようと食い扶持は稼げるな。
あ、でも目立ちすぎてナザリック勢に目を付けられるのは厄介極まりないな。
特にデミえもんが怖い。
あくま怖い、はっきりわかんだね。
さて、
恵まれた才能に中途半端にネームドに紐付けられたモブと言う立ち位置。
王国六大貴族の関係者と言う事はある程度の時間、具体的にはナザリックがやってくるまでの間だが、ある程度の自由が利く。
結果としては上々なのでは？
（なお、負け確の親父とアホ王子への嫁入りを除く）

『さて、これでサイコロ転生の準備は完了しました。転生者はオーバーロードの舞台となる異世界で、負け確定の大貴族ボウロロープ候の娘として転生します』
『手元にある武器は作成した武具の性能を上げるタレントのみ。果たして宝の持ち腐れとなるか、はたまたチート無双で異世界ライフを満喫できるのか？
残念ながら転生どうでしょうでは転生先での収録を行っていないので皆様にお見せできるのはここまでとなります。
それでは最後に転生の儀式にこの方をお呼びしましょう、どうぞ！』
結局異世界転生の原因すらも説明する気のなかった大〇洋（偽物）は後枠の収録のためか、カメラクルーの前で締めの挨拶を始めた。
そして呼び出した人物を見て驚く羽目になった。

・・・!?
知っているっ・・・！
私はこの人物を知っている！

いや！このサングラスと髪型をしっている！
「た、タモさん!?マジで!?」
○っていいとも、ブラ○モリ、○にも奇妙な物語。
日本人なら誰もが知っている有名人が目の前にやってくる。
『それじゃあ転生してきてくれるかな？』
「い、いいとも～！…ん？あ！テメェ！」
条件反射で答えた直後、恐ろしいことに気がついた。
誤いいともにごわす、こや、タ○リじゃなか、と。
「巫山戯んな！おまっ、コージーとみ…」
た、と言い切るが早いか否か、
日に二度も嵌められた事を悔やみながら意識が遠のくのを感じた。

ダイジェスト２０ｙｅａｒｓ―クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ―

クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ
あのふざけた儀式によって、
転生を果たした異世界における私の名前。
あれから２０年。
殆どの歳月をナザリック転移の瞬間に向けた準備に費やした。
「善き貴族」として人間的魅力を磨き、
護身の為に戦士としての能力を鍛え、
タレントを活かすべく領内に専用の工房を造り、数々の武具を作成した。
多忙を極めた２０年だったが、とても新鮮で刺激的な日々を過ごすことができた。
その２０年の中でもとても大事な出来事を時系列で振り返ってみよう。

クロエ　５歳
ボウロロープ邸
「お父様！わたくし、カトク？を継ぎたいとおもいます！」
私の５歳の誕生日。
その日は後に貴族派閥を形成するだろう叔父さま方が大勢集まり、私の誕生日を祝ってくださいました。
と、言うのは建前でいわゆる社交界へのお披露目なのです。
ところで、このクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ！
自分でも言うのはアレだけど！
この時はかなりＫＡＷＡＩＩロリっ娘でした！
謙虚目に見ても黄金に次ぐ可愛さを保有していた！
すげぇよ顔面偏差値の高い異世界！
…失礼、話が逸れてしまいましたわ。

もしかしたらレエブン侯（ｖｅｒ．子煩悩）の如く、可愛い娘を見て欲しいとか結構純粋な想いもあったのかも知れません。
しかし、ここは権謀術数の貴族社会。
お父様を含め、叔父さま方は私を出しにして政治的交渉の場を設けていたのです。
なのでお父様……、超美少女がお調子こかせていただきますわよ～ッッッ！
「こ、コラコラコラコラ。クロエ、あっちでお友達と遊んできなさい。今お父さんは大事な…」
「私聞きましたの！お父様が私を王国のお后様にするって！だけどそれではお父様や領民の皆と離れ離れになってしまって悲しいわ！だから私考えたの！リ・ボウロロールを王国で一番の土地にして、王様をここに住まわせればいいんだって！だから私、カトクを継いでお父様のような爵位を頂いて、リ・ボウロロールが一番になるように努力しますわ！」
私が大きく両手を広げて高らかに宣言し終えると、お父様達は鳩が豆鉄砲をお喰らいになったような表情を浮かべられてましたわ。
オホホホホ、壮観ですこと。
「は、ハハハハ。いやぁ、とても聡明でそして剛毅なご息女であらせられる。まだ５歳だというのにボウロロープの繁栄は約束されたと言えますなぁ……」
「し、然り！我々の言の葉を理解し、大胆にも王座を簒奪する気概を微塵も隠さぬ精神！まさしく侯にも劣らぬ覇者の風格を有しておられる！惜しむらくはご息女が女人であられる事……惜しい、実に惜しい！」
「いや、これは好機やもしれませんぞ！これほど聡明なご息女なのだ、王国へ負債を丸投げして新国家をぶち上げる旗頭にされては如何か！この際慣行を無視して侯爵位を与えてでも……！」
いけませんわ、はしたなく高笑いしてしまいそうですわ。
ここは堪え所でしてよクロエ。マジで耐えるのですわよ。
たかが子供の戯言と言えど、ボウロロープ印の戯言。

この場で一蹴できるような気概のある貴族がいるはずもなく、予想通りにお父様のおだて上げ合戦会場が出来上がりましたわ。
マジで王国貴族チョレぇですわ、チョレチョレですわね。
ついでで言うとお父様はキング・オブ・チョレチョレですわ。
「……ムフフフ、新国家はまだしもクロエに侯爵位を与えての王位簒奪か。中々どうしてそそる話ではないか」
ね？

クロエ　１２歳
リ・エスティーゼ　ロ・レンテ城
「あら、バルブロ王子。ご機嫌麗しゅうございます」
「ひっ……う、うむ」
予め断っておきますがバルバロ王子……バラバラ……もうバルブで良いですわね。
頭捻ったら色々と放出しそうですし。
で、バルブがビビっているのは怪物や幽霊を見たからではなく、超絶美少女ことクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープにアイサツされただけで勝手にビビってるだけなのですわ。
まったく、淑女を相手に悲鳴を上げるなどと失礼な方ですこと。
あれが王国の未来を担う（未遂）などと考えるとゾッとしますわね。
あら、またしても話が逸れてしまいましたわ。
色々と気移りしてしまうのが私の悪い癖、ですわ。
この年頃になるとお父様に便乗して王都へと出向くことが多くなりました。
「クロエちゃん王位簒奪計画」にノリノリのお父様がプロデュースする「クロエ派閥形成作戦」の実行という名目で連れてこられましたが、まぁ悪くはありませんでしたわ。
何せ同世代の友人ができるというのは子供にとっては一大イベント。
もう派閥とか関係なく色んな貴族のご子息、ご息女と友好関係を結んで、クロエ、マジ感激！ってぇヤツでしてよ。

ただしバルブ、テメーはダメだ。
あのバルブ頭、あろうことか、気弱そうな女の子にイチャモンを付けた挙句に手を上げたのですわ！
もうプッツーンするには十二分でしてよ。
「ええい！いかに王族とはいえその狼藉、ボウロロープの人間として見逃せませんわ！バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフ！」
「なんだ貴様ァ？無れっ」
「問答無用！誅罰執行ぉ！」
懐に忍ばせた試作武器1号（ナックルダスター）を右手に嵌め、右脚の踏み込みと同時に水月への渾身の一撃。
二回りは大きいバルブの身体がくの字に折れ曲がり、ゴロゴロと後方に転がってバルブはしめやかに失神。
顔を狙わなかったのは淑女の嗜みでしてよ。
これがガガーランだったら間違いなく頭がい骨骨折コースですわよマジで。
騒ぎを聞きつけた衛兵や貴族は何が起きたと大騒ぎ、当然お父様も駆けつけ、こってり絞られましたわ。
「何やっとるんだバカモン！」
「高貴なるものの使命を果たしたまでですわ、お父様」
「ぬぐぐ……だからと言って、王族相手だぞ！もそっと、こう何というか、手心というか……」
「お言葉ですがお父様、こんな言葉をご存じでして？――痛くなければ覚えませぬ」
「え、いや、知らぬ……怖っ」
などという出来事が2年前。
この後から一部の女の子から「お姉さま」と呼ばれるようになってとても懐かれていますの。
あと、城下にも噂が広まってやっぱり「お姉さま」と呼んでくるファンができてしまいましたわ。
これって、カリスマってヤツなんですの？

「おねぇーさまー！クロエおねぇーさまー！」
「あらラキュース、ご機嫌よう。でもダメじゃない淑女がバタバタ走るなんて」
「あ、ごめん、じゃなかった！失礼しました！」
あぁ～ロリキュース可愛いんじゃあ～、ですわぁ。
そうそう、ラキュースとも友好関係を築けたのは最大の戦果でしたわ。
年齢は２個下の１０歳。まだ中二病発症前の貴重なラキュース、最高ですの！
「あ、そうだ！ラキュース、あなたにプレゼントがあるの」
「え!?」
「ほら、この前こんなのが欲しいって言ってたでしょ？鍛冶の練習がてら作ってみたらこれが上手く行っちゃってね」
懐から取り出した箱をラキュースの目の前で開けると彼女は、キラキラと、そりゃもうスッゴいキラキラと目を輝かせました。
その顔が見たかったのですの！ですの！
「か、カッコいいいい～ッッ！銘は！銘は何というのです!?」
「ふむ、無銘のアーマーリングというのも趣がないから……異邦の神様から名をもらって【ヘルメスの指】というのはどうかしら。旅人の守護神だから冒険者志望のあなたにはピッタリだと思うわ」
「ヘルメスの指……お姉さま大好きっ！」
私の自作アーマーリングに感極まってガシィっと抱き着いてくるラキュース。
何というか、うん。
「ありがとう」……　それしか言う言葉がみつからない……。
やっべぇですわ。これＦ〇Ｏだったら消滅演出が再生される奴ですわ。尊みで高確率即死ですわ。
オバロ世界で良かったー、ですわ。

クロエ　１８歳
リ・エスティーゼ

「あぁー、合法的に消失してくれないかなぁ、バルブ王子」
「ク、クロエお姉様。流石にそれは不敬すぎるかと……」
「あらラキュース、私はバルブ王子という方への不満を漏らしているだけでしてよ？決して頭を捻ると色々出そうな第一王子の事じゃありませーん」
「……聞かなかったことにします」
　１４～１８歳にかけては対帝国戦争への初参陣や、お忍びでのワーカーデビューなどスリル満点の日々を過ごした。
　しかし、父上が私に秘密でバカ王子との結婚話を進め、婚約成立まで漕ぎつけていた事に比べると、いささかインパクトに欠けてしまうのだ。
　どうにも王国法のスキを突いた貴族派閥の人物が父上に入れ知恵し、バカ王子を煽てたらしい。
　二人に下手人について尋ねても口を割らないのがとても気になるが、そもそも貴族派閥にそんなに頭の回る御仁がいただろうか……？
「……ねぇお姉さま、私のように冒険者になりませんか？冒険者なら政治不介入の原則で王族との結婚とも回避できますよ？」
「ふふっ、ありがとうラキュース。だけどね、私みたいにしがらみを気にせず動ける貴族が義務をほっぽりだしたら誰がツケを払うかは想像に容易いでしょう？」
「……！す、すみません。軽率な発言でした」
「でも気持ちだけはありがたいわ。それに侯爵位を得ればリ・ボウロロールだけでなく王国政治への正式な参加権が得られるし、軍制だけでなく内政改革も本格的に進められる。あの王子だって私の目が黒い限りは勝手な行動をさせないように手綱を握り続けるわ。だからこれは『箔』という道具を得るために必要な行事なのよ」
「お姉さま……」
「それにね、冒険者を名乗ってやってる事が街道の掃除や便利屋なんて格好が悪いじゃない。私は冒険者が冒険者らしく、それこそ吟遊詩人が話の題材に困らないくらいに伝説を打ち立てられる様な土台の整備に全力を尽くすわ。だからラキュース、あなた達冒険者は来るべ

き日に備えて研鑽を続けなさい」
感極まったのか、ラキュースが「お〝、お姉様ぁ！」と目を潤ませ始めたのでハンカチを渡してやる。
この時ラキュースは１６歳。１９歳で最高峰たるアダマンタイトに到達するという原作知識から、彼女の冒険者としての成長スピードには目を疑った。
そして同時にもう時間が残り少ないという事を悟る。
世界の修正力というべきか、ここ数年の活動を通して八本指とスレイン法国の影がちらつき始めている。
私兵団を結成して僻地の巡回や王都内の密偵の潜伏状況を通して監視を続けてきたが、ライラの黒粉が王都内に広まり始める事を阻止する事が出来なかった。
さらには先日行われた御前試合。わざわざ六大貴族パワーを使ってまでブレイン・アングラウスと準決勝でぶち当たるように仕組み、試合後にヘッドハンティングを狙ったものの、あっけなく振られてしまい、彼の放浪を許してしまう事となった。
恐らく王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの暗殺計画も次の戦争の後から動き始めるだろう。
そしてナザリックの転移が発生し、原作が開始される。
多分、ここが介入限界点だ。残りの時間は降りかかる火の粉が払えるだけの鍛錬をするだけだ。
「ところでラキュース、小さい頃のように『お姉様大好きっ！』って抱きついてこないの？」
「あっ、あれはそのっ！お忘れくださいお願いします！」

クロエ　２０歳
リ・ボウロロール某所
別宅鍛冶工房内
「完成したわ！」
自前の鍛冶工房で一本の剣の出来栄えを見て確信した。
１０年以上炉に火をくべ、槌を振るって培った技量、

身分を問わず様々な人脈から齎された各地の珍しい資源、
そして転生時に授かったタレントの恩恵。
この３つを総結集して作り上げるのは己が身にまとう武具の最高傑作集。
討ち取ったビーストマンの骨を加工した「双角の鉢金」
様々な局面に対応可能な拡張性の高さを追求した「多目的防御機構」
極秘裏に帝国魔法省の協力を得て魔術機構を組み込んだ「三式魔導手甲」
シンプルに足元の安全性を重視した設計の「鉄長靴」
そして主武装として、「叩き切る」事を目的とした大型の片刃剣「白鯨丸」
試作品や資金調達のために流通させた武具を含めれば千を超える試行錯誤の末形になったことを考えると、感慨深く、そして手前味噌ながらその出来栄えに惚れ惚れしていまう。
……そして何よりかっこいい!!
色調は暗色系の単色に抑え、無駄な装飾を省いた質実剛健な趣！
一度纏えばプロフェッショナルという風格すら見て取れる流線型！
そしてネーミング！
っべー、まじっべー。
私のセンス力まじっべー位に高杉ですわぁ……。
世界の流行を先取りしすぎてないか心配になってくるほどやべーですわねマジで。
……テンション上がりすぎましたわ。
これで現状できる準備は整った。
残るはナザリックの転移によって全てが動く。
……絶対生き残ってやるから、でしてよ！

クロエ・ファクト３０

クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープの３０の真実

1.
クロエが笑った時、善人は尊さを感じ、悪人は本能的に恐怖を感じる。

2.
クロエが信じるのは自身の正義の法である。
今日、王国が存続しているのは彼女の法を遵守しているからである。

3.
王都の衛兵が怠けられるのは、クロエが王都に赴任して仕事を奪っているから。

4.
犯罪結社「八本指」の由来は、構成員全員がクロエに指を引きちぎられて二本足りない事から。

5.
王都へ向かう商人はクロエの後ろを着いていく。帰るときもクロエの後ろを着いていく。

6.
戦場で生き残るコツ。
・クロエの側にいること
・クロエに攻撃しないこと

7.
クロエはギガントバジリスクを睨み殺した事がある。

8.
クロエが武器を持つときは手加減の合図。

9.
帝国が対クロエ用の新軍団を設立した。
応募したのはクロエ本人のみだった。

１０.

王国の各都市にはクロエ接近を知らせる監視の仕事が存在する。
１１．
王国が隣接する国は帝国、法国、聖王国、評議国、クロエである。
１２．
クロエがアーウィンタールに乗り込んだことで帝国四騎士が招集された。
１３．
帝国闘技場周辺にはクロエから魔獣を守るための愛護団体がいる。
１４．
王国での主な死因は１．病死２．クロエ３．餓死である
１５．
クロエはワイバーンに乗ったことが無い。
何故ならワイバーンを担いでいるからだ。
１６．
悪徳官吏を追い払う呪文「お前の後ろにクロエがいるぞ」
１７．
盗賊が解錠を試みる時に注意する事
・罠が仕掛けられてないか
・クロエが隠れてないか
１８．
魔獣が人語を話す時がある。
クロエに命乞いをする時だ。
１９．
あなたがクロエを見つけた時、クロエはあなたを見つけて背後に回り込む準備をしている。
２０．
学術的にクロエという種族と職業がある。
２１．
法国の六大神信仰は本来七大神信仰であった。
減ったのはクロエが現界したから。
２２．

ガゼフ・ストロノーフが王国最強の戦士でいられるのは、クロエが世界最強の戦士だから。
２３．
クロエはお茶を嗜まない。
代わりに敵の生き血を嗜む。
２４．
クロエの身辺調査に人をやると、
クロエ本人が調査結果を報告してくれる。
２５．
クロエと対峙して生き残った者たちの共通点
「殴られなかった事」
例外はバルブロ第一王子だけ。
２６．
クロエは木で斧を切ったことがある。
２７．
クロエは絵のモデルになりながら自分の肖像画を描くことができる。
２８．
クロエは貴族なので走らない。
代わりに走る速度で歩くことができる。
２９．
すべての道はクロエに続く。
彼女が道を作っているからだ。
３０．
クロエの言う「死んでしまいます」の主語は、
対峙している相手である。

リ・エスティーゼ
ボウロロープ別邸
「……これが市井で出回っているクロエ様に関する噂の一部です。出処を処罰いたしましょうか？」

「滅多なことを言うものではありませんよ。噂が立つということはそれだけ民衆の関心が私に集まっているという事。こちらから騒ぎ立てる様なことは何一つもありませんわ。それに……」
「そ、それに？」
「正直心当たりがあるものばかりで、出鱈目と否定ができませんのよねぇ……」
「ま、誠にあらせますか!?」
「……やだもう冗談ですわよ、冗談。クロエ　冗談。流石にワイバーンを担いだり生き血を飲んだりなんかはしません事よ」
「そ、ソウデスヨネー。あは、あはは……」
っべー、まじっべーわ。
所々ガチめのファクト混じってるわー。
というか七大神信仰のやつソースどこだよ、カルトか？ズーラーノーン的なやつか？
うわー、ぜってーナザリック勢に目ぇ付けられるじゃんアゼルバイジャン。
頼む、ホラ話だと思ってスルーしてくれぇ！

王国領某所

『ナザリック地下大墳墓』
「アインズ様、現地人について調査していたら興味深い情報が……」
「どれどれ……、ふむ、……デミウルゴス、ちなみにこの現地人は人間なのか？」
「どうやら人間のようです」
「……ええ」

はい、ダメでしたー☆

クロエ、王宮に立つ。

どうも皆さん、
王国どうでしょうのお時間でございますわ。
って、イカンですわ。
憎き転生空間のマネごとをしてしまうなんて、このクロエ一生の不覚ですわ…。
実は私、今年で２１歳になりました。
そして遂にお父様の名代として侯爵位を授かりましたの。
遺憾ながらバルブの婚約者というおまけ付きですが。
チクショー。
ま、まぁこれで晴れて政界デビューですわ。
何とかカルネ村襲撃事件に間に合ってよかった……。
会議初日という事もあり、事前に色々と作法について耳にタコができるんじゃあないかと思うくらい説明を受けましたが、何よりも大事なのは第一印象！
超絶美少女から絶世の美女に超☆進☆化を果したクロエちゃんスマイルでハート☆キャッチィですわね！
これも私の未来の為に必要な布石、
クロエ！腐った貴族政治を～、ぶっ壊す！

※※なお、スマイル全開で議場に入ったクロエは彼女以外の六大貴族を含む大半から目を背けられた※※

「……うぇ～、思った以上にスマイルキープって大変ですのね……。ラナー様の表情筋ってどうなっているのかしら？」
「ボウロロープ侯、少しよろしいか？」
「ん、父上がここに……って、あぁ、そういえば私もボウロロープ侯でしたわね。どうなされましたか、レエブン侯」
私が廊下でほっぺをムニムニしていたら親バ……じゃねぇですわ、レエブン侯が声をかけてきましたわ。

そっかぁ、このタイミングだともうリーたんが産まれてて面の皮の下はザ・子煩悩って感じの筈なんですわよねぇ。
「いやぁ、無事に初陣を終わらせた貴方にご挨拶をと。それにしても初めての議会とは思えぬ佇まいは見事の一言に付きますな。感服いたしました」
「あら、腹芸も覚束ない小娘を煽てても何も出ませんわよ？」
「はっはっは、腹芸の覚束ない淑女はそのような深読みはされませんぞ」
「あらやだ！一本取られましたわね、おほほほ」
あぁ～、この掛け合いたまりませんわぁ……。
こう、知能指数がギュンギュンと高まってきそうな知的なフィールドにいるって感じが最高ですわ。
権謀術数（笑）が蠢く議場のなんて、これに比べたら小学校の学級会レベルですわね。基本的に机の下で足を蹴り合ってるだけですもの。
あ、そうだ。
あのことを聞いてみましょう。
「ところでレエブン侯、一つお尋ねしたい事がございますの」
「っ！……何でしょうか？」
「その……、私の笑い方って不自然かしら？」
「……は？あ、いや失礼……は？」
「二度も!?」
あっれぇ～？
いきなり緊張しだしたり鳩が豆鉄砲をお喰らいになったような顔をしたりと何かリアクション顔芸人みたいになってるぞぉ～？
「いや、質問の意図がわからず……。どこぞの貴族になにか言われたのですか？」
「いえ……、今日は議会初日だから印象を良くしようと意識して笑顔を保ってたのですが、多くの方に目を伏せられてしまったのです」
「……あぁ、なる程。納得がいきました。あ、いえ。ボウロロープ侯の笑顔は大変お美しいです。問題はその……ううむ」

うっわぁ、凄い言い難そうなオーラが出てますわね……。
でもここでモヤっとしたままにするのも性に合いませんし、ズバッと聞き出してやりますわよ！
そう、ズバッと！
「レエブン侯、はっきりと仰ってください。女人の私を気遣って下さるのは嬉しいですが、この身は爵位を受けし身でございます。揶揄も嘲笑も覚悟の上で権謀術数の世界に飛び込んでいるのです。その覚悟に対して侯は女の腐ったような誤魔化しで応えられるのですか？リ・エスティーゼ王国六大貴族と名高きエリアス・ブラント・デイル・レエブンともあろうお方が！」
……くぅ～！唸呵切ってやりましたわ！やってやりましたわ！
人生でいつか使ってみたい言葉「女の腐ったような」を使ってやりましたわよ！全国１３０人のクロエファンの皆様～！
この北条政子ばりの唸呵、
これはもうクロエ名言集ノミネートですわ。
「……わかりました。その眼差し、そして先程の言葉。貴女の『覚悟』が然と伝わりました。これから先、真実のみをお話します。ご不快になられても責任は……と、これは貴女には不要な言葉でしたな」
「私をご理解いただけて何よりですわ、レエブン侯」
そしてこの後、私は「クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープの３０の真実」の存在と、
【クロエが笑った時、善人は尊さを感じ、悪人は本能的に恐怖を感じる。】
という噂が流れている事を知ったのでした……。
やっべ！マジ超☆爆☆笑ですわ！
え、私の扱いチャック・ノリスなの、炎のテキサスレンジャーなの。
コブラに噛まれたら丸５日苦しんでコブラが死にそう。
あとフロントガラスに空手キックかましそうですわね。この世界ならステンドグラスが関の山っぽいけど。
でも私は女侯爵クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ。
流石に端なく笑うのはやべぇですわ。

というか良識人のレエブン侯にやべぇ奴認定とかされたくないし。
ここはクロエ奥義「淑女笑い」で乗り切ってやりますわ！
「おほほほほ、市井には実に剽げた冗談を流布する達人がいるようですね。気を抜いたらお腹が捩切れてしまいそうですわ」
「……お怒りには、ならないのですか？」
「見事な剽げに腹を立てるほど無骨じゃあ無くてですわ。お父様だったら首を刎ねろとか言いそうですけど」
「大抵はそう言う反応になりますがね……。あ、今のはご内密に」
「もちのロンですわ。でも今のお話を聞いて確信したことがありますわ」
「ほう、良ければ聞いても？」
「今のお話を聞く限り、侯は『善き貴族』様なのだと言う事ですわ。先程の会議で決して目をそらさず、ここでお話してその誠実さを確かに理解しました。レエブン侯、これからも末永いお付き合いができることを願いますわ」
「おお！それは願ってもない申し入れですな！私からも良きお付き合いをさせていただきたい」
っしゃぁ！
何とか乗り切ったですわぁ！
ここから笑顔のままになっても全然不自然じゃないし、漸くテンションも落ち着いてきましたわ。
あー、クロエちゃんまじクール。
名誉勲章もののお嬢様ロールでしてよマジで。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

後世、一線を退いたエリアス・ブラント・デイル・レエブンは自著『王国史』にてクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープを次のように評した。

――宮廷政治の議場とは人間性の醜い部分をこれでもかと押し込めた見世物小屋である。そして王国のソレはその数段上を行く様相

であった。
彼女はその場に真っ向から乗り込み、権謀術数にかけては腕が確かな歴戦の貴族に立ち向かい、その悉くを退けてしまった。
彼女はその耳目で汚濁の裡に隠匿された真実を暴き出し、
その口から放たれる弁舌は龍の咆哮が如き威を纏い、数多の佞言を一蹴するのである。
このように評すれば如何なる傑物かと思われるが、彼女は齢２１になったばかり、しかも父親の名代として爵位を得た新参であった。
（中略）
彼女の人物評は定説の通り類を見ない人格者であり、彼女が言う所の「善き貴族」である。
民草を愛するだけでなく、民草の目線に立ち、彼女自身の持ちうる限りを持ってそれに応えた。
彼女は自らを「究極的な利己主義者」であると嘯いていたが、その利己主義は確かにどんづまりの王国を立て直し、王国と民衆に『誇り』を取り戻した。
私が知りうる限り、彼女ほど気持ちの良い利己主義者は他に知り得ない。
彼女の人生はまさに波乱万丈の一言に尽きるが、その生き様に人は今も尚憧憬を抱かずにはいられないのだ。

グレイトプリンス・バルブロ

よう愚民共！またせたな！
なに？『勝手に出てきただけだろ』だと？
貴様ぁ、王族に向かって何だその口の聞き方はぁ！
その素っ首刎ねさせるぞ！
んん？そもそも誰か知らないだと？
ふ、いいだろう。
この俺が直々に高貴なる名を名乗るのだ、特別に拝聴する栄誉に浴するが良い。
俺の名はバルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフ！
リ・エスティーゼ王国第一王子である！
ゆくゆくは王位を継承する身である、その骨身に然と我が名と威容を刻みつけるように。

……おい、なんだその呆れたような反応は。
『あぁ、バルブか』だと？
俺をその名で呼ぶんじゃあないっ！
『あの女』の顔が脳裏にチラつくだろうがっ！

ええい、どいつもこいつも俺を馬鹿にしやがって……！

本当は嫌だったんだ！
いくらボウロロープ侯の娘とはいえあんな野蛮な女を正室にするだなんて！

だが確実に王位を継承するなら貴族派閥の長であるボウロロープ侯の協力を取り付ける必要がある……クソッ！あの暴力女め！

「バカお……じゃねーですわね。……バルブロ王子ぃ～、どこですの

～？」

イェッヒィッ!?ば、馬鹿な……！

アイツが、アイツがやってくる……！

「そこのメイドさん、ここらへんでバ……第一王子を見ませんでしたかしら？」

「第一王子……あぁ、バルブロ様ならあちらの方に歩いていかれましたよ？」

バァァーッ！（第一王子特有の鳴き声）

メイドお前なん、何で教えてるんだメイドぉ!?

声は覚えたからな!?覚悟しろよ！

「王ぅ子ぃ～、あなたのクロエが呼んでますわよ～？出てらっしゃ～い」

おおお、お落ち着け、バルブロ・アンドレアン・イェルド・ライル・ヴァイセルフ。

素数だ、素数を数えるんだ……あれ、素数ってなんだ？

違う！今は素数じゃなく逃走経……じゃない！あの女を撒く手段を考えるんだ！

何か……、そうだこの部屋の窓か「バルブロ王子、みーつけた！」なん……だと……？

「……ミツカ…チャッ…タ……」

ウワァァァァァめっちゃ怖えぇぇぇぇぇ！

……いや、諦めるなバルブロ！

ここで諦めたら何も変わらねぇだろ！

ここから、俺は変わるんだ！

決して屈するなバルブロ！決して、決して、決して！

「うおおおお！俺は！勝利に向かって！前進するぞぉクロエぇ！」
「……ほぅ、猫が獅子に化けたですの。……ではこちらも迎え撃ちましょう」
速度、威力、技術。
この３つは逆立ちしてもアイツに勝るなんてものじゃあ無い！
だが俺にはこの肉体がある！
あらゆる打撃を軽減する天然の要塞！
ヤツの拳から目を離すな！
やつの拳が接触する瞬間、全身の筋肉を引き締め耐えきって……ん？
あの振り上げた腕の下……あれだ！
「吶っ喊あぁぁん！」
「なっ、まさか組み付く気ですの!?」
組み付きと見せ掛けた超低空からのタックル、
さらに爪先の向きをずらし進路を調整、ヤツが振り上げた左腕の真下をくぐり……抜けたぁッ！
フフフ……フハハハハハハハ！
やったぞ！ついにやったぞ！
「悪魔の左」（バルブロ命名）、敗れたり！
「そしてこいつは、これまでのお返しだぁッ！」
「な、なんとぉっ！ですわっ！」
ヤツの横をすり抜ける瞬間、体当たりをかましてやった！
……うおおおおっ！
奴に一泡吹かせてやったぜチクショウ！
フハハハハハハ！
俺は自由だぁ―！
「……やりやがりましたわねバルブ頭。次からはギアを上げてやるとしますですわ……。」

さて、勢いで城下に出てきてしまったがどうしたものか。
うーむ、……まぁ、今戻ったところでアイツと鉢合わせをするのが目に見えているな。
仕方ない、適当に時間を潰してこっそり帰るか。
それにしてもまぁ、何ともシケた面をしとるなぁ愚民共は。
それが王都の顔たる大通りを行き来する顔か？
「……ドワッチャアァォッッッ!?」
「バッキャロォ！前見て歩きやがれ！」
ぬ、ぬうぅ～！
何とも教育のなっとらん御者だ、全くもってけしからん！
クソッ、ヤツの撥ねた泥水が俺の脚にかかってしまったぁじゃあないかっ！
……よし、ヤツの顔は覚えたからな。
う～む、しかし足元の石畳の何とも貧相な事よ。
どれも不格好でゴツゴツしてて歩きにくくてかなわん。
何より愚民共のシケた顔と合わさって空気が辛気臭くてウンザリする！
辺境ならまだしも、王の膝下がこの有様では格好がつかん！
王になった暁には、まずこの石畳をすべて引っぺがして、国一番の石工に上等な石畳を造らせてやる……！
ん？そういえばラナーのやつが街道整備についての法案を通したとか言う話があったな……。
あいつの真似をするのは癪だが俺も提言してみるか……。
これも王位継承を確実にするため。
卑怯とは言うまいな、ザナック？
グフフフフ。
「おーい、クロエー！」

ウオォッヒィッ!?
もう追いつかれただと！
どこだ？どこから来る!?
正面？右？左？まさか……上か!?

「クロエおっそ～い！今日はお義母さんのお見舞いに行くから遅れないでよって言ったじゃない！」
「ごめんごめん、カシラと話し込んじゃったんだ。さ、行こうぜ」

「は、ハハ……。なんだ、クロエって名前の男じゃあないか。驚いて損したぜ」
クロエの正体はちょうど後ろの広場で待ち合わせに遅れてきた男の名前のようだ……。
全く紛らわしい名前をつけよって、親の顔が見て――「おい」ん？なんゴハァッ!?
「クロエが男の名前で悪いかよ!?立て！貴様を修正してやる！」
「な、何だ貴様！俺を誰ブルウォォッ!?」
「お前が誰かだって!?知るかバカ！質問しているのは僕だ！クロエが男の名前で悪いかって言ってるんだよぉっ！男だよ僕はぁっ！」
こ、こいつ！全く言葉が通じないじゃないか!?
と、とにかく防御だ！ヤツは激情に駆られて大振りの打撃しか出せていない！
ヤツの持久力が切れたところで組み付いて決着をつけてやる！
「うおおおおお！」
「グゥうおおぉぉ！」

「うおおおおお！」
……こいつ全然疲労しないな!?
や、ヤバい……。もう腕の感覚がなくなってきた。
このまま防御を下げたらあの連撃を間違いなく喰らう……！

クソッ、まさかこんな愚民に攻撃を許す事になるとはッッ！
か、顔は……お、覚え「そこまでですわ」……なに？
「双方、拳をお収めなさい。聞かぬようであれば実力で鎮圧しますわ」
「あ、貴女様は!?く、クロエ！クロエ・ビダッダン！もう喧嘩は止めて！侯爵様の面前よ！」
「なっ、こ、侯爵様!?どうしてここに!?」
「いつもの城下視察ですわ。それよりもそちらの殿方をお放しなさい。彼は王国の要職たるやんごとなき身ですの。貴方が手に掛けていいような方ではないですのよ」
「し、失礼しましたぁっ!!」
「ふふふ、素直でよろしいですわ。喧嘩は男子の華ですが、売る相手は選びなさいな？」

「……礼は言わんぞ。あんなヤツ、俺だけでも何とかできたのだからな」
「あらあら、私が見た限り終始反撃の機会も与えられなかったみたいですけど」
「ヤツの息切れを狙う作戦だったのだ！というか終始見ていたなら序盤で止めろよぉ!?」
「まぁ、そういう事にしといてやりますわ」

ぐぬぬ、この女ぁ。
しかし、あの場で割り込まれなければ間違い無く俺は敗北していただろう……。
……少しは感謝してやるか、言葉には出さんが。
「では王子、先程の続きと参りましょうか」

「……は？」
「まさか私を突き飛ばしただけで勝利が確定するとでも？」
おい、
オイオイオイ、
オイオイオイオイオイ!?
「ま、待て待て待て待て！俺は第一王子だぞ!?喧嘩を売る相手は選ばなきゃいけないんじゃないのか!?」
「私とあなたは夫婦の契を交わしてるじゃないですか。そして夫婦の喧嘩は夫婦の営み。喧嘩する事があってなにか問題があるでしょうか？」
「問題ない訳がある……、ヴァーッ！なんだそのナックルダスターは!?」
「今朝作ったばかりの新作『偉大なる王国の再興』ですわ♡ストライプと星の装飾が可愛らしいでしょう？」
チクショウ！こっちを殺る気マンマンじゃないか、この暴力女め！
ノーカンだ！さっきの感謝はノーカン！
……ハッ！まさかこの女、城内で俺を探していたのは……殺られる!?
「な、嘗めるなよクロエぇ！今日の俺は一味違うんだぁ！」
「御託は良いから掛かってきなさいですの。私の攻撃を見切った褒美ですわ、先攻は譲りましてよ」
「ぬ、ぬぬぬぅっ！吐いたツバは呑めんからなぁ～っ！」

『クロエ・ビダッダンの証言』
ええ。
あの後、事情を知って罪悪感が湧いたので謝りに行こうと二人を追いかけていったら、何かこう、オーラってんですかね。
なんか二人の間の空間がグニャあ～って歪んで、しかも何か喧嘩の様相を呈してたんです。
それでまず第一王子がクロエ様に掴みかかろうと突進したんですが、次の瞬間にはクロエ様が第一王子の頭上に移動して肩に着地した

んです。
冒険者の方や王国戦士長のストロノーフ様が使う、ブギ？でしたっけ？
最初はそれかなーと思ったんですが、うちのカシラ……、あ、大工のカシラですね。
そのカシラが屋根に登るときに壁の僅かな出っ張りを足場にして駆け上がるって裏技を使うのを思い出したんですよ。
だから、それと同じ原理で第一王子の身体を駆け上がったんじゃないかなぁって思います。
それから何をしたか……ですか？
確か……そうそう！肩車だ！クロエ様が第一王子に肩車して……回ったんですよ。
こう、身体を横に傾けてグルンっと。
そしたら第一王子の首あたりから「コキャッ」って小さい音が聞こえて「あぁ、死んだなアレは」って思いました。
いやだって、首が捻られてコキャッですよ？
普通は死んだと思うじゃないですか。
そしたらクロエ様がこっちに気がついてたのか僕を呼び止めたんです。
「安心なさい。彼は気絶してるだけですわ」って。
それから今日まで王族の訃報も出てないですし、クロエ様が言った通り気絶しただけだったんでしょうね。
それにしても王族って凄いですね。
バルブロ第一王子は身体が頑丈だし、クロエ様は超人的にお強い！
あのお二方のお子様が産まれたならば、それはもう人類最強の英雄になられるのではないでしょうか！
いやぁ、王国の将来を心配していましたが、あのお二方が居られるならば安心ですよ本当！（笑）

ワーカー・ライヘンバッハ①

王国領某所
八本指の数ある拠点の一つ
「兄貴、積荷の目録ができやした」
「おう、そこに置いとけ」
「……あ、兄貴。そういや兄貴って元警備部門だったんでしょ？なんで密輸部門なんかに飛ばされちまったんですかい？」
「……お前、何年目だったっけ」
「へい、今月で2年と3ヶ月になりやす」
「じゃあ、あの襲撃事件を知らないわけだな」
「あの襲撃事件？……ま、まさか」
「そのまさかだよ。……『ライヘンバッハ』、あの狂気の女神がこの手を授けてくれちまったんだ」
「『ライヘンバッハの贈り物』……！」
「当時を知る奴は狂って自殺するか、俺みたいに閑職勤務を希望したもんだ。コイツぁ八本指の威厳に関わる秘密だ。くれぐれも口外するなよ？」
「う、うす！」

ご機嫌よう皆様。
リ・エスティーゼ王国貴族、クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープですわ。
早速ですが私、今はオフですの。
王都での仕事は父上に引き継いで、久々の里帰りですわ。
「ハーイ、ヨーゥ、シルバー！」
気分はまさにロー○・レンジャー！
王都の別邸から必要最低限の荷物を持ち、動きやすい服装で愛馬に跨り、リ・ボウロロールまでまっしぐら！
さぁ、ウィリアム・テル序曲を流すのですわ！

「あ、やべぇ！今日がお嬢さんの出発日だったわ！お前ら早く荷物載せろ！追い付けなくなっちまう！」
「なんスか大将？クロエ様に商売するンスか？」
「バッカお前ぇ、クロエのお嬢さんは商人の守護聖人なんだ！神殿の生臭坊主の有り難ェ言葉以上に道中安全は効果覿面とくらぁ、お嬢さんに着いてくしかあるめぇよ」
「女将さん代金ここに置いてっからよ！釣りはいらんぜ！」
「「クロエお姉さまー！行ってらっしゃいませー♡」」
オホホホ、
皆が後ろについてくるから、いつの間にかロー○・レンジャーが○ッキーに変わりましたわ。
あ、ファンの娘達にはウィンクしときましょ。
「「キャー♡」」
フフフ、愛い奴よのぅ、ですわ。

「ただ今帰りましたですわー」
「「おかえりなさいませ、クロエお嬢様ぁっ！」」
８部の北米大陸横断レースばりのキャノンボールでヘトヘトになった私を迎えてくれたのは屋敷の従者達、だけでなく周囲の町や村からわざわざ駆け付けてきてくれた領民の皆でしたわ。
花吹雪まで舞ってまるで英雄の凱旋を祝うが様相。
……やべっ、感動のあまりちょっと涙腺が弛みますですの。
「クロエお嬢様、王都でのお勤めご苦労さまっす！」
「それじゃあムショ帰りのゴロツキをねぎらう言葉ですわ、ワイアット君」
ズレた労いの言葉をかけてきたのは執事のワイアット君。
元鉄級の冒険者で、足の怪我を理由に引退したところを拾ってきた若者ですわ。
絵に描いたような誠実さと、今も鍛錬を続けているストイックな性格はこういうお硬い仕事に向いてますしね。
しかも顔面偏差値高いし、いい老け方したらナザリックの執事みた

いなイケおじになりそうですわねぇ……。
「相変わらずお嬢様宛の手紙がたくさん届いてるんで、目を通しておいてくださいねー」
……うーん、このすっごい砕けた感じ好きなんだけど執事感が低いですわ……。

湯浴みを終わらせてゆったりした部屋着に着替えたら書類整理ですわ！
領民からの嘆願、武具を卸してる店舗からの売上報告と契約更新の書類、武具使用者からのご意見状。
この量、まるで聳え立つ※※ですわ！
（お嬢様規約違反があったため一部規制）
ご意見状は見ててとっても楽しいですわね！
制作者の意図した工夫をユーザーが気に入ってくれたという感想はもちろんの事、改善案を並べ上げてくれるのも品質向上の方向決めに活かせるし……、とにかく楽しいですわ！
「さて次のご意見状は……あら？『ライヘンバッハ』宛……差し出しはエ・ランテルですわね」
……ゆっくりとオフを楽しめると思ったら、デンジャーな空気が漂ってきましたわー！

『ライヘンバッハ』
つまりは私のワーカーとしての名前ですわね。
転生前の世界では名探偵ホームズとモリアーティ教授が死闘の末に落ちてしまった滝の名前として有名ですわ。
どうしてその名を名乗ってるのかですって？
響きがカッコいいからに決まってますわ！
カッコいいからに決まってますわ！
大事なことだから2回言いましてよ！
ライヘンバッハへの依頼はエ・ランテル周辺地域での人探し。
冒険者になると出ていった息子さんの安否を思う親御さんが依頼

者ですわね……。
人探しなら冒険者組合に依頼を出せばいいのにわざわざワーカーに頼む理由……。
「うーん、いつかの様にバックに八本指がいると面倒ですわね……。でも工房の運営資金も調達しなきゃいけませんし、世知辛えですわぁ……」
あの時はゾッとしましたわねぇ……。
何せ依頼者の私兵と一緒に守ってたのが奴隷満載の馬車で八本指の商品だったなんて。
道中で気づいてご破産にしてやったから良かったものの、運が悪ければバッドエンドまっしぐらでしたわ……。
エ・ランテル、帝国との最前線。
後に英雄モモンが訪れる街。
「行きたくねぇですわぁ～！」
いや、生モモンと生ナーベを見たくねぇ訳じゃねぇんですわよ!?
ただ、こう何と言うか、罠っぽい感じがするんですわよねぇ……。
……まだ私兵部隊の情報網に開拓村襲撃の情報は掛かってないですし、大丈夫だとは思うのですわ。ギリギリ、多分。……多分。
……やっぱり子を思う親の気持ち、無碍にはできませんわ！
「ワイアット君！明日から暫く留守にしますわ！武具販売契約更新の書類は写しを契約店舗に返送、ご意見状は王都の私の工房に転送、嘆願書は関係各所に対応可能か確認を取ること！できますわね！」
「はぁ、イイっすけど明日はお嬢様の大好きな芋料理を作る予定だったんですが、食べられないので？」
「……やっぱ明後日からにしますわ！」
ワイアット君の芋料理！
食べずにはいられないッ！ですわ！
「いやぁ～やっぱワイアット君は万能執事ですわ。王都にも置いておきたいくらい万能ですわねホント」
丸一日をかけてワイアット君の芋料理を堪能し、翌日にはリ・ボウ

ロロールを出発。
道中ワイアット君が持たせてくれたお弁当をつまみながら年中雪化粧のアゼルリシア山脈を臨んでぶらり旅。
エ・ランテルに辿り着いたのは出発してから１０日目の朝でしたわ。
「おっと、仮面をつけとかなきゃですわね。ここから先はライヘンバッハタイムですわ～」
武器や旅道具を満載したサドルバッグから取り出したミスリル製のハーフマスクをつければエ・ランテル入りの準備は完了ですっ……じゃなかった。
準備は完了だ。

「さぁさよってらっしゃい見てらっしゃい！何とあのクロエ工房の新作が、王都リ・エスティーゼから早速入荷と来やがった！その名も『偉大なる王国の再興（グレイト・キングダム・アゲイン）』！女子供から大の大人まで使い勝手の良いナックルダスターだよっ！栄えある王国臣民はこれを買って、不埒な輩を殴りつけてやろう！いつも通りクロエ工房の商品はお求め安い価格設定だ！早いモン順、売り切れ御免！さぁさ買っていった、買っていったァッ！」
「今日も精が出ますね、見習い君」
「ややっ、コイツぁ驚いた！ライヘンバッハの姐さんじゃあねぇですかい！どうもどうもお久しぶりでごぜぇやすっ！あっしも親方も姐さんがクロエ工房の商品を紹介してくれたおかげで今じゃぁエ・ランテルでも指折りの店構えとなりやして、全くクロエ様々で、あ、ごぜェやすよ！」
「ははは、貴方の鎚を振るう以上に回るその口にも磨きがかかっているようで何よりです。それだけ出来れば噺家としてでも食べていけるのでは？」
「いやいやいやいや、そいつぁイケねぇやライヘンバッハの姐さん。いいですか、あっしは世界一の鍛冶師になりてぇンですよ！姐さんが今まさに担いでる魔剣『白鯨丸』！そいつぁクロエ・カティナ・デイ

ル・ボウロロープ様の作品だって言うじゃねぇですかい。人が魔剣を拵えられるってンなら、俺もいつかそういった大名物を、あ、拵えて、みてェなぁ！」
彼は私が武具を卸している店の見習い君。
名前はまだ知らない。
手先が器用との事だが、それ以上に忙しなく回る口が彼最大の特徴と言えるだろう。
あと、所々で歌舞伎めいている。
「ほぅ、魔剣を拵えたいと見得を切るとは大きく出ましたね」
「夢はデッかく、生活は慎ましくってぇのがあっしの信条ですさネ。ところで今日は親父っさんに用事ですかい？」
「えぇ、仕事の都合でしばらく厄介になろうかと」
「なるほどなるほど。親父っさんは奥にこもって作業中でさぁ、二階のいつもの部屋は整ってるんで荷物を置いたら挨拶でも言ってやってくだせぇ」
「そうさせて頂きます」

「親方、お世話になりますね」
「ン、あぁ。アンタか侯爵様」
「ちょっ……。親方、一応確認ですけど私の正体を……」
「バラすもんか、うちのおふくろにも言ってねぇっての」
「ですわよねぇ……、じゃなかった。ですよね」
「いちいち言い直さんといかんのか？」
「いかんでしょ」
「左様か」
彼がこの店の主、私は「親方」とだけ呼んでいる。
見習い君とは対極的な口の少なさで、彫りの深い外見も合わさって凄腕の職人という雰囲気が際立っている。
そして何よりも重要なのはライヘンバッハの正体を知る数少ない人物という事。
この親方、私の装備と手を見比べただけで製作者であることを見抜

いたのだ。
何かのタレントだろうかと聞いてみたら、
「手に『私が作りました』って書いてあった」
と、外見に合わない小粋な冗談をかましたのだ。
「んで、今回は何泊するんだ？」
「人探しの依頼ですから……外泊も含めて最大６泊の予定ですね」
「わかった。いつも通り部屋を出る時は現状復帰してくれりゃ好きに使ってくれ」

さて、必要最低限の装備を整えたらまずは冒険者組合だ。
依頼者の息子はこの街の冒険者らしいから宿や依頼の受諾状況はすぐにでもわかるだ「ライヘンバッハお姉さま!?」っゲェ！あの声はもしや！

「やっぱりお姉さまじゃないですか！エ・ランテルに戻られたので!?」
「へぇ、コイツが噂のワーカーかよ」
「今すぐ仮面を外すべき、査定結果が出せない」
「ノンケなので興味なし」
「……」

あ、アイエエエエ!?蒼の薔薇、蒼の薔薇ナンデ!?
しかもフルメンバー!?蒼の薔薇フルメンバーナンデ!?
お、おおお落ち着くのですクロエ、いやライヘンバッハ！
冷静に逝け、いや逝っちゃ駄目だろ！
そ、そうだＣＯＯＬだ。ＣＯＯＬになれ。
取乱さず、彼女たちがエ・ランテルにいる理由を聞き出し、自然体で振る舞うのだ。
できるぞライヘンバッハ、貴女はやれば出来る娘よ！
「久しぶりねラキュース、元気そうで何よりだわ。後ろの方々はもしかして噂の……？」
「えぇ、彼女たちは『蒼の薔薇』の仲間達です。ガガーラン、ティア、

ティナ、イビルアイ。彼女はライヘンバッハ、王国を拠点としているワーカーで、クロエお姉様とも親交のある方よ」
「紹介に預かったワーカーのライヘンバッハです。訳あって素性を隠していますが王国を思う気持ちはラキュースに負けぬと自負しています」
「ガガーランだ。あんたの腕前と魔剣の話は聞いてるぜ。是非とも手合わせ願いたいね」
「私はティア、こっちがティナ。それよりもその仮面を外すべき、はよ、素顔はよ」
「訳ありだと言っていただろバカ！……仲間がすまない。私はイビルアイ、魔法詠唱者だ。私も故あってこの仮面は外せないんだ。すまない」
よ、よし！
チョロいラキュースは別として、蒼の薔薇のメンバーにも不審がられてない！
っていうかティアの眼ぇ怖っ！
獣、そうあれは獲物を狙う獣の眼光だわ！
何か手がワキワキ動いてるし、絶対仮面を奪う機会を狙ってるでしょ!?
うおおおお!?何かさっきより近くなってるって言うか摺り足でにじり寄ってきてるぅ!?
「ッシャアアアア!!」
「あっ馬鹿ぁ!?」
「ティア!?」
ティアってこんなにレズバーサーカーなキャラだったかしらーッッ?!
なんて言ってる場合じゃない！これはかなり不味い！
ライヘンバッハとはつまりクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープが世を忍ぶ仮の姿。
徳川吉宗にとっての徳田新之助、水戸光圀にとっての越後のちりめん問屋！

別に「予の顔を忘れたか」とか「この紋所が目に入らぬか」をしたい訳じゃないけど、身バレは絶対に避けたい！
「うおおおお!?」
――「いいかいクロエ。貴族たるもの、『常に余裕を持って優雅たれ』だ。この状況、君が培ってきた技術で十分対応できる筈だ」
……ハッ!?何かＣＶ．速水奨っぽいおじさんのセリフが脳裏をよぎった！
飛びかかってくるティアに打てる最善手……これだぁっ！
「なっ!?ティアの動きを捉えただと!?曲がりなりにもアダマンタイト級冒険者だぞ！」
「勝負あったようね。この勝負、ライヘンバッハお姉様の勝ちよ」
「……ちょっと待てよ、あの抱え込み方、ちょっと変じゃないか？」
「私知ってる、あれは……」
――お姫様抱っこ。
「……いけない子猫ちゃんだ、仲間のもとへお帰り」
勢いで抱きかかえて、何言ってんだろうか私。
でも咄嗟に行動できたのもあのセリフのおかげか。
ありがとう、ＣＶ．速水奨っぽいおじさん！
背後の弟子とかに気をつけてね！
「アッ、これしゅき……♡」
ティアは鼻の穴という穴（２箇所）から血を吹き流して気絶！
「で、でた～！お姉様の女たらしムーブ！あの技を受けて喜ばぬ女はいなかった～っ！」
「うおおお?!ティアがいきなり出血しだしたぞ！ラキュース、バカ言ってないで早く治療するんだ！」
「落ち着け、ありゃ鼻血だ」
その後、気絶したティアを回収した『蒼の薔薇』の面々は王都に帰るべくエ・ランテルを後にした。
やれやれ、ヒヤッとしたがなんとか乗り切れた。
……あっ！どうしてエ・ランテルに来てたのか聞くの忘れてたですわっ!?

ワーカー・ライヘンバッハ②

「すみません、お尋ねしたい事があるのですが」
「はい、なんでしょ……っ!?!」
※※当時の事を実際に対応したエ・ランテル冒険者組合受付員のカレン・ナンダは次のように証言している※※
「私達、冒険者組合の受付は日々、様々な方の対応をしています。だから、どんな方が来ても平等な対応が出来るように訓練を積んできました。ですがあの方を目にした瞬間、これまで積み重ねてきた全てが音を立てて崩れる様な心地でした。もちろん良い意味で」

「あ、あの……どのようなご用件で、しょうか?」
「人探しです。鉄級の冒険者、年は15、名前は……えーと、ルガート。ルガート・ソロン。彼の所在を知りたいのですがご存知ないですか?」
「あ、はい! 調べますので少々お待ちを……。はい、鉄級の冒険者ルガートはトブの大森林周辺で薬草採集の仕事を受諾中ですね!」
「トブの大森林ですか……。助かりました、貴女に感謝を」

「ええ、ええ。本当は冒険者の個人情報を聞かれたからってホイホイと出すなんて組合の沽券に関わる問題行動なんですぅ! でもでも! 仮面の下に見える優しそうな瞳と声色、あの方を前にしたらもう何と言うか、『あぁ、この方になら話しちゃってもいいさ』って思って……アァッ! ライヘンバッハ様、ライヘンバ……ホアーッ!」
「あぁ、チクショウまただ……! おい、彼女を押えろ!」
「落ち着いたと思ったらこれだ! 誰か神官を呼んできてくれ!」
「組合長も呼んでこい! ……今日だけで10回、10回だぞ!?」
「……部下が取り乱して済まない。組合長のプルトン・アインザックだ。続きは私から話させてもらおう。ライヘンバッハ氏はエ・ランテル冒険者組合が信を置いている稀有なワーカーだ。と、言うのも遭難した銅級冒険者の救助や、情報提供などの支援活動で多く助けられて

いるからな。彼女の困ったところと言えば『天然の女たらし』である事。そして、今回の件もそれに伴ったものなんだが……、まぁ、つまりは結果論的にはなるが何も問題は無かったということだ。うん」

「ほ、ホアーッ！」

……あの受付嬢の娘すっごい緊張していたみたいだが、一体どうしたのだろうか？

最後の方なんて顔が真っ赤だったし。

それはそうと、……うーん、『トブの大森林』かぁ～……。

カルネ村の近くじゃないですかヤダーっ！

こ、これもいつぞやの「世界の修正力」、っていうか「とっとと巻き込まれて来い」的な思惑が見え隠れしてる気がする……！

チクショウ！いつの間に大〇洋は存在Xに変化したんですわよ!?

作品が違う、作品が！違う！ですわ！

作品自体は好きだけど！

んぐぐぐ……。

このままカルネ村をスルーすれば、……すれば。

出来るわきゃあねーですわっ！

見えている脅威を前にっ！

下々の民を見捨てる!?

敵に領土を好きにさせる!?

『善き貴族』がそんな事出来るわきゃあねーですわよっ！

正体を『ライヘンバッハ』と偽ろうとも！

私はボウロロープ侯『クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ』ですわ！

やってやりますわ。

あぁ、やってやりますわよっ！

やってやるからにはトコトンやってやりますわっ！

どうせなら『あの場』に集うすべてのど肝を抜いてやるくらいに、
世界の羨望が私にだけ向けられるくらいに！
うおおおお！何か自分を叱咤激励したらパワーが高まってくる気がしてきましたわ～！
でもその前に、
「まずはルガート・ソロン探しだっ！」

ルガート・ソロンはエ・ランテルに帰還する道中のところを運良く見つける事ができた。
事情を話し、手紙を代筆してやり、手数料を渡してエ・ランテルについたら直ぐに手紙を送るように言って別れた。
見た感じも特に病気や怪我をしている様子もなく、順調な冒険者ライフを充実しているようだった。

……はいっ、という事でお仕事お終いですわっ！
早速向かうはカルネ村！待ってろよ生エンリと生ネム～！ですわっ！
どうでも良いけど生ネムと生ハムって響きが似てるですわー。

「……それはそれは、わざわざエ・ランテルから来ていただきありがとうございますライヘンバッハ様」
「ええ、噂と言うには物騒に過ぎますので暫く滞在させてもらっていいでしょうか？もちろん皆様にご迷惑はおかけしません」
愛馬を走らせカルネ村に辿り着いたのは夕刻に差し掛かった頃。
ライヘンバッハとしての身分を明かし、「所属不明の武装集団の噂」の調査で訪れた事を村長に告げた。
ここ迄来る間に見かけた開拓村も幾つかあったがその様子は全くの平穏そのものだ。
やはり私兵部隊による定期巡回の効果が出ているのは確かだ。
……考え過ぎだったのだろうか？

「……わかりました。さきほどご覧いただいた通り、村は収穫期の真っ最中です。そんな物騒な輩が居るのなら私達としても貴方様の滞在は願ったり叶ったりというもの。どうかよろしくお願いいたします」
「こちらこそ、よろしくお願いします村長様」
こうしてその日は終わりを迎えた。

深夜未明
王国領内某所
「ベリュース隊長、あの村の周辺も王国兵が巡回しています……！ここは法都に戻り、指示を仰いだほうがいいのでは……？」
「法都に戻るだと……？すると何か？貴様は俺に恥をかいて来いと言っているのか？」
「い、いえ！そういう事ではなくこのままでは作戦の続行自体が危ぶまれます！糧食も志気も限界があるのです！」
「だったら近くの村から奪えばいいだろ！いいか、俺は隊長だぞ？俺がやると言ったらお前らはやれば良いのだ。つまらない事で俺の機嫌を損ねるんじゃあないっ！」
「っ！……はい、大変失礼しました。隊員には引き続き周囲の偵察をさせます」
……クソッ、親が資産家である事しか取り柄のない無能な隊長め。
糧食を近くの村から奪えだと？王国の警備が厚いという話を聞いていなかったのか!?
そもそも何で王国の兵士が巡回しているんだ？
軍事演習が行われるなんて本国から齎された情報には無かったはずだ。
予想外続きでイライラする。
それもこれもあのバカが隊長になってからずっとこのザマだ。
「グランプ副長！見つけました！王国兵士が巡回していない開拓村です！」
「なに……そいつは本当か？」

「はい、トブの大森林付近の村です！村の手前で部隊が引き返していったので間違いないかと」
「わかった。俺は隊長に伝えてくる。朝方から作戦を開始する可能性もある。お前たちは早めに休んでおけ」
「はっ！」
……予想外の妨害に糧食不足、それに伴う志気の低下、更にはバカ隊長。
もう部隊の不満は爆発寸前だ。
名も知らぬ村よ、済まないが俺たちの不満の捌け口になってくれ……。
全ては人類存続の為、悪く思うな……。

翌朝
カルネ村の空き家
「主武装の白鯨丸、副武装がショートソードが二本、投げナイフが２０本、クロスボウが一つとボルトが４０本……。陽光聖典との連戦も想定するとギリギリ足りるか微妙ですわね……」
カルネ村襲撃事件は大きく二段階に分かれていますわ。
一段階は帝国兵に偽装した法国兵士の集団。
しかも魔化した武装持ちですわ。
武具のクオリティという面なら負ける気はしないけど、やっぱり数が問題ですわね……。
私は村の損害を抑えつつ敵を殲滅しなければなりませんわ。
その次は歴戦の陽光聖典。原作通りの展開になればアインズ様の舐めプタイムだけど、それにはキーマンたる戦士長ガゼフ・ストロノーフの存在が不可欠。
それこそ私とアインズ様が接触することで何が起きるかなんて分からない。
最後に頼りになるのは己のみ、迷わば死、ですわ……。
「うーん、後ろ向きなことを考えてても仕方ねぇーですわ」
とりあえずやる事はやってやりましてよ！

ベストを尽くせーっ！ですわっ！

「ふっ！っせい！やぁっ！」

投げナイフとクロスボウ以外の武装での型稽古。

しっかりと残心を取りつつ、挙動の一つ一つを確認する。

白鯨丸は刺突を封じる代わりに打撃と斬撃の二属性を繰り出せる剣、その重心は先端にある為、振るうたびに全身の筋肉に程よい刺激を与える。

ショートソードは……まぁ、至って普通のショートソードだ。何十、何百と打った内の二振りで、これと言った特徴がない。

故に特徴が無く、真っ当に基本的な拵えで有ることが長所だ。

ショートソード二刀流？

ないないない、それはない。

咄嗟の行動が取れなくなるし、何より恰好だけで「私は剣しか振れない」と喧伝するようなものだ。

剣も振るう、拳も振るう、場合によっては投げて、組み付き、飛びかかる。

何でも出来て初めて一流を名乗れるというもの。

まぁ、「剣を振るうだけで何でも解決する強者」ならば話は違ってくるのだろう。

近いうちにそんな人に会いそうな気がするが。

……それにしても空気がクッソうめぇですわっ！

この世界の文明が停滞しているってのもあるけど、早起きするだけで価千金、三文どころじゃないですわ！

「きれい……」

むむ、何奴。

「あ、ご、ごめんなさい！邪魔をする気はなかったんです！」

おや？

おやおやっ!?

あの方はもしやっ！

エンリ・エモットさん!?

「……お気になさらず結構ですよ。まぁ、見ても面白いものではなかったでしょうが」
「い、いえいえ！とっても綺麗で格好良かったです！」
「ふふっ、それはどうも。見たところ貴女は……、カルネ村の方ですか？」
「は、はい！エンリ・エモットといいます！」

おぅふ、エンリさんメッチャ慌ててるでゴザですわよ。
私もメッチャパニックだけど。
だって生エンリよ？
テンション上がりますわよね？
バイブスがアゲ→アゲ→になりますわよね？
実際に私はなってますわＹＯ！Ｆｏｏ！
「エンリ・エモット……いい名前ですね。私はライヘンバッハ、昨日この村にやって来たワーカーです。お見知りおきを」
「あ、ありがとうございましゅっ……～～っ！」
あ、噛んだ。ですわ。
「へぇ、エンリさんは毎朝の水汲みが日課なんですね。大変じゃないですか？」
「慣れちゃいました。それにうちの男手はお父さんだけですから私がその分働かなくちゃいけないので」
「親御さんはいい娘さんを持たれた様ですね」
「えへへ……。でもライヘンバッハさんも凄いですよ。戦うことについてはよく分からないですが、さっきの動きも凄いキレがあって……物語の英雄って感じで！」
「ははは、……実はあの動きにはコツがあるんです。知りたいですか？」
「……是非！」
「それはですね……」
「それは……？」
「慣れることです」

「〜〜っ！も〜、からかってますね!?」
「いやいや、でも本質はエンリさんの水汲みと一緒なんです。『やらなきゃならないならやるしかない』、最初は木剣をひたすらに振って、次は姿勢が崩れないような足運びを意識して木剣を振って、木剣を鉄の剣に変えてひたすら振って……強くならざるを得ないからこそ続けられたんだと思います」
「……ライヘンバッハさんが強くなりたい理由って何なんですか？」
「それはですね、……っ！」
　エンリとの会話に水を指すように周囲の空気が変わった。
　帝国との戦争で幾度も感じた殺気。
　それがこの村に近づいている……！
「ど、どうしたんですかライヘンバッハさん……？」
「エンリ、村に戻って皆に伝えてください。『村に賊が接近している』と」
「ぞ、賊って……なんで!?」
「落ち着きなさい！良いですか、奴らはこの村を荒らし尽くすでしょう。私が奴らの注意を惹きますが漏れが出る可能性があります。貴女は直ぐにこの情報を村の皆、そして村長に届けて襲撃に備えてください」
「は、はい！」
「大変良い返事です。さぁ、時は金よりも大切です！すぐに行きなさいっ！」
「はいっ！」
　……これはいよいよナザリックとの邂逅ですわね。
　この２０年、この日よりも未来の為に準備をしてきましたわ。
　爵位を得た、工房を得た、ワーカーとしての地位を得た、偶然と言えど魔剣も拵えた。
　そして……「ライヘンバッハさん！」
「ライヘンバッハさん！また、また会えますよね!?」
「……無論です。後で手を痛めない拳の握り方をお教えしましょう」

……良い人脈も築く事が出来ましたわね。

さぁ、やってやろうじゃありませんの。

法国も、ナザリックも、ど肝を抜かれる準備をしてやがれですわっ！

年末特別編　キャラ紹介

《クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ》
若しくは
《ライヘンバッハ》
年齢：21歳
我らが主人公たる万能お嬢。
王国六大貴族の一家「ボウロロープ家」の長女であるが、その正体は原作知識持ちの転生者。
「製造した武具の性能が向上する」というタレント持ちで、「生き残る」という目的の為の手段としてリ・エスティーゼ王国の運命を変えようと奔走する。
ご存知「～ですわ」口調が特徴だが、本人が知るお嬢様ムーブ・ボキャブラリーの限界である。
許せ。
「ライヘンバッハ」はワーカーとしての名前であり、由来は「ライヘンバッハの滝」。響きだけで名乗っているというハーメルン中のシャーロキアンがブチギレ必至なセンスの持ち主だ。
すまんな。
彼女自身が提唱する『善き貴族』とは、即ち「暴れん坊将軍」の様に市井に紛れて悪を挫き、さり気なく「高貴なる者の使命」を全うする貴族を指す。
『善き貴族』の実践者である彼女の活動資金はワーカーの報酬と工房で製造した武具の売上が4割、残りは父親や自信家の貴族を図上演習で負かせた際に毟りとっている賭け金である。
ア○ギか。
戦闘能力が高く、10歳の時には二周り程の体格差のあったバルブロをワンパン（ナックルダスター装備）で沈めるに始まり、今では転○華を極めてみたりとモンクやアサシンへの適性が高そうである。
他にも剣術、弓術、棒術、暗器術など複数の武術を実戦レベルにまで極めている。

本人に自覚は無いがアダマンタイト級と渡り合える実力が備わっている。
クロエ……恐ろしい子！
「クロエの３０の真実」という都市伝説が国内外に広まっている。本人も否定し辛いものが多いため、黙認状態だ。
クロエって一体なんなのか教えて頂戴！
駄目だ。
駄目ぇ!?もぉーヤダ！
※※※※※※※※※※※※
《バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフ》
年齢：２５歳
みんな大好きバルブロお兄さんだ。
リ・エスティーゼ王国国王、ランポッサ三世の嫡子である。
クロエの旦那だが、彼女との経験は済ませられてない。
というか済まさせてくれない。
だってクロエが強過ぎて、ベッドイン出来ないんだもん。
ばるぶろ。
「クロエを組み伏せてやる」という目標を持っているが、正面からでは勝ち目はないと悟り（↑ここスッゴイ重要）、練兵場の隅で真面目に鍛錬を行う彼の姿が目撃されている。
幼少期のトラウマからか、クロエに対する危機感知能力が高い。遠く離れていてもクロエと他人の声が聞き分けられる。
クロエと過ごすうちに耐久力と逃走能力が格段に上昇した。
耐久面では「天然の要塞」と称される筋肉の瞬間的引き締めにより、どの様な打撃にも一度は耐える事ができる。
逃走能力においては、一度受けた攻撃を「見切る」事が出来るようになった事で「カウンターを放った後に逃走」という王道を見出している。
やっぱスゲェよバルブロは。
少なくとも原作よりは生存能力が高くなった。
周囲が思っている以上に思考力は高いが生まれつきのプライドの

高さ、慢心、間の悪さのせいで、活かせないどころかマイナスに働く事が多い。
最近は城下での目撃談が多くなり、渋々と民衆の手伝いをしたりする彼の姿を好意的に捉える意見が多くなってきている。
頑張れ、バルブロさま……。
※※※※※※※※※※※※※※※
その他のキャラクター
ボウロロープ侯
クロエのお父さん。バルブロのお義父さん。
王座簒奪に興味津々だが影が薄い。
ミリオタで私兵団の増強が大好きな軍拡おじさん。
このままだと死ぬ。
レエブン侯
親バカ一代。
親バカになる前は王座簒奪に興味津々だった。
リーたん命。リーたんＬＯＶＥ。
リーたんガチ勢。
ラキュース
クロエを「お姉様」と呼ぶ『蒼の薔薇』の鬼リーダー。
ライヘンバッハの正体には気づいておらず「クロエの知人」だと認識している。
厨二病はクロエが育てた。
将来はクロエと即席魔剣使いコンビとかやってみたいと思っている。
ティア
『蒼の薔薇』のレズバーサーカー忍者。
ライヘンバッハの女たらしムーブで衆人環視の元キマシタワーを建てられる。
王都で燃える。
ティナ
『蒼の薔薇』のノンケバーサーカー忍者。

まだ大人しい。
ガガーラン
『蒼の薔薇』のアメコミヒロイン担当。
アダマンタイト級冒険者の名に恥じぬ強者。
王都で燃える。
イビルアイ
『蒼の薔薇』のピュア担当。
仲間想いのイイやつ。そして面白ぇ女。
後にモモンの事がいっぱいちゅき……、になる。
クロエ・ビダッダン（オリキャラ）
クロエが男の名前で悪いかよっ!?
異様なスタミナ持ちの大工。
彼女持ちのリア充。
八本指の兄貴（オリキャラ）
ライヘンバッハの襲撃の生き残り。
両手の指が8本しかない。
事実を脚色しようとして、後日両足の指も切断してみたが、靴を履いているため誰にも気づいてもらえない。
八本指の兄貴の子分（オリキャラ）
八本指加入から2年3ヶ月の中堅。
結構な情報通。
兄貴が足の指をわざと切断した事を知っているが口には出さない。
ワイアット君（オリキャラ）
芋料理のプロ兼クロエ専属の執事。
え？逆？
こまけぇこたぁいいんだよ。
見習い君（オリキャラ）
CV・西村朋紘っぽい見習い職人。
歌舞伎っぽいからと言って傾奇者ではない。
親方（オリキャラ）
CV・大塚周夫っぽい熟練の鍛冶職人。

趣味は手相占い。
カレン・ナンダー（オリキャラ）
ＲＲＳ（ライヘンバッハ・リアリティ・ショック）の影響で日に１０回発狂する体質になった。
仕事はそつなく真面目にこなすタイプ。
コレンという名前のお兄さんがいる。
ルガート・ソロン（オリキャラ）
ミスター親の心子知らず。
尺の都合で喋らせてもらえなかった。
核バズーカを強奪しそうな名前だけどそんな予定はない
エンリ・エモット
クロエのテンションアゲアゲ要員。
後の覇王である。
ライヘンバッハとのキマシタワー建てたい……建てたくない？
ベリュース
原作で４パターンの死に方をする名誉クズ。
やっぱりここでも死ぬ。
おかねあげましゅ。
１０万ドルをＰＯＮ☆とくれたらお前を殺すのは最後にしてやろう。
ロンデス
ベリュースが隊長でみんな不安よな。
ロンデス、動きます。
でも死ぬんだよなぁ……。
大○洋（偽）、コージー○田（偽）
フザケた転生茶番の仕掛け人。
許さんからな。

法国偽装部隊殲滅戦

俺たちに下された任務は『王国領内における偽装工作』、帝国兵士のフリをしてただ荒らし回るだけの簡単な仕事だった。
そう、簡単な仕事のハズだった。
一体どこでケチがついたのか。
任務が下された時からか？
あのドラ息子が隊長に任命された時から？
それとも、「あの村」を標的にしてしまった時か？

あの日、俺は「地獄」を見た。

「総員傾注！」
早朝、ロンデス副長が作戦内容を伝達した。
標的の村は昨日、ニムデが見つけたトブの大森林に隣接した開拓村だ。
「標的の村は王国兵士の巡回ルートから外れているとはいえ敵地だ！目的を達成次第即時撤収を心掛けよ！」
伝達が終わると隊長、つまりベリュースのクソ野郎が号令を出し全員が村目掛けて馬を走らせた。

「隊長！進路上に騎影確認！排除しますか!?」
「当然だろう！どうせあの村の人間よ、死ぬのが早まっただけだ。射手、射撃用意！放てぇ！」
行動開始から暫くして前衛集団から騎影確認の報が入り、即座に射撃命令が下った。
弓騎兵２０名による集中射撃。
それで馬諸共に射殺せるはずだった。
そう、「はずだった」のだ。
「き、騎影接近開始！射撃効果無し！」
前衛から入った報告は攻撃失敗と敵の接近を知らせるものだった。

その時部隊に動揺が広がったのは今でも覚えている。
「ば、馬鹿な……射手っ！放てっ、やつを俺に近づけさせるなぁっ！」
「射手！直接射撃用意！放てぇっ！」
パニクったベリュースに代わり、ロンデス副長が射撃の号令を出す。
弓騎兵部隊と前衛が入れ替わり、目標めがけて矢を放つ。
その直前、誰かが確かに呟いたのだ。
「……あれはツノか？」
「ツノ」の意味は直ぐに分かった。
俺達に接近する騎手は、額から一対の角を生やし、
顔には幾数もの赤い筋が走っており、まさに「悪魔のような」という形容が相応しいものだった。
「あ、亜人だ！敵の騎手は亜じゅっ」
隣にいたニムデが叫んだ。
そして俺が振り向くと、そこには額から矢羽根を生やした彼が静かに落馬するのが見えた。

「敵襲だ！敵はクロスボウを装備している！弓騎兵は各自散開し、狙いを定めさせるな！前衛は連携を駆使して奴に接敵せよ！」
「く、クソッ！お、お前ら！俺を守れ！奴を殺したら金貨３００枚をくれてやるっ！」
ロンデス副長が指示を飛ばし、ベリュースが叫ぶ。
当然俺達は副長の指示に従い、行動を開始した。

攻撃の要たる前衛から、まずは勇猛果敢な３騎が飛び出した。
３騎は実の兄弟で連携攻撃にかけては部隊一の腕前を持つ。
その異名は「三連星」。
いつかは六色聖典のいづれかに配属が決まると有望視されている期待の隊員達だ。
「マージュ、ドルテガ。いつものヤツを喰らわせてやれ」

「応とも！」
「よしきたぁっ！」
三連星が縦列で敵に接近する。
それは彼らが最も得意とする必勝の型。
先頭のドルテガが盾で攻撃を弾き、後詰めの二人が反撃を仕掛ける
いつもの流れ決まると思っていたが、そのアテは外れた。
「なっ…、」
「と、跳んだっ……?!」
「……いかん！回避しろドルテガ！」
乗馬から跳び上がった敵に対し三連星の長兄、イアーガが前衛のドルテガに叫ぶも、彼は跳んできた敵に盾諸共蹴り飛ばされ、
後ろに居たマージュを巻き込んで落馬した。
「ドルテガ！マージュ！」
イアーガが落馬した二人に声を掛けるも反応は返ってこなかった。
跳んだ敵はというとドルテガが乗っていた馬を奪い、後方の部隊に襲い掛かろうとしていた。

「「うおおおおっ！」」
死に物狂いで前衛の隊員たちが剣を振りかざして接敵を試みる。
俺たちが装備しているのは魔化された武具。
並の斬撃なら平気で防ぐ事のできる特別品だ。
いくら身体能力が高かろうと数の暴力に掛かれば一溜りもない。
今度こそ勝負あったと確信したが、直ぐにそれが誤りだった事を見せつけられる。
「ウソだろおい……」
「ば、化け物……化け物っ！アイツは化け物だっ！」
ちょうど俺が思っていた事を他の隊員が口々にする。
敵はショートソードを手にし、前衛の中から抜け出してきたのだ！
その剣には血が付着するも、当の使い手は負傷した様子もなく、返り血もほとんど浴びていない。
逆に前衛はというと無残の一言に尽きた。

接敵した隊員が次々と力無く落馬していったのだ。
ある者は首から上が消え、
ある者は胴より上が消え、
五体が無事のように見えた者は首から血を吹き出させて、
皆が皆、力無く落馬した。

目の前に残ったのは敵の姿と屍の山のみ。
前衛は壊滅、残るは俺たち弓騎兵とグランプ副長、ベリュース、そして……
「マージュとドルテガの仇いっ！討ち取ってくれるわぁっ！」
今まさに再度接敵せんと戦斧を担いだイアーガだ。
「……き、弓騎兵！各自イアーガを援護せよ！同士討ちに注意しろ！」
最早ベリュースは戦意喪失、グランプ副長が悲鳴にも似た声で必死に指揮を取る。
俺を含めた弓騎兵は各自のタイミングで弓を放つ。
敵はショートソードを巧みに四方八方から操り飛びかかって来た矢を切り落とす。
「ダアァッ！防ぐんじゃあないっ！」
イアーガも射撃の合間を縫って攻撃を仕掛けるも、全てがショートソード一本に防がれる。
そしてその間に近付かれた弓騎兵たちが一人また一人と敵の凶刃とクロスボウの餌食となった。
「イアーガ！冷静になれっ！……クソッ！ジーズンっ、俺を援護しろ！ヤツがイアーガに気を取られている内に俺がとどめを刺す！」
「り、了解！」
グランプ副長が俺に指示を出し、一目散に敵目掛けて吶喊した。
俺は弓を引絞り、イアーガの攻撃を防ぎつつ他の隊員達を手にかける敵の背中を見た。
この距離なら絶対外さない。
そう思ったとき、やっと俺は敵の正体に気が付いたのだ。

角の正体は額当ての装飾であり、
顔中の赤い筋は戦化粧であり、
そしてその額当てと戦化粧の下には女性特有の柔らかな肉感を備えた輪郭があった。
そう、俺達が亜人だ化け物だと呼び、
部隊の半数以上を葬った敵の正体は、
「お、女……？」
女だった。

「ジーズン、ジーズン！援護はどうしたっ!?」
グランプ副長の怒声で意識を取り戻した俺が最初に見たもの、それは副長の首を刎ねようと剣を振り上げた女の姿だった。
「副長っ！後ろだぁっ！」
咄嗟に俺は副長に警告していた。
だが間に合わなかった。
俺の言葉に従い、副長が後ろを振り向こうとした瞬間、副長の首は宙高く舞っていた。
あの時俺の手は弓を構えたままだった。
警告ではなく、弓を放っていれば少なくともグランプ副長は生き延びたはずだ。
「ふ、副長おおおぉぉぉっ！」
イアーガが悲鳴にも似た声とともに女に戦斧を振り下ろした。
その一撃は女を捉えることはなかったが、乗馬に傷を負わせることに成功した。
女は激痛に身をよじらせる乗馬から投げ出されると、猫かと見まごう軽やかな着地を決め、イアーガに目を向けた。
対するイアーガも女から距離を置き、両者は睨み合う形となった。
前衛部隊残存兵力、1。
弓騎兵部隊残存兵力、1。
無能、1　。
最早部隊に作戦実行能力は無く、この場を切り抜けられる戦力はイ

アーガただ一人。
「俺は！栄えあるスレイン法国、『三連星』が一人！イアーガ・ゼィオン・ドム！苦楽を共にした亡き兄弟、ドルテガとマージュ、そしてロンデス・ディ・グランプ副長の仇討ちを果たさんがため！貴公に決闘を申し込む！」
馬上のイアーガが戦斧を女に向けて高らかに宣言した。
わざわざスレイン法国の所属である事をバラしてまで。
だが、この場の誰が彼を責められようか？
もう作戦もクソもない。
俺たちの命運はイアーガの実力に賭ける他ないのだ。
イアーガの名乗りから暫くして、今度は女がそれに応えた。
「……我が名はライヘンバッハ！忠を尽くすべき祖国、リ・エスティーゼ王国と、我が友クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープの名誉にかけて！イアーガ・ゼィオン・ドム殿、貴公の申し出を受けよう！」
高らかな名乗りと共にショートソードを捨て、背中に担いだ得物に持ち替え、イアーガに向けた。
その得物は処刑人の持つ断頭剣に似た鋒の無い片刃剣。
女が「ライヘンバッハ」と名乗った以上、その得物の名は明らかだ。
魔剣「白鯨丸」
王国六大貴族の出自である異色の鍛冶師、クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープが上質な骨材と鉱石のみで拵えた最新の大名物。
「王国きっての強者とは、相手にとって不足なし！いざ尋常に勝負！」
「……参られよ！」
先ず仕掛けたのはイアーガだった。
馬の背に足を掛け、戦斧を大上段に構えライヘンバッハに躍りかかった。
対してライヘンバッハは鋒を後方に退き、
左半身をイアーガに向けた独特の構えで迎え撃つ。
「『能力向上』！うおおぉっ『斬撃』っ！」
「……っ！」
掛け声とともに、武技の威力が上乗せされたイアーガの戦斧振り下

ろされた。
気迫、姿勢、タイミング。
三つ全てが整った、武人が振り抜くには最高の一撃。
「フッ！」
しかし、その一撃はライヘンバッハに届かず。
ライヘンバッハは左半身を僅かに退き、その動きに合わせて構えた剣を一息に振り上げた。
その動きには一切の無駄がなく、勇猛果敢な雄叫びもなく、基本の所作と言えるほど単純明快な一振りだった。
イアーガの戦斧とライヘンバッハの魔剣が衝突すると周囲の空気を震わせる程の衝撃が走り、
イアーガが宙に打ち上げられた。
その手に握られた戦斧は粉々に砕かれ、その顔は驚愕の表情を浮かべていた。
これがライヘンバッハ、これが魔剣の強さかと驚いている内に、ライヘンバッハはイアーガにとどめを刺さんと、振り上げだ魔剣を巧みに操り、横一閃に薙いでみせた。
「我流・白鯨尾撃」
あの時ほど自分の目の良さを恨んだことはない。
魔剣が落下してくるイアーガを捉えた。
魔化された鎧にその刃が当たると古い床板が軋む様な音が響き、直後には肉の引き裂かれる音へと変わった。
軋む音は鎧が破壊される音、肉が引き裂かれる音はイアーガ自身が切られた音、
彼の上半身と下半身がそれぞれ宙で回転する様を見ながら音の正体を認識した。
胴を真っ二つにされたイアーガは、その衝撃の強さから眼球が飛び出し、切り口以外からも血を吹き出して絶命した。
「イアーガだった物」が地面にゴロゴロと転がり落ちた後、ライヘンバッハは魔剣に付いた血を振り払い、俺とベリュースを一瞥した。

一縷の希望が、絶たれた。
「そこの、貴様がこの部隊の隊長と見た。違うか？」
彼女の目当ては隊長、つまりベリュースだったようだ。
俺の視線も自然とベリュースへと向けられる。
そして当の本人はというと、
「ひ、ヒイィィヤアァァァッッ!!?」
まるで蛇に睨まれたカエル、いや、あれは声も出せない様を表す言葉だ。
ベリュースだ、大蛇に睨まれてマジで究極にビビっているだけのベリュース。
まだこんな冗談を考えるだけの余裕があるのかと、自分の事ながら驚いた。

「叫んだところで何もわからんでしょう。はい、いいえ、どっち？」
「は、はい、はいいっ!?おれ、いや私が隊長のベリュースでしゅうぅぅっ！おた、お、
おたしゅけ、おたしゅけくだしゃいぃ～っ！」
「……そこで大人しくしなさい。下手に動かなければ命は保証します」
「ハイハイハイハイハイ！ハイぃぃ～っ！」

どこか呆れたような様子でベリュースの痴態から目を逸らすと、その双眸は俺を向いた。

「彼が自身を隊長だと言っていますが本当ですか？」
「は？あ、は、はい。あいつが、いえ、確かに彼が隊長のベリュースです」
「そうですか……。事の責任は彼に取らせますので、貴方はもう自由です。王国臣民を襲わない限りという条件付きですが」
俺はその言葉に驚いた。
俺が、自由？

「こ、殺さないのか……？イアーガ達みたいに？」
「既に勝敗は決しているでしょうが。これ以上はただの虐殺です。そして責任の所在が分かった以上、これ以上の殺しは御免です」
「俺がアンタを背中から刺殺すかもしれないぞ……？」

彼女の言葉に反射的に強がった瞬間、酷く後悔した。
相手は魔剣の使い手たる強者。
何故機嫌を損ねるような事を言ってしまったのかと。

「フフッ、フククッ……」
すると彼女は口元を抑えて笑い始めた。
「あいや失礼。ククク……私にそんな強がりを言う人が他にもいただなんてって思って。……うん、その心意気だけは認めましょう。ですが……」
次の瞬間、腹部に衝撃が走った。
彼女の鋼鉄に包まれたつま先が鎧をへこませ、腹にめり込んだ。
「……うちの旦那くらい逞しくなってから言いなさい、ですわ」

意識が遠のく瞬間、彼女が何かを呟いたが、その真意を知り得る術は無かった。

3週間後
バハルス帝国　帝都アーウィンタール
「それで、例の射手の様子はどうだ？」
「はい、意識回復後はこちらの調査にも協力的であり法国側からも接触の兆候はありません。聞き取り内容については『ライヘンバッハ』からの告訴状と一致している為、ほぼ間違いないかと」

「ふん、またライヘンバッハとはな……。分かった、引き続き射手は重要参考人として丁重に扱え。たとえ『奴隷のエルフ』だとしても、だ」
「はっ！」

ライヘンバッハが『エルフの射手』を送り付けてきてから3週間。
私、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エル＝ニクスは決断を迫られていた。

「ロウネ。この件、改めて帝国はどう動くべきか？」
「結論から申しますと、こちらでの調査が終わり次第、射手の身柄は王国に引き渡すべきかと」
「それは法国への牽制の為、という事だな？」
「その通りです。此度の件は帝国王国間の問題として片付けるには複雑すぎるかと」

ロウネの言う通りだ。
帝国兵に扮した法国の偽装部隊。
これは厄介な問題だ。
軍部を問いただすも、不正規戦を含めて法国への武具供与を行った記録が無いのだから。
そして、更に厄介なのが……

「エルフによる奴隷兵部隊、か」
「法国に精通している行商や国内のワーカー等にも問い合わせましたがその様な話は出てきませんでした。人類至上主義を掲げている以上表に出せない部隊という事か、ライヘンバッハの妄言か……。私は前者だと思います」

「まぁ、生き証人を持って来られてしまえば存在を信じざるをえんだろう。しかし参ったな、これで我が国の奴隷市場に工作員として紛れ込まされている可能性があると考えなければいかんとは」

これには私だけでなく報告を受けたすべての人間が衝撃を受けた。
勿論フールーダを除くが。

連れてこられたエルフの射手は市場の奴隷と同じように長い耳が切らており、更に洗脳を受けた痕跡があった。
当然市場に出回るエルフ奴隷は法国から連れてこられる。
その中にこうした軍事訓練を受けた存在が潜み、国内に放たれてしまえば大損害を生じるだろう。
そこまでを見通してか、告訴状の中にも「奴隷市場に注意されたし」とでかでかと書かれていた。

「……よし、引き続き法国への警戒は厳とせよ。但しあちら側に悟られぬようにだ。射手については取り調べが終わり次第警護をつけて王国に引き渡せ」
「承知しました」

今回ばかりは秘密主義に走ってきた法国の非だ。
帝国がその尻拭いをする謂れもない。
そしてこのまま王国に戦争の大義を与えるべきでも無い。
であれば、両国ともに法国の被害者であるという立場を取り、その責を法国に取らせるのが最良の選択であろう。
この選択が行えるのも王国に「あの女侯」があってこそだ。
――呼びましたかしら～？
「!?」
「……どうかされましたか陛下？」
「い、いや。何でもない、うむ」

……いや、居るわけ無い。無いったら無い。
あの時みたいにな事が何遍もあってたまるか。

……一応後で四騎士に見回りさせとこ。

ベリュース、死す

「お、おいそこのお前ら！この女を殺せぇっ！金ならやるっ！金貨せんピェッ」
「え？」
「えっ」
次の瞬間、ベリュースの頭があった場所から血煙が生じた。
つまり、意味するところはベリュースの死だった。
……ですわ。

サ○スパーク的シチュエーションめいたセリフを言わねばならぬという電波を受信した私は
「……なんてこった！ベリュースが死んじゃった！」
と言い、
その発言を受けて死の支配者は
「この人でなしっ！」
と言い、
「騎士団長殺し」ならぬ「ベリュース殺し」をやってのけ、元ネタも分からず予想外の非難を受けたサキュバスは
「人でなしって私のことですかモモンガ様？」
と言って困惑した。

はい、それでは状況を全く理解できていないだろう読者諸氏と初めて本作を目にしたオーバーロード二次創作愛好家諸氏の皆様のために、ここまでのあらすじ＆ａｍｐ；ベリュースＤｉｅジェストを紹介いたしますわっ！

突如水曜どうでしょう的な茶番の結果「オーバーロード」の世界に

転生し、
更に没落確定枠のボウロロープ家に生まれた私「クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープ」。

何もしないままだと大体原作１０巻までの間に死亡または死すら生ぬるい地獄が確定しているので「王国がナザリックと衝突ルート」を回避するために爵位を手に入れたり、周囲に秘密でワーカー活動をしたり……振り返ってみると結構好き勝手にやってますわね私。

そして行き当たりで法国によるカルネ村襲撃を防いだ私は「エルフの奴隷兵」の事や私が原作知識として把握していない事をベリュースから聞き出そうと尋問をしていたところで冒頭のシーンが発生しましたの……。

「あ、アルベドよ……さっきのは違うのだ。こう、つい反射的に、な？別にお前を非難する意図などは無かったのだ」
「いえ、如何に下等な人間と言えど許しをいただかず、感情に任せて殺してしまったのは私の不始末！このアルベド、いかなる罰も受ける所存です！」

もうかれこれ一時間は同じような問答を続けている二人組は皆さんお待ちかねのモモンガ様とアルベドさんですわ。
私的には「あー、やっぱり来るよね。これオバロだもんねー」って感じですわ。

ベリュースの死因は頭部破裂。
彼の言動にブチ切れたアルベドさんが転がってた石ころを打ち放ったらしい。
恐ろしく素早い振りだったので私は見逃しちゃいましたわ。
まぁベリュースもベリュースで生存本能が強いというか何というか、所属不明の相手に何故命令口調で行けると思ったのか、これがわ

からない。
それにしてもモモンガ様、まさかサ○スパークを知っているとは思わなかったですわ。
果たしてギルメンの影響か、それともサ○スパークがあの世界で存続しているのか……。
というか世界観的に禁書指定されてそう。
だって全方位に無差別に喧嘩を売るのがウリのサ○スパークですわよ？

閑話休題。

「さて、お互い聞きたい事が山程あると思いますが……まずは自己紹介といきましょうか？」
「ええ、構いませんよ」
絶賛猛省中のアルベドさんの横でエルフの奴隷兵（担いだ際に兜が脱げて発覚した）を馬に載せて帝国領土方面に走らせて、遂に史上初のモモンガ様との非公式対談が開始っ！
私との接触がこの世界で最初の接触だったようで、当然のことながら嫉妬マスク無しのご尊骨顔に見続けられるのは流石に緊張しますが、
この２０年間、オバロ勢との問答想定とシミュレートは怠ってないですわ！
ぶっちゃけると「アッ！この問答進研○ミでやった奴だぁっ！」位にはお茶の子さいさいですわね。
オホホホホ。
え、他にやる事なかったのかって？
バッカお前ぇ、最初の接触でポカしたくないからこちとら命懸けじゃい。
「私はライヘンバッハ、王国でワーカーをしています。ここで彼らを

相手取ったのは、いわゆる一宿の恩と王国人としての義務ですね」
「ライヘンバッハさんですね。私は……モモンガ、魔法詠唱者です。それと異形種ですが敵対するつもりはありません。ところでワーカーというのは職業のようなものでしょうか？」
おー、予想通りワーカーの方に食いつきましたわね。
希少性に目がなく種族やカルマ値で価値観に影響が出ている分、さっきの戦闘について突っ込まれなくて良かったですわ。
ワーカーって名乗った瞬間、目が「キラッ」って光った気もしますし。
よぅーし、このまま乗り切ってやるですわよ！

※モモンガ　サーイド（ルパン・ザ・サードみたいな感じ）ワァオ☆※
どうも鈴木悟ことモモンガです。
私、「ユグドラシル」というオンラインゲームにハマっててたんですが、このたびサービス終了に伴いギルメンと最後の時間を過ごしたいと思ってたんです。
まぁ、結局最後は一人っきりだったんですけどね！
アハッ！
……で、気がついたらオーバーロードの姿でこの世界にＮＰＣとギルドごと移動していました。
ＮＰＣはみんな自我があるし、忠誠心もなまら高いし。
もう本当ね、混乱しまくりですよ。
まぁ、言うてもアンデッド特性ですぐ落ち着いちゃうんですけどね！
で、遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモート・ビューイング）の練習中に無双ゲーみたいな事になっている場所を偶然見つけた私は第一村人にインタビューを挑むノリでやってきたんですが……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
「お、おいそこのお前ら！この女を殺せぇっ！金ならやるっ！金貨せ

んピェッ」
「え？」
「えっ」
「……なんてこった！ベリュースが死んじゃった！」
「この人でなしっ！」
「人でなしって私のことですかモモンガ様？！」
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
反射的に現地人を殺してしまったアルベドに対して反射的にサ○スパーク的なリアクションをしてしまったんです。
確かにアルベドには悪いことをしたなとは思うんですけど、それでもやっぱり『人生の中で一度は言ってみたいセリフ』っていうのは誰にでもあると思うんですよね。
まぁ私の場合、人生ならぬ骨生ですが！
アハッ！
で、第一村人はライヘンバッハさんという先程の無双ゲー「していた側」の方でワーカーという職業らしく、こちらの質問にいろいろ答えてくれました。
カブキめいた化粧（本人曰く、敵への印象操作らしい）を除けば常識人で、「やんごとなき方」の支援を受けているあたりから、王国内でも有数の実力者であろうという事は伺える。
試しにステータスを覗いたらユグドラシルでも中堅くらいの強さみたいなので、この人を基準にナザリックの防衛機構やＮＰＣの装備を見直してもいいだろう。
あとライヘンバッハさんには悪いけど、情報収集用にシャドウデーモンをつけておこう。
いろんな場所を行き来するみたいだから役に立ちそうだ。
《モモンガ様、周囲に配置しているシモベから接近する魔法詠唱者の集団ありとの報せが入っています》
《ふむ、おそらくライヘンバッハに全滅させられた部隊の支援部隊か、それとも本命の部隊と言うところか……》
おっと、ショックから立ち直ったアルベドからメッセージが来た。

《アルベドよ、シモベ達には手を出すなと厳命しろ。この世界における対魔法戦闘を目にしてみたい》
《承知しました》
「……というわけで、冒険者が冒険できるような仕組みを作るという共通の理念が合致して「ライヘンバッハさん」はい？」
　周辺国事情を織り交ぜながら「なぜワーカーとして活動するのか」について熱弁していたライヘンバッハさんの話の腰を折るような形になって申し訳ないが（実際話が面白いので続きが楽しみだったが）、もう一働きしてもらおう。
「今しがた私の探知網に魔法詠唱者集団が引っかかりました。彼らが何かご存知ですか？」
「あぁ、あぁなるほど。もしかしなくてもこの偽装部隊の本隊かと……。そうか、やはり来るか」
　はぁ、と溜め息をつくライヘンバッハさんは意を決したように俺達に向き直った。
「モモンガさん、アルベドさん。ここは私個人で対処致します」
「ほう、加勢は不要と？」
「遥々異邦からお越しになられたお客人を、どうして家中の騒動に巻き込めましょうか。それに政治的な理由もありますが、ここはまず『話し合い』で納めてみようかと」
　話し合い……あぁ！『ＯＨＡＮＡＳＨＩ』か！
　すごいなぁ、サ〇スパークといい、意外にもネットスラング的な
「あ、もし脅迫的な交渉とか想像されているようでしたら、本当に紳士的な話し合いだけなので。そこまで腕力には自信ないですし」
　アッハイ。

※クロエのツターン！※
まぁ、うん。
ウスウスは、とてもウッスウスな極薄ですけど予想はしてましたわよ。
　陽光聖典までがワンセットですわよねやっぱり。

とりあえず隈取りメイクは落として、モモンガさんから教えられた方面に歩いていると『見慣れた』魔法詠唱者の集団が現れた。
「……ここで、何をしておられるのかな？ライヘンバッハ殿」
「それはこちらのセリフではないでしょうか？ニグン殿」
ニグン・グリッド・ルーイン。
スレイン法国特殊部隊「陽光聖典」隊長。
過去に数度、ライヘンバッハとして竜王国でのビーストマン間引き作戦で共闘しており、「対ビーストマン戦術研究同好会」の同志でもある。
そして、王国に侵入した理由は言わずもがな「王国戦士長」ガゼフ・ストロノーフの暗殺だ。
普段から神経質な表情のニグンだが、今日の彼は目玉をキョロキョロ動かして、どう言い繕おうか黙考中のようだ。
まぁ、ここは助け舟を出してやろうかしらね。
「あいや、法国の軍機で言えぬこともありましょうからこちらからお尋ね致しましょう。……脱走兵の捕縛では？」
「……は？」
「いやぁ、私の知り合いに国内保安に詳しい方がいるんですがね。どうも怪しい帝国兵が国境付近でウロウロしてるみたいだったのでもしやそれかと思って迎撃してみたら法国の所属だと口を割るもんですから、こっちも困惑していましたが……なるほど噂の聖典がわざわざ出張ると言う事で合点がいきました」
ニグンよ、察してくれ。
頼むから察してくれですわ。
お前らが後ろのオーバーロードと戦うと王国が、というか私自身の寿命がマッハ間違いないルートまっしぐらなのでそのまま回れ右してくれくださいお願いします一生のお願い何でもしますから。
「……流石は王国の誇るライヘンバッハ殿。その通りだ」
「隊長!?」
「そこまで理解されているのであればこちらも隠す手間が省けるというもの。まずは我が国のものが貴国にご迷惑をおかけして申し訳な

かった。そして、ご助力いただいた事に法国を代表して感謝を」
ふ、ふいぃ～……。
感謝したいのはこっちの方ですわよニグン。
相変わらず苦虫を咬み潰したような顔はキープのままですけど……。
よし、このまま世間話からのさよならライオンまで一気に畳み掛けますわ！合わせろよニグン！
「いえ、貴殿らには竜王国にて幾度も助けられた身です。この程度ではまだまだ帳尻が合わぬというもの」
「ハッハッハ、ライヘンバッハ殿はあいも変わらず謙虚ですな。それでは……王国戦士長にも竜王国にお越しいただくというのでチャラではどうだろうか？」
「あの御仁を引っ張り出すのであればそれこそ国王陛下に言上しなければなりませんが……やはり逼迫していますか、かの国は」
「うむ、戦術研究同好会の最新の見立てではもってあと数年で呑み込まれるかと」
「いつも通り物資も時間もない、ですね……。わかりました、侯爵にもお伝えし、可能な限り帝国との戦争を避け、竜王国への支援を行っていただくよう掛け合っていただきます。……なので不要な手出しはされぬ様、ぜひともお願いします」
うーむ、竜王国もなかなかに危ういですわ。
ナオトダテ名義で支援はしてたけど、やはり人材の損耗が激しいか。
やはりここはジルクニフとも会談が必要になりそうですわね。
「！……わ、わかりました。ライヘンバッハ殿のお言葉、一言一句漏らさず法国にお伝えしよう。それではこれにて」
「ええ、道中お気をつけを。そうそう、近々エルフ奴隷の扱いについて法国に質問状が送られると思いますので上層部にお伝えください」
「……御忠告痛みいる。……総員撤収だ」
ニグンの胃はもうボロボロだろう。
・任務失敗

・法国の後ろめたそうな部分がバレる
・王国に手を出すなと言われる
・上記全部を上司に報告しなければいけない。
しばらくは療養してほしい。マジで。……ですわ。
がんばれ、ニグンさま。（煽りと取られかねないえげつない行為）

「で、本当に話し合いだけで撤退させたと」
「ええ、流血は少ないに越したことはないですからね」
「そうですか……」
あ、モモンガさんの声色的に残念さが伺えますわね。
理由はよくわからないけど、陽光聖典との戦いを見れなかったからって事かしらね。
よくわからないけど。
あと後ろのアルベドさん、目からビームを出さんがばかりに睨みつけるのやめてほしいんですが。
めっちゃ怖い。
「まぁ釘も刺しましたし、王国民としては二度と同じような起きない事を願うばかりです。それでお二人はこの後どうされますか？エ・ランテルへ向かわれるのであればご案内しますが」
「ありがたい申し出ではありますが、一度拠点に戻らせていただきます。今日聞いた話を整理したいので」
「そうでしたか。それではいづれ機会があればまた」
まぁ、ナザリックに戻るのも想定のうちですわ。
むしろガルルと唸るアルベドさんと一緒について来るって言われたらマジでヤバい……ガチで対応できずにボロ出すところでしたわ……。

こうして、「後世の歴史家も知らぬ歴史的大事件」はとりあえずという形で幕を閉じたのでしたとさ。
めでたし、めでたし。

あ、そういえば原作ではシャドウデーモンとかいうシモベを使ってナザリックは情報収集をしてたはずですわね。
意外にも私の影に潜んでいたりして。
……よし、周囲には特に人もいませんし、試しに「アレ」やってみようかしら。
「出てきなさいシャドウデーモンとやら」
当然反応はない。
「隠れていても魔性は臭いでわかりまするぞ」
ちょっとアレンジしてみたけど、こうも烏丸少将の名言が言える日が来るなんて思ってもなかったですわね、オホホホ。
自分の影とにらめっこを続けても特に動きはないですし、まぁ考え過ぎかと少しばかり表情を緩めると……
僅かに影が身震いしたように見えた。
まじかよ。
※ナザリック（ＢＧＭはナザリックの荘厳なアレ）※
「モモンガ様、ライヘンバッハという人間を監視しているシャドウデーモンから正体を見破られたとの報せが入りました。マジックアイテムを使用された訳でもなく、本能的に気が付かれたとも」
「（マジかよ）……わかった。このまま監視を続けても撹乱させられる可能性があるだろうから担当のシャドウデーモンは一時撤退、後日改めて距離を取りつつ監視を再開せよ」
「はっ」

王国頂上作戦―八本指よ、首を洗って待っていろ―
おおきなバルブロ、あらぶるザナック

「か、帰ってきましたわ……！」
カルネ村での一件から幾ばくの月日が流れただろうか。
『柳生一族の陰謀』の烏丸少将リスペクトなセリフを使ってしまい、偶然にもナザリックからの監視役に気づいてしまった私はしばらくはエ・ランテルでライヘンバッハとして活動せざるを得なかった。
当然、エ・ランテルにやって来たモモンとナーベにも会っちゃったり、すんでのところで漆黒の剣の面々をクレマンティーヌやカジットの魔の手から救い出したり、ズカズカと原作介入する羽目になった。
ついでにクレマンティーヌは簀巻きにして馬に載せて法国に送り返しちゃった。テヘッ
多分風花聖典とかが回収しているに違いない。うん。
あとはエンリの成長の方向性が大きく変わった。
原作ではゴブリンの小笛を貰って覇王エンリルートが始まるはずだったが、ライヘンバッハとして拳法の基礎や聞きかじっただけの武術流派の話題を教えている内にメキメキと実力をつけ、その結果、オーガ相手に五点掌爆心拳（モンク版グラスプハート）を決めてしまったのだ。
結果としてその強さを野良モンスターに見せつけた彼女をゴブリンやオーガが『族長』と慕い出す始末。
……私、五点掌爆心拳は教えてないですわよ？
というかキル・ビルの話なんてしてないし経絡のケの字もだしてませんわ……。
だというのに……、エンリ……恐ろしい子！

＝＝＝＝＝＝
後にエンリ・エモットは独自の流派『王国不敗』を創始、周辺各国に『拳王』としてその名が広まり、数多の門弟を抱える事となる。

そして圧倒的な脅威に対して門弟を引き連れて戦いを挑むのだが、それはまた別の話。

＝＝＝＝＝＝

そんなこんなで、ようやく監視の気配が無くなったのでクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープとして王都に帰還ですわ！

それにしても何だか王都の雰囲気が変わった気がしますわね。

何というか、以前に比べて活気が溢れているような……。

「おかえりなさいませクロエお姉様！」

む、恐らくファンガールAな娘子ですわね。

挨拶がてらこの活気について聞いてみるのが良さそうですわ。

「ただ今帰りましたわ。王都での暮らしに変わりはないかしら？」

「それが大変なんです！何とバルブロ王子とザナック王子が……」

んん!?

待て待てですわ、まさかあの二人が何かとんでもない事を……

兄弟喧嘩!?だとしたらザナックが不味いですわ！

バルブロは見ての通りパワー系の闘士、互角の勝負どころか一方的な殺戮ショウの開幕ですわよ!?

いやそれよりも！

このタイミングで兄弟の仲が悪くなるとそれを煽るアホ貴族連中が余計に厄介ですわ……！

「王都開発すると意気込んで、どこもかしこも工事中なんですよ！お陰で至る所が通行止めになっていて困っちゃいますわ！」

「……ンーフーン？」

何のこっちゃいでぇすわぁ。

※※※※※※※※※

まずそれはバルブロの一つの発言から始まった。

「王都の道路事情を何とかしなければならん」

クロエが里帰りしてからというもの、王都周辺では連日の雨にみま

われた。
建国以来の記録的な降水量のお陰で王都に巡らせれた道路はぬかるみ、石畳に足を取られるなどして転倒する等の事故が多発、日常生活を妨げる事態になっていたのだ。
真面目に城外視察をしていたバルブロも被害者の一人だ。外套を着用していたため衣服の汚れは避けられたが、「王になったら」などと悠長に構えられる状態ではない事を痛感し、早速行動を開始する。
聡明な読者の皆様もご存知の通り、バルブロは道路整備事業がどのようなものかわからぬ。
故に彼はまず「道路」について訪ねまわった。
貴族、市民、冒険者、出稼ぎの農民、兵士、商人など、あらゆる人々から地道に不満を聞き出した。
次にバルブロは妹のラナーに助言をもらいに行った。
嫁の次に怖いと思う女性であるが、彼女なら自分では思いも付かぬ発想が得られると思ったからだ。
「お兄様、どこかで頭でも打ちましたか？」
「……？いや、転びはしたが、頭は打ってないぞ？」
当の「黄金」ラナーは困惑した。
脳筋の標本のような兄から市民の意見書の束を受け取り、「王都中の道路整備をしたいんだがどうすればいい？」という、ものすごいフワフワした質問を受け取ってしまい、はて、どう答えれば良いだろうか、と。
「……お、お兄様？お兄様はどのような道路をお望みなんですか？」
「む、民の意見書はお前に渡しただろう。それが質問への答えだ。まぁ、俺のわがままを言えば王国の都にふさわしい立派な道路を敷き詰めたいな！」
なんとも、まぁ、大雑把な要望でしょう。
ラナーの表情筋はそれから一日ヒクヒクと引きつり続け、その晩は普段以上に顔面のストレッチを要したという。
「……お兄様、この場合道路だけでなく建物など区画ごとの再開発が

必要になります。なので技師を雇って土地の計測、図面の作製、人件費と作業期間の算出、そし「すまん、何かに書いてくれると助かる」ガッデム!!」

どこか異国の言葉で悪態をついたラナーから指南書を受け取ったバルブロは技師を雇い昼夜を問わず王都のあらゆる所を計測し、図面を作成し、民の要望を満たせるような完成図と計画書を作成し、意気揚々と御前会議に持ち込んだ。

何だかんだで市民と触れ合う機会の多くなったバルブロのプレゼンテーションは素人特有の拙さを充分に補うだけの熱量があった。

彼が初めて自分だけでなく人の為、それも貴族がおざなりにしがちな民の為に提案するその姿に感銘を受けたランポッサ三世は、その日の日記を3ページに渡ってバルブロの成長を喜ばしく思う気持ちを書き綴っている。

「王子の思いの丈は十分に理解しました。しかし、肝心の財源はどうするのですか？」

「王子の計画に賛同したい気持ちはありますが、まず当面は今年の戦争を優先する必要がありますので落ち着いてからでも良いのでは？」

「私どもも資金提供したいのですがいかんせん領地の税収が……」

しかし貴族の反応の多くは賛成派でも積極性を欠くようなものばかりで、それは言外に「無関心」を物語っていた。

「面倒なものには蓋をしよう」

そう考えた貴族たちはラナー王女に対して行ったように、小手先の宮廷政治手腕で廃案に追い込もうとする。

「まぁ相手は第一王子だし、後で何とでも言いくるめられるだろう……」と。

だが　それが

逆にバルブロの逆鱗に

触れた！

「んぬぅ～っ、貴様らさっきから聞いておれば金だ何だと……！わかった！もう貴様らの支援はいらん！この事業、俺の仕切りでやらせて貰うっ！手出しは無用だ！」

激怒したバルブロは会議を飛び出すと、雇われ技師や城下の有志を引き連れて作業を開始するのであった。
※※※※※※※※※
「……ほうほう。それで自分の裁量で使える額を使い切りそうなところなんですわね？それにザナック王子。本来貴方が歯止めをかけるべきなのに……どうしてこうなったんですの？」
「ちょっと魔が差したといいますか……こう、面白くなってきまして……義姉上、面目次第もございませんっ！」
第二王子のザナックが心底申し訳ないという表情で頭を下げてきた。
まぁ、そりゃあ面白くてテンション上がっちゃったってのは容易に想像できますわ。
様々な意見が書き入れられているだろう設計図、
完成後の町並みのイメージボードの束、
大テーブルに漸くおさまるレベルで作られている王都のミニチュアジオラマ。
あぁでも無いこうでも無いと議論を交わし、
一つの物を作り上げるのって絶対楽しいですわよねぇ。
「最初は道路整備だけと考えていたんだが、ほかにも調べていると色々と改善しないといけない問題がでてきてな……本当にすまない」
「いえ、バルブロ王子。それは継続していいと思いますわ。というか私、別に怒ってませんもの。寧ろ王家が民を思っているという好印象を与えられたと前向きに考えるべきですわね」
原作では王位を争っていたバルブロとザナック。
その二人が、まぁ理由はともかくとして互いに手を取り合い、一つのことに取り組んでいるこの状況は、王国だけでなく私にとってもグッドプレゼンツ！
（原作的にも）なかなかできることじゃないよ。
というか、さっきからかなり気になってた事があるのですけれども……

「バルブロ王子？その、なんというか……雰囲気変わりましたかしら？」
「……いや？特に変わりないと思うが……」
「ツッコミが弱いっ！」
「ざ、ザナック王子？」
「はぁ……いつものが始まってしまったか」
え、なんですのこれは。
突然ザナックが自分の膝を叩いて叫んだと思ったら事情を知っていそうなバルブロはため息ついてますし。
というか私の知らない事を知っているなんて生意気ですわ！
この……バルブ！
「義姉上、兄上の雰囲気が変わったのは確かなんですが、もっとこう……変わったところがあるでしょ！」
「えぇっ？うーん……あ、髪型変えました？」
「カスりもしてないッッ！もっと全体的です！全・体・的っ！」
ぜ、全体的？
全体的と言っても……うーん、よく分からないから総当りでいきますわよ！
「あ、整髪剤変えましたの？」
「いや？」
「髪から離れて義姉上っ！」
「……服を仕立て直されました？」
「あぁ、最近きつくなってきてな」
「うーん、かなり正解に近くなってきたぁけどそこじゃないっ！」
「あっ、わかりましたわ！体臭が前よりキツくない！」
「おっ、わかるか？城下で民に進められた薬膳を試しててな。そうか、思ったより早く効果が出たみたいだなフフフ……」
「えっ？あ、本当ですね……じゃなーくーてーっ！体臭とかじゃなくてもっとこう……第一印象というか、見てわかる感じの変化です義姉上ッッ！」

見てわかる変化……。
うーん、つま先から頭のてっぺんまで見ても「いつものバルブロ」って感じ……少し精悍さが出てきたくらいですけど。
ザナック王子も肩で息するほどツッコミで体力を持っていかれているみたいだし、これ以上ツッコミをさせるのは酷ですわね……。
「……降参ですわザナック王子。正解を教えていただけますかしら？」
「ハァッハァッ……マジですか義姉上……。いいでしょう、そこまで言うのならお教え差し上げます。正解はこちらっ！兄上、起立！」
「お、おう……」
あーバルブロが立たなきゃわからないタイプの問題なのですわね。
一体どこがどうか、わって……!?
「～～～～～～ッッ！」
「理解（わか）りましたか義姉上ッ！」
で、でっかぁああ～～……
シャンデリアに髪の毛カスってんじゃん。
骨延長手術でもしたの？
範間の血かな？
モモンガさん以上？
スタンスが板垣風（バキっぽい）！

雰囲気が変わった理由とは即ち、
バルブロがデカくなったと言う事！
私が気が付かなかった理由！
基本的にバルブロは「見上げるもの」という概念に囚われていたから！
「……成長期？」
「流石に無理があります義姉上！」
「む、違うのか？俺はてっきり第2の成長期だとばかり」
「だから無理だっつってんでしょうが兄上！」
あーまたザナックの息が上がってますわ……。

ちょっとは運動したほうがいいですわよ。
「にしても改めて見るとデカいですわねえ……巨人とのハーフとか言われたら絶対信じる自信ありますわ」
「純粋に人間だぞ」
「知ってますわよ。何年の付き合いだと思ってますのよ？」
「そりゃあもう幼い頃からだなぁ……」
「懐かしいですわね……王子をぶん殴ったあの日……」
そう、あれは確か……
……
……
……
……
「ちょっと、ちょっとちょっとちょっと！その流れだと私があまり接点の無い思い出話に発展する流れですよね！嫌ですよ！一人だけ流れに乗れず置いて行かれるみたいな扱いぃ！」
「お、おほほ。そんな扱いするわけないじゃないですかザナック王子。……あぶなかったですわ」
「いま危なかったって」
「言ってませんわよ」
「いやでも」
「私は、何も、言ってませんわ。わかりましたね？」
「アッハイ」
「なぁ、取り敢えず再開発計画の話に戻らないか？責任者としては資金難である事がかなり気がかりなのだ」
ぐぬぅっ！まさかのバルブロッツコミ！
成長したのは体格だけじゃあないってことですわね……！
面白ぇ漢じゃあねぇですの……！
「じゃあ早速ですが私も出資しますわ。当然お父様にも首を縦に振っていただくので当面は何とかなる筈ですわね」

「おお、ボウロロープ領の財力とは頼もしい！」
「しかも義父殿の支持があれば貴族どもも体面的に出さざるを得ないか……。手出し無用と啖呵を切ってしまった手前、個人的にはモヤっとするが、背に腹は変えられんな」
「ただし、将来的には王国全土の主要道路の整備が条件になりますわ。王都ばかりを贔屓すれば当然遠方からの批難は避けられません。故に王子には今後の計画書も作ってもらい、王国民に向けて発表してもらいますわよ？」
「そこはラナーが提案していた街道整備の案を採用してもいいか？そうすれば工期と人件費の算出だけで済むであろうし」
「そこはラナーさんに承諾を取るなり相談次第ですわね」
「兄上、ラナーに相談なさる時は私もお供します。ここまで来たら一蓮托生です」
「うむ、頼りにしてるぞザナック」
……うんうん、正に兄弟愛。よきかな、よきかな。
原作では政敵同士だった二人が、こうも手を取り合って一国を良い方向に導こうとする姿に感動を覚えずに居られないですわ。
ありがたや、ありがたや。
あと帝国との戦争が避けられそうな件については……、今の王国には劇物過ぎますわね。
まだ確定事項ではないし、帝国からエルフの件で動きがあるまでは黙っておきましょう。
「まぁまぁお二人とも、これでもまだまだ資金は足りないくらいですわ。何せ王国全土を股にかける大事業。まだ安心はできませんでしてよ？」
「そうとはいえだなクロエ、これ以上ともなれば徴税に頼らなければならないぞ。個人的には反対だ」
「そうなると周辺国に働きかけて援助してもらうぐらいしか解決策がなさそうですね……帝国と評議国は無理だとして法国と聖王国、ツテを探すだけでも骨が折れますよ」
「お二人とも『灯台下暗し』ですわね。あるじゃないですか。全財産を

没収しても王国も民も懐が痛まない、とっても好都合な連中が」

そう、『八本指』という奴らなんですけど。

バルブロの華麗なる一日

待たせたな！
皆のバルブロ様だ。
いやーまさかクロエのやつが道路整備について賛成してくれるとは思わなかったな。
流石に先行独断過ぎたとは思うし、拳骨の一つは覚悟していたんだぞ。
しかもあいつと来たら足りない資金は犯罪組織の『八本指』から絞り上げる気らしい。
曰く「八本指の得た利益は王国が受けた損失に相当するので、キッチリ返済していただくだけ」のようだが一体どれだけ毟り取る気なのか……目を付けられた八本指が憐れだ。

さぁ、今回は俺の華麗なる一日を紹介しよう！
なに、興味が無いだと？
……フフフ、その手には乗らんぞ。
お前たちが俺のキレ芸を引き出そうとしている魂胆はわかっているのだ。
お前たちには嫌でも付き合ってもらうぞ！
ガッハッハッハ！

俺の朝は早い。
朝日が登るよりも早く起きるのは気持ちの良いものだ。
クロエが「今日も元気だ空気がうまい」（言ってませんわよ）と口癖のように言っているが、なるほど確かに全身に染み渡らせるように深呼吸をしてみると頭がスッキリするし活力も湧いてくる。
む、ベッドサイドに見慣れない服が置いてあるが……手紙付きか。
『いつもの服で土木作業をしていると聞いて一晩で仕立てました。流石に無いわー。ーークロエ』

「うおおおおおーっ！馴染む！実に馴染むぞおぉぉぉっ！フハハハハ！」
今日の俺は１０００倍バルブロだあぁぁッ！
クロエが仕立てたという事実だけでも最高だが、体を通した瞬間にこの服の凄さが理解（わか）る！
漲る！実に体が軽い！
剣でもツルハシでも何でも持って来い！
何本でも纏めて振ってくれるわフッハハハハ！
……いかんいかん。あまりの素晴らしさに戻って来れなくなりそうだったわ。
軽く整えたら城内の練兵場で日課の鍛錬だ。
基本的に騎士や戦士団が使う場所だからな、こうやって邪魔にならんように早朝を狙うのが「できる男」の流儀なのだ。
「今日は普段以上に気合が入っておられますな、バルブロ王子」
「おぉ、戦士長か。この服を見てくれ、クロエが俺の為に作ってくれたのだ。これのお陰でいつも以上に気合も入るというものよ」
「なんとクロエ様からの贈り物ですか！」
こいつはガゼフ・ストロノーフ。
説明するまでも無いが王国の抱える最高戦力であり、父上が擁する「戦士団」の隊長を務める男だ。
え？戦闘力で言えばクロエが上じゃないかだって？
いやいや、流石にそれはないだろ。
だって相手はあのガゼフだぞ？
……ガゼフのほうが勝てるよな？
「ん、そうするとクロエ様は王子にかなり好意を抱いているのでは？」
「な、何ぃ!?……詳しく聞こうか戦士長」
「あ、いえ。私も隊員の話をそれとなく聞いていただけなのですが、女性が男性に贈り物をするというのは、相当の想いがあっての事だそうで。まぁ、私はそういった事に疎いものですから何とも言えないのですがね」
クロエが俺に好意を抱いている……。

つまり、もう抱いて(ベッドイン)良いという事か！
うおおおおお！
これは男として堪らんぞぉ！
「戦士長……よくぞ教えてくれた！このバルブロ・アンドレアン・イェルド・ライル・ヴァイセルフ、大事な事を見逃すところであった！」
「え、いや王子、私もただ聞いただけの話ですから」
「ハッハッハ！謙遜は美徳というが、戦士長のそれはし過ぎだぞ！うおおお燃えてきたあぁぁ！」
ーー後にその日の事を回顧したガゼフ・ストロノーフは次の様に語ったという。
『あの頃の私に女性経験が少しでもあれば、あの様な事にはならなかっただろう。バルブロ王子には本当に申し訳ないことをした。ただ、あの日の王子の目は余りにも輝きに満ち溢れていてそれ以上申し上げることができなかったのだ』

「うおおおおお！」
「……なぁ、今日の王子すごい気合が入ってないか？」
「今日の俺は無敵だあああ！」
「はえ～、すっごい気合……」

鍛錬と朝食を終えたら城下の工事現場に向かう。
今日は地下水道の工事だ。
帝国で商いをする行商人に聞いたところ、帝都アーウィンタールには飲水などを供給する「上水道」と汚水を流す「下水道」という物があるらしい。
そして王国の水道は殆どが下水道に当たるものばかりで上水道は整備されていない。
王国では水汲み職人が販売する水が流通しており（王城内の水もこれだそうだ）、結果として貧困層には「きれいな水」が行き渡らないのだ。
水道を整備すれば貧困層への恩恵が与えられる反面、これまで水汲

みで利益を得てきた職人たちが職を失うことになる。
　これについては俺やザナックでは解決策に至れなかったのでラナーに知恵を借りた。
「それでは職人の皆様に王都中の水道を管理して貰えば良いんじゃないでしょうか」
　ラナーが言うには水汲み職人は水の扱いに長けた人材であるのだから、国家が雇う事で彼らの技術を保護し、後継の教育を行ってもらおうという提案だった。
「なるほど、水道の役人として管轄してもらうという事か……」
「はい、将来的には運営管理にかかる費用を税収で賄ってもらう事になるので、読み書きの技能もつけてもらう必要がありますね」
「こちらも準備完了までだけで金が掛かりそうですね……。兄上、一先ずは王派閥の貴族に声を掛けて資金援助をしてもらえないか説得してみます」
　これが後に王国初の公営団体「王都水道局」や、識字率向上を目的とした「王立学舎」の設立にも？がるのだが、結構後の話だ。
『千里の道も一歩より』、王国の将来はこのツルハシの一振りにかかっているのだ！
「ムッハハハハ！」
「何か王子を見てたらやる気出てきた……。出てきてない？」
「じゃけん、精いっぱいやりましょうねぇ」
「「ムッハハハハ！」」

　精いっぱいツルハシを振ったあとは飯だ！酒だ！
「乾杯！」
「「かんぱーい！」」
　俺の合図と共に「昼下がりの宴」、俺主催の慰労の食事会が始まる。
　これは工事最初期から続けている事であり、飯と酒が振る舞われるという事で参加者からはすこぶる評判だ。
「ほら、王子様は成長期だからもっと食べないといけんよ～」
「女将、どうやら俺は成長期じゃないそうだぞ」

「ガッハハハ！まだまだ大きくなりそうだし成長期だろうって！」
ここの女将と大将はやたら俺の皿だけ大盛りにしてくる。
そして飯がうまいからついつい食べてしまうのだ。
……今日は今晩の事もあるし、しっかり食べておかねばな。
「そういや王子。ここだけの話、クロエ様とはどうなんです？」
唐突にいつぞやのクロエと同名の男が声をかけて来た。
すると周囲も興味津々とばかりに会話を止めて俺の発言を待ち始めた。
お前ら、ここが王城だったら不敬とかでしょっぴかれるからな？
しかし！フフフ、今日の俺は決してはぐらかさんぞ。
なぜなら！
「今日、決行する」
「おぉ！」
「今日！俺は！やるぞぉーッッ！」
「「うおおおおおおおおおおおお!!!!!」」
今日はもう堪らんからなあぁぁ！

昼食の後は城下視察だ。
ジオラマ作成の際に一通りは見ていたが、再度観察をすることで閃きが舞い降りるんじゃあないかと思い、今も続けている。
「そっちには昨日行ったから……今日はこっちだな！」
屋台で買った軽食を片手に意気揚々と出発する。
その地区は王都内においては歴史の古い地区……、というよりはただ古く整備が行き届いていないだけの地区だ。
王都の人口が増えるたびに地区開発が行われ、新しい住人や金のある者などは挙って新しい地区を求めた。
故にここは状態の悪い家屋が集中し、陽当りも悪く、更には表に出てくる住人の胡散臭さが止めとなって人も活気も寄せ付けないような場所となっているのだ。
どこもかしこもボロボロで、これが同じ王都かと疑ってしまう風景に初めて見た時は衝撃を覚えたものだ。

「うーむ、貧困街の問題もそうだが早急にザナックと決めなければ……むっ？」
建物の外壁の見分を終え、周囲を見渡してみると、このような場所には余りにも不釣り合いな老紳士、いや老執事が通りを歩いていた。
（体の重心がブレず、全くスキを生じさせないあの歩法……只者ではないぞ！）
練兵場で鍛錬を始めてからというものの戦士長や戦士団の面々と戦術や戦闘技法等について語らうことが多くなり、戦士としての観察眼もそれなりに肥えたと自負しているが、あの老執事の歩法は正に戦士のソレである事を雄弁に語っていた。
確か歩法のみを極める武術があると何処かで聞いたが……まさかソレか！
おぉ、あの老執事、何か道の真ん中で立ち止まったようだ！
この機を逃せば「あの歩法」の正体を掴む事は叶わんだろうし、早速聞いてみるぞ！
「そこな御仁、不躾ではあるのだが……」
「おい、爺。どこから湧いて出やがった」
ぬぅ、間が悪いぞチンピラめぇ！
いきなり出て来て見ず知らずの老執事に因縁を付けているのだ、アレか？無軌道に暴れたい時期なのか？いい歳の大人が陥るような物じゃあないだろうが！
ツッコミの一つでも入れてやろうかと思ったが、いきなり老執事がチンピラの胸倉を掴んだので空気を読んで引っ込んだ。
そして偶然にも、俺は老執事の足元のズタ袋から人の腕が飛び出している事に気が付き「かなりヤバい事」が起きていると悟った。
「お、おい爺！これは明らかに暴力行為だろ！ほら、そこの奴も見てるし、これでもそいつを連れて行く気か!?」
「……」
チンピラぁーっ！
いらんことをするんじゃあないっ！
ほれ見た事か、執事が睨んできてるではないかぁっ！

いや待て待て考えろバルブロ。
状況的に考えればチンピラが人間の入っているズタ袋を路上に放置。
で、それに気がついた老執事は立ち止まって中身を確認した。そうか、俺はこのタイミングで声をかけようとしていたのだな。
そこにチンピラがやって来て口論になり、老執事が胸ぐらを掴むに至った。
ここで問題なのは「ズタ袋の中の人物が何者か」「チンピラは何者か」だ。
ここを問い詰めれば取るべき対応が見つかるはずだ。
……多分！
「まぁ待ってくれ。いきなり目撃者扱いされても迷惑だ。一体何があったのか正直に分かりやすく一から説明してくれるか？」
『正直に分かりやすく一から』
うむ、念押しは大事だからな。
チンピラ曰く、ズタ袋の人物は女性従業員で、病気であるから神殿に連れて行く所だったらしい。
そこで老執事に絡まれて、自分は被害者だと主張している。
老執事にも確認すると先に手を出したことは認めた。
「なるほど、ところで君は彼女の同僚と見受けられるが……どういった仕事を？」
するとチンピラは都合の悪い質問だったのか、表情から余裕が消えていった。
あれ、俺なにかしちゃいましたかな？
「……せっ、接客業だ」
「接客業、本当に？」
「あぁ、そうだよ」
「だとしたら疑問がある。執事殿によれば君が出てきた扉からズタ袋ごと放り出されていたらしいじゃないか。接客業に従事している女性への扱いとは思えないのだが。しかも君は同僚だというから尚の事だ」

「うぐぅ……！」
おぉ？これはチンピラの探られたくない所を抉りこんでる感じじゃないか？
なるほど、これが頭脳戦の快感か！
ラナーめ、こんな面白い事をやっていたのか……！
「これが君の雇い主の意向だと言うのであれば王家の膝元たる王都のみならず王国内では見逃せぬ行為だ。場合によっては監督不行届で国王陛下の名のもとに調査を行い、君達は沙汰を待つ身となる訳だが……本当のところはどうなんだ？」
「……」
「まさかと思うが、違法営業か？」
「……」
「……八本指か？」
その名を出すとチンピラは竦み上がり、老執事の目つきも険しいものとなった。
「……な、なぁ。俺を見逃してくれないか？そこまで分かってるならこれ以上面倒に巻き込まれるのは互いに御免だろ？な？」
「……！」
「執事殿早まってはなりませんぞ！……さて、俺としてはもうお前に絡まれた時点で面倒云々で済む事では無いと考えているのだがな。今解決すべきことは2つ、彼女の保護についてと、お前の上司への言い訳だ」
チンピラの提案に殺意を募らせる老執事を宥めつつ、俺は別の解決案、つまり双方に益のある提案をした。
「こういうのはどうだ？少女は執事殿が保護する。で、お前は今すぐ王都を離れて雲隠れをする。この際お前の上司の事情は無視だ。この場に居ないやつのことを考えてもラチが開かない。だろ？」
「ラチが開かないって……、あんたは八本指の恐ろしさを知らないからそんな事が言えるんだ！」
「フッハハハハ！八本指なぞ恐るに足らず！王国にはあのライヘンバッハが居るのだからな！表に出てきたが最後、その日が奴らの命日

となるだろうよ」

結局チンピラは俺と老執事が逃走資金を工面してやることで納得し、王都を離れることを決意してくれた。

「それで……貴方も私に用でしょうか？申し訳ありませんが見ての通り彼女の手当を急がねばならないのですが……」

「いやいやいや！俺も事情は承知している！些事であった故すぐにでも彼女を連れて行ってくれ」

「そうですか……では失礼します」

老執事は言葉短に切り上げてその場を去ろうとするが……

え？その少女は……そのままで抱えていく気か？

「執事殿、暫し！もう暫し待たれよ！」

「……なんでしょうか」

「火急とはいえ傷付いた女子の肌を晒したままにするのは問題があるだろうが……ほら、これを」

俺は老執事が抱える少女にクロエが仕立てた上着を掛けた。

……クロエには正直に言おう。

で、殴られるなら甘んじて受けよう……。

「！……確かにそうですね。私の至らぬところにお気づきいただきありがとうございます」

「ムッフフ。淑女の扱いには自信があって……じゃない！今は早く彼女の手当がだな……神殿……はここからじゃ遠いな。ううむどうするべきか……」

こんな時、クロエならどうする？

クロエなら……

「……ここまで気を使っていただき本当にありがとうございます。しかしながら治療については個人的にアテがありますので、後はお任せいただけないでしょうか」

「そ、そうか……。分かった。その少女の世話、何卒よろしく頼む」

結局何も思いつかず、老執事に任せるという事で別れることとなっ

た。

「武才を感じさせる歩法を行う老執事に八本指……中々濃い一日だったみたいですわね」

「少女の容態も気になって執事の素性も聞けずじまいになってしまったがな……」

「まぁ何はともあれ上着の行方が分かっただけでも良しですわ」

城下視察から帰り、一日の汗を流してから執務をしているとクロエが部屋を訪ねてきた。

上着の事を聞かれたので仔細を含めて説明したら納得してくれたようだ。

「あの上着、実は内側に王子の名前を刺繍してるんですわ」

「なっ、それは本当か！」

「私の仕事に抜かりは無えですわよ。だからその執事に返す気があれば向こうから反応がある筈ですわね」

本当は酒場に忘れた時に届けてもらう為にやったんですけどね、とクロエは笑う。

しかし、現にそうした気配りに助けられる場面は少なくなく、これもまたクロエの魅力なのだと実感した。

（ここまで何だかんだとあったが、結婚して良かったなぁ……）

「おうじー、バールブロおうじー」

「ん、なん……」

Ｈｏｗ!?

なん、だと……！

クロエが！あのクロエが！

俺のベットに寝転んでるゥーッ!!

「な、な、ナン……く、クロエさん？」

「あっははは、そんな緊張しなくてもいいですわよ。これは私から王子へのご褒美みたいな物ですし」

褒美……？

「私がいない間から王都のために奔走し続けてくれたでしょ？しかも

ザナック王子やラナーとも協力して。だからこれはいわゆる『大変頑張ったで賞』って事でその褒美ですわ」
「お、おおお……」
俺は今、猛烈に感動している……！
これ程までにクロエに褒められた経験は無かった……！
だが今は褒められ続けの上に褒美……！
今なら確信を持って言える
漢バルブロ、この生涯に一片の悔い無し、と。
「うおおおお！クロエ！うおおおおお！」
「それに今日は私も……って、ちょ待って待ってですわ!?」
俺はクロエの待つベッドに向けて飛び込んだ！
クロエはいきなりの事で驚いているようだが、……フフフ、クロエの驚いた顔は珍しいな。
初めて見たかもしれん。
「可愛いな、クロエは」
「～～～～っ！な、何をわかりきったを、むぐっ……」
顔を赤らめながら喋ろうとするクロエの唇を塞ぎ、
抵抗しようとするクロエをおさえる。

そして俺達は

このあと滅茶苦茶セッ……
「キャオラァッ！」
「ブルウオォォッ!?」

……滅茶苦茶正中線三連突きされた。

リーたんと奇貨

【バルブロがムッハハハハとツルハシを振るっていた頃】
「はいリーたんこっちでしゅよぉ～。うーん、リーたん最高ですわね！」
「でっしょ～う？やっぱりリーたんは最高だぜぇ！」
珍しい事にレエブン侯から王都の別邸に招待された私は、侯の一人息子である「リーたん」に現在進行形で心奪われてしまってますわ！
にしてもこのレエブン侯、キャラ崩壊にも程があるってもんですわ。
インテリ感皆無ですわよ！
「ほーらリーたん、クロエお姉ちゃんお菓子持ってきましたわよ～。何個欲しいかな～？」
「んー、さんこ！」
「さんこ！お菓子3個ほしいんでしゅね～！ぇあ～よしよしよしよしよ～し」
うぐぅ！さすがの私もリーたんの可愛さに当てられて○ョコラータみてぇな事口走ってますわね……！
リーたん……、恐ろしい子！
※※※※※※
「さて、私を呼んだのはリーたん自慢のためではないのでしょう、レエブン侯」
「ははは、流石はクロエ様だ。確かに、リーたん自慢は要件の6割ほどですね」
「半分超えてきましたわねぇっ!?」
だ、大丈夫かしらこのレエブン侯……。
いやいや！原作ではレエブン侯は王国貴族の良心的存在にして先見性のある人物！
ただリーたんガチ勢なだけの有能ですわよ！
少し、そうほんの少しだけ抜けてるだけですわ、大丈夫ですわよ

……！
「いやぁ、やはり家族というものは良いですね。クロエ様も……あいや失敬、今のは無かった事に」
「大丈夫、まだリーたんの声が耳に詰まって何も聞こえませんでしたわ」
「ですよねぇ！やっぱりリーたんの声最っ高ですよねぇ！」
「しまった！これ全然話が進まないやつですわっ！」

……し、仕切り直しですわ。
「それにしてもレエブン侯とこのようにお話するのは随分久しぶりですわねぇ……」
「あれは確か……そうだ、貴女が初めて宮廷会議に参加された後の事ですね」
「そうですわね……侯爵として、そして王子の后として私も奔走してきましたけど、王国は変わりましたかしら？」
私の質問に対し、レエブン侯は僅かな間を置いて答えた。
「確かに王国は改善されていっています。しかし、まだ我が子が安全に生きてゆく国としては安心できませんな」
「……やはりレエブン侯は善き貴族ですわね」
「子を思えば、と言うやつです。今年の戦争が回避される可能性が出たとはいえ、僅かに凌げた程度でしか無い。やはり帝国との間に講和を結ぶ必要があります」
私が王都に帰還して間もなく、帝国から件の奴隷兵と皇帝直筆の書簡が届き、城内はとてもざわめいた。
何せ人類の守護者たる法国が王国領内に帝国兵に偽装した部隊を送り込んだという事で、法国寄りの貴族の肩身が狭くなったのは勿論、主戦派貴族達も対帝国を頑なに主張する者、帝国と足並みをそろえて対法国に備えようとする者で分裂、王派閥、貴族派閥ともに混迷を極めた。
最終的にはランポッサ三世が戦争の回避に向けて帝国との交渉に臨むとの英断を行うに至ったのだが、

「今の状況では今年の分を回避するだけで精一杯、それ以上は法国が再びやらかす事を祈る他に無いですわね」
「通じぬと分かった手段を二度も取るほど法国も阿呆ではありません。変に天運に任せるのは止しましょう。……帝国にとって王国の肥沃な国土は喉から手が出るほど魅力的です。あの鮮血帝がそう簡単に諦めるとは思えません。であるならば、王国が取るべき手段は帝国から戦争を仕掛ける気を削ぐことです」
「だからこそ、王国にはあらゆる改革が求められる、と」
「ええ、更に付け加えるなら軍事力に頼らぬという事です。下手に軍事力を高めれば帝国侵攻の用意ありと誤解されかねないですから」
流石はレエブン侯ですわ。
私の冗談に乗らず、持論をしっかりと説明してくれる。
やはり、レエブン侯の根っこは真面目なのですわね。
……でもしかし、それだけでは満点はあげられないですわよ？
「……確かに王国は改革が必要ですわね。でもそれらは実現に長い期間を要しますわ。寧ろ、鮮血帝であれば彼自身の手腕で一晩にでも実現させてしまうでしょう」
「あくまで改革は王国の都合、という事ですか」
「その通りですわ。だからこそ、王国が帝国に対して示すべきものは『確証』ですわ」
「確証……ですか？」
恐らくランポッサ三世が交渉のテーブルで改革案を山程提示してもジルクニフは対して興味は示さない。
それほどにまで帝国の王国に対する「期待感」は低い。ドン底もあり得る程度には。
貴族の腐敗に麻薬汚染、在野の犯罪結社が周辺国にもちょっかいをかけるわ、当の王国の取締は緩いわ、隣国として存在していること自体が邪魔な国だと思われても仕方がない。
そんな国が「改革する」と言っても「頑張ってね」と応援する気にもなれないだろう。
「つまり、論より証拠。王国に自浄作用が残っていて機能することを

証明するのが望ましいという事ですか？」
「大正解ですわ！しかも、その贄にふさわしい大物気取りの犯罪者集団が丁度いますわよね？」
「……八本指ですか！」
「ええ、奴等を潰せば溜め込んでいる資金を王都再開発に回せるし、繋がりのある貴族を国政から追放できる。国民の治安への意識が高まり、地方領内でも警備活動が盛んになる。それらを帝国に提示することで対王国の評価を稼ぐ。結構いいこと尽くしだと思いませんこと？」
　八本指様々ですわ、と大袈裟に言ってみるとレエブン侯は口元に指を当てて独り言をつぶやき始めた。
　もう彼の頭の中ではどの様に立ち回るかの計算が始まっているようだが、彼の立場は最初から「こちら側」なので満足するまで待たせていただくだけですわ。
「ちなみに、他にこの計画を知る者は？」
「バルブロ王子とザナック王子には八本指から資金を毟り取るとしか。あとはラナー王女がほぼ同じ意見だけど、条件付きで賛成ですわね」
「あくまで王族主導という事ですか……わかりました。この話、乗らせていただきましょう」
　勝ち馬の確認をしたレエブン侯の決断はまさしく風のごとしと言うべき速さですわね。
　こうして八本指検挙作戦にレエブン侯を取り込むことに成功した私は、
「ウェッヒヒィッ！リーたん最高～！」
「あーいリーたん、パパのところにおいでぇ～」
　この後滅茶苦茶リーたんしたですわ。
……
……

……
……
…
「はぁ、まさかあそこまで積極的に求めてくるなんて……。このクロエ、一生の不覚ですわ。……それにしても、デカすぎて、めっちゃ、運び、辛い、ですわ！」
思わずノックダウンしてしまったバルブロをベッドに運びつつ、彼が老執事、恐らくナザリックの執事である「セバス・チャン」と接触した事について考えていた。
「奇貨も奇貨。とてつもない幸運ですわね」
全てはバルブロのとった行動の賜物。
王都再開発計画、日課の視察、観察眼、夜なべして仕立てた上着。
その全てが奇跡的に噛み合わさり、王国とナザリックのコネクションが増えた。
「できた」と表現しないのは私が最も恐れるデミウルゴスがラナーとの間に築いているコネクションを想定してのものだ。
……あれ？この時点でもう接触ってされてる？
うーん、八本指編好きだったのに、意外と仔細を覚えてねぇですわね……。
まぁ、わからない以上ほぼ同時に構築されるものとして考えるしかねぇですわ。
この２つのコネクション、名付けるならば「セバス・コネクション」「デミウルゴス・コネクション」だろう。
デミウルゴス・コネクションについては、原作に基づいて考えればその役割はほぼ受信専用チャンネルだ。
ナザリックの外部協力者であるラナーに指示を出すためのものであり、そこに第三者が介入できる余地は皆無。
ラナーもラナーで欲望実現のために立ち回るから、なかなか厄介なコネクションですわね！
だからこそ、私はセバス・コネクションという奇貨を最大限に活か

さねばならない。
「いまやバルブロはラナーに引けを取らぬ王国の人気者。継承序列を考えれば前者が双方に利益を生み出すのは明白ですわね。というか個人的にはバルブロとの対談とか見てみたいですわ……」
モモンガ様とバルブロ王子……本音で語り合えそうな未来しか見えねぇですわ……！
ヤバい、すっげぇ、すっげぇ実現させたいですわ！
「そうなれば友好関係を築くために王国は改革中って事を大々的にアピールしなければいけませんわね……」
まずは犯罪撲滅宣言をぶち上げて国内外にアピールして、
ラナーや青の薔薇にも計画の共有して連携を取らなきゃいけないですし、
あとはお父様にも花をもたせる形で精鋭兵団を王都派遣してもらうのもアリですわね。
それにセバスのところにも訪問したり、万が一のゲヘナを想定した準備も必要ですわね……。
あーもう、残り時間に対して作業量が尋常じゃねーですわ！
あぁ、リーたん吸入したい……。

執事の決意、あと王国パねぇわ。

「セバス様。それは一体……？」
「ソリュシャン、話は後です。まずは彼女を空いている部屋に運びますので治療の準備を。それとアインズ様にお伝えしたい事があるので《伝言》のスクロールの用意を」
『セバスか、何事だ。……ふむ、人間の女を……なるほど。それで？……ふむふむ、……は？……バルブロ第一王子？、……えっマジ!?……あぁいや、今のは何でもない。そうか、でかしたぞセバス！この事については早速話し合いを設けたいのだが参加できるか？……わかった、すぐに《転移門》で迎えを寄越そう。……うん？……なるほど、ではそちらにペストーニャを派遣する。では待っているぞ』

ナザリック地下大墳墓　第九階層
「諸君、忙しい時に呼び出してしまって済まない。しかしセバスから重要な情報がもたらされた以上、今後の方針などについて今一度確認する必要があると思い緊急会議を招集する事とした。急な呼び出しにも関わらず参加してくれて感謝する」
王都に派遣しているセバスから王国の第一王子、バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフと接触したという報告が入り、俺はアルベド、デミウルゴス、報告者のセバスを呼び出した。
それにしてもセバス凄いな!?
何をどうしたら王子様と接触できるんだよ！
『少女を助けていたら王子が通りかかって助太刀してくれた』って……、王子ってそんなに城外に出ているものなのか……？
「滅相もございません。モモンガ様の為なら我らシモベは何処にでも馳せ参じる次第でございます」
「うむ、アルベドよ。その忠義、これからも頼りにするぞ。……さて、会議の議題についてだが『王国に関する情報の整理』『今後の対王国方針について』、この2つについて話し合いたい」
まぁ、前者については俺が個人的に聞きたいだけなんだよな。ここ

最近、モモンとしての活動が忙しくて報告書とかに目を通せてないから……。
「承知しました。では王国の概要に関しては私が。セバス、君は王都の最新情報と重要人物について話してくれるかな？」
「かしこまりましたデミウルゴス様」
「では僭越ながら王国の概要について説明させていただきます。王国は２００年の歴史を持つ人間の国であり、王家をトップに据えた典型的な封建制国家です」
　封建制……なんだっけ。
　たしか中世ファンタジーにありがちなやつで……
　あ、『御恩と奉公』だ！いつか死獣天朱雀さんが説明してくれたなぁ！
「ふむ、つまり貴族は王家に仕え、王家は貴族の領地を保護する相互関係が築かれているのだな？」
「その通りでございます。然しながら、ここ数十年は大貴族の台頭による派閥闘争、貴族による汚職などで内政面に問題を抱えているようです。現王のランポッサ三世も改善には前向きのようですが、帝国との戦争を抱えている以上、風前の灯と言えましょう」
　確かにデミウルゴスの言う通り、王国貴族の所業は目に余る。
　領民に重税を課し、自らは私服を肥やす。
　典型的な悪徳貴族の影を、冒険者モモンとして活動する中で何度見た事だろうか。
「……デミウルゴス様、私からも発言させていただいてよろしいでしょうか」
「おやセバス、君には王都と重要人物について説明するよう頼んでいたはずだが？」
「デミウルゴス様もご承知の通り、王都は王国の中枢です。であれば王国の内政の仔細についてもモモンガ様にお伝えすべきかと」
　うわぁ、デミウルゴスとセバスの間に火花が散ってるよ。
　……でも、こういうの見てるとたっちさんとウルベルトさんを思い出すなぁ。あの二人、何かあるといがみ合ってたし。

「よい、デミウルゴス。セバス、発言を許す」
「ありがとうございますモモンガ様。……確かに王国は腐敗が進み、更には犯罪結社『八本指』が裏社会にのさばっております。しかしながらこれを良しとしない王族や一部の貴族が活動を始めています。まだ微々たる物ではありますが、長期的に見れば周辺国を凌ぐまでに成長する可能性がございます」
「なるほど、風前の灯というよりは興亡の鍔際(つばぎわ)でしたか……。モモンガ様、不確かな説明をしてしまい申し訳ありません」
風前の灯と興亡の鍔際ってどう違うの？
とは流石に聞けないよな。ほら、俺ってデミウルゴス曰くタンゲサクラらしいし。
あれ、違ったかな……たしかタンゲース？マングース？
……と、とりあえず王国は絶賛改善中ってことだな。
「ふふふ、デミウルゴスでも早とちりをする事があるのだな。まぁ良い、法国のように楯突くならば別だがナザリックに損失を与えるようなことが無い限りは友好関係を築きたいと思っている。じゃあセバス、続けて王都の最新情報と重要人物について聞かせてくれ」
「かしこまりました。王都は現在第一王子、第二王子主導で再開発計画が進められており、これに伴う人的資源、物的資源が集中している事から、王都経済もこの数年に比べて好景気が続いています。また、この再開発にあわせて王国全域の幹線道路の整備計画が発表されており商人の間からは好評価を得ているようです」
「なるほど。しかしセバス、お前の報告を聞く限り『八本指』がそれらを妨害する可能性があるのではないか？」
「はい、八本指についてはその影響力が恐怖として市民の間に顕れております。しかしながらライヘンバッハやボウロロープ女侯爵といった女傑が希望の旗印となっているようです」
「ライヘンバッハ？私が初めて会った現地人か。八本指に対して何か逸話でも持っているのか？」
「はい、何でも八本指の集団を一人の生存者を残して鏖殺、生存者に関しては見せしめとして指を切り落としたのだと」

（Ｙａｋｕｚａ!?）
ええー、ライヘンバッハさんそういうキャラなのぉ～？
何かこう、女騎士って感じで……あっ。
そういえばあの時、一人を残して全滅させてたよな……、あ、一人はアルベドのせいだったけど。
実は敵に対しては結構容赦ないバーサーカー系女子なのか？
「おぉ、人間の身でありながら趣をわかっているじゃないか！」
「そうね。自らの戦力を余すことなく示し、更に敢えて残虐的な行為を行うことで敵対者に恐怖を抱かせる。下等な人間ではあるけど、その人間の評価は見直さないといけないようね」
（え、ええ～!?）
モモンガです。
仲良くしたいと思った人間が、普段人間を毛嫌いしている部下からの評価が高いとです。
モモンガです……。
いや、カルマ値が極悪だから共感できるって奴なのか？
セバスがデミウルゴスやアルベドの反応を見て微妙そうな表情になっているし、多分そうなのだろう。
「まぁ待て。セバスの話の途中だ。セバス、次に重要人物について説明をしてくれるか？」
「かしこまりました。まず一人目はバルブロ第一王子です」
第一王子、つまり次期国王という事か。
確かに王国の重要人物だ。
「現王の長子であり、かつては粗暴な性格から評判が良くなかったのですが、ここ最近は積極的に城下を訪れる姿や再開発現場で作業に従事する姿が目撃されており、親しみやすい王族として評判になっているようです」
「ふむ、セバス。その王子が行っている事が庶民受けを狙ったパフォーマンスという線はないかい？王位継承が現実的になってきたから地盤固めの為とか」
ふむ、デミウルゴスの疑問はもっともだ。

リアルでも搾取してばかりの企業が時々慈善事業を行うというニュースが少なからず流れていた。
それと同じ様であれば王国は切り捨てたほうが良いだろう。
「いいえデミウルゴス様。私も街中で土木作業を行う彼を何度か目撃しましたが、その動作からは見せかけだけという印象は受けませんでした」
「動作？」
「はい。ツルハシを振るう際の動作や、運搬を行う際の動作は周囲の熟練労働者に引けを取らぬ洗練されたものです。王子という身分を知らなければ、それこそ熟練労働者と言う程には」
「なんと、それ程とは……」
「更には城下の食堂で市民に食事と酒を振る舞い、一緒に盃を交わしたりなど、自分の意思で庶民の側に立っているように思います」
んー、俺の知ってる王族像と全然違うぞぉっ！
いや待て待て。リアルでも庶民の実情を知る経営者は福利厚生に可能な限り投資を惜しまないってのがあったじゃないか。
ある意味で現実主義者なのかもしれないぞ。
「そしてセバスを助けた恩人だということだな」
「はい、王子がどうしてあのような場所にいたのかは想像出来ませんが、紳士的であり好人物のように思えました」
なるほど、セバスが好印象を覚えるという事はバルブロ王子は本当に良い人物なのだろう。
「なるほど、大体の人物像はわかった。他に特筆することはあるか？」
「そうですね……強いて言うならば、見上げるほどの巨漢である事かと」
「セバスが」
「見上げるほどの」
「巨漢？」
「はい、恐れながら申し上げますと王子の身長はモモンガ様と同じかそれ以上になるかと思われます」
え、俺と同じ？

これでも2メートル以上はあるぞ確か。
うせやろ？本当に人間か？
「……ね、ねぇセバス、本当に人間なの？その王子」
「き、奇遇だねアルベド。私もちょうど同じ質問をしようとしていたところだよ」
すっごい個性的だな第一王子！
ナザリックの知恵者代表の二人が困惑するって相当だぞ！
誇っていいよ第一王子！
お前がナンバーワンだ！

「よし、じゃあ次行ってみよう！」
出だしの第一王子はすごいインパクトがあったが、流石にこれを超えてくる人は出てこないだろう。
少しだけテンションが変になってしまったが、俺はセバスに次の人物を紹介するように促した。
「かしこまりました。続いてはクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープです。王国有数の規模を誇るリ・ボウロロープの次期領主であるとともに第一王子の后である事からこちらも重要人物であると判断したためご説明させていただきます」
「セバス、確かボウロロープといえば6大貴族の一つじゃなかったかしら」
「はいアルベド様。父親であるボウロロープ侯は貴族派閥の盟主として知られる人物であり、対帝国との戦争における武功で現在の地位まで上り詰めたそうです。第一王子に娘を嫁がせたのも政略的意図があってのものと思われます」
なるほど、ボウロロープ侯というのは絵に描いたような野心家なんだな。ナザリックが王国と付き合う際はこの人物からの横槍が入って面倒なことにならない様に気をつけねば。
「セバス。話が脱線するが、そのボウロロープ侯とやらの政治に対する影響力はどれほどと考えている？」
「派閥の盟主であるということから、貴族に対する発言力は現王や第

一王子に次いで強いと愚考します。しかしながら現状は王国の内政に対しては発言は控えめで、領地で私兵の強化に注力しているそうです」

うーむ、私兵の強化か……。

対帝国戦争に向けての準備なんだろうけど、その兵力を使って反乱を起こさないとも限らないしなぁ。

一応、要注意とまでは言わずとも警戒したほうが良さそうだ。

「ふむ、そのボウロロープ侯も将来的にはナザリックの障害になる可能性があるな。念の為、監視を付けておけ。……ではセバス、話を本筋に戻そう」

「承知しました。クロエ妃は結婚前は『女侯爵』として宮廷政治に参加しており、内政面での功績から王国内外でその手腕を高く評価されております。また戦争への従軍経験や鍛冶師としての実力も高く、戦士や実業家としても高い知名度を有しています」

オイオイオイオイ、なんか第一王子よりも凄い人が出てきちゃったよ。

政治家で実業家で戦士ってなんのチートだよ！

ラノベじゃないんだぞ！

それにしても武具か。

実業家としても成功しているという事はそれなりに性能が良いって事なのか？

コレクター的にも気になるし調達してもらうのも悪くないな。

……あ、そういえば以前デミウルゴスが上げてきた『３０の真実』とかいうのがあったよな。

ふと思い出したのは、まだ冒険者モモンとして活動する前に収集されたクロエ妃に関する３０の真実という名の都市伝説のような逸話集だ。

あの時はライヘンバッハさんを基準に考えてたから『ヤバい人』という判断を下したが、実際のところはどうなんだろうか。

この世界には武技やタレントといったユグドラシルには無かった

ものが存在するが、現地の人間や異業種については単純な戦力においてはナザリックの驚異にはならない。
　もちろん、法国のようにワールドアイテムを所持している個人や勢力は別だ。
（もし３０の真実が全て正しいとすればクロエ妃は危険視しなければいけないか？）
　神出鬼没な行動力、スキルに頼らない気配探知能力、邪眼持ち（ギガントバジリスクを睨み殺す）、流石に元神は無いと思いたいが……。
（逸話をユグドラシルに当てはめると余計に『ヤバい人』って印象が強くなるなぁ……）
　ん、ユグドラシル？
「あぁーっ!?」
　しまった！なんで「その可能性」を思いつかなかった!?
「モモンガ様、いかがされましたか!?」
「セバス、クロエ妃の出生についての情報はないか？」
「出生情報ですか？」
「うむ、彼女がもしボウロロープ侯の養子だった場合、ユグドラシルプレイヤーである可能性がある。そうであれば戦士や鍛冶師としても評価されている事、また彼女に関する逸話にも合点がいく」
　リアルのように個人情報が正確に完備されているとは思わないが貴族の家系図などを調べればもしかしたら手掛かりが掴めるかもしれない！
　知恵者であるアルベドやデミウルゴスもその可能性は考えてなかったと言う様で驚愕の表情を浮かべていた。
「申し訳ございません。このセバス、そのような可能性に至らず彼女の出生情報については調べておりませんでした」
「いや、私もお前の説明を聞いてこの仮説に行き着いたのだ。謝る必要はない。むしろ感謝している」
「モモンガ様、仮にクロエ妃がプレイヤーであった場合、王国の警戒度は高くなります。すぐさまに情報収集部隊を編成し派遣なさいますか？」

「うむ、アルベド。隠密能力に長けたものを中心に編成し即座に派遣せよ。人選はお前に任せる」
「はっ！」

情報収集部隊の編成のため退出したアルベドを見送った後もセバスからの重要人物の説明は続いた。
「黄金」の異名を持つ聡明な第三王女、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。
兄妹ほど突出したものは無いが、交渉力などバランス調整に定評のある第二王子、ザナック・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフ。
そして王国と冒険者の未来のために活動する魔剣使いのワーカー、ライヘンバッハ。
デミウルゴスはラナー王女の説明に興味津々だったようだが、やはり王族のしかも王国の将来を担う人材を重要人物として説明された俺は一つの結論に至った。
ワーカー、ライヘンバッハの雇い主は王家そのものだ。
いつぞや彼女が熱弁していた内容はまさに王国が今現在取り組む改革に合致しているし、冒険者が政治的問題に介入できないという点でもワーカーという身分は都合が良い。
今後の成長株という面とは別に、王国については警戒対象として注意を払ったほうがいいだろう。
「セバスよ、お前の報告内容は今後の方針を決定する上で重要な判断材料となるだろう。王国については一先ず警戒に値する勢力であると認定する。先のシャルティアの件もあるから、クロエ妃については注意しろ。デミウルゴス、後ほどアルベドにも情報を共有する様に」
「かしこまりました」
「あとはセバスの拾ってきた人間のことだが、確か第一王子に保護を頼まれたのだな？」
「その通りにございます」
「わかった。ではその人間は手厚く保護せよ。相手が王国の次期国王

であるならばナザリックとしても恩を売るのはやぶさかではない。故にセバスよ、お前には王国での調査に加え新たな仕事を任せたい」

※※※※※※

セバスは、己の判断の正当性を自問自答していた。

あの人間を助けた事は正しかったのかと。

その行為は明らかに任務とは無関係であった。

結果だけを見たならば大きな釣果と言えるが、報告を聞いていたデミウルゴスは終始何かを言いたそうな顔をしていたのをセバスは見逃してはいなかった。

「おかえりなさいませ、セバス様」

「……ただいま戻りました。ソリュシャン、あの人間の治療はどうなりましたか？」

「容態を調べたところ骨折、裂傷をはじめとした外傷、梅毒などの性病を患っていました。治療についてはペストーニャ様が行われましたので肉体に関しては完全に癒えています。ただ精神については本人の気力次第との事です」

「……そうですか」

『その少女の世話、何卒よろしく頼む』

（これで、あの王子には義理を通せたのでしょうか）

「たられば」を考えるのは無意味と分かっていても、セバスは考えてしまった。

【もしあの場で何も得ることができなかったら？】

己の信念、想像主たるたっち・みーの信条を守ろうとしたばかりにナザリックに不利益をもたらす事になったのではないか？

王族との繋がりができたから良かったものの、セバスはそれを手放しで喜ぶことができなかった。

（どうやら、大きな借りを作ってしまったようですね）

「……セバス様、どうかされましたか？」

「い、いえ。なんでもありません。それとあの人間の扱いについてはモモンガ様より一任されました。王国に恩を売る道具としますので、扱いについては十分注意を払ってください」

「かしこまりました」

※※※※※※

『信頼……でございますか？』

『そうだ。この世界においてナザリックは未だ表向きの拠点を保有していない。今後ナザリックが大規模取引などを行うにあたって信頼できる現地人材を活用していく必要がある。ちょうどコキュートスがリザードマンを統治しているが、人間についても忠誠心……というより友好関係を築けるというモデルケースとなって欲しい』

無理ならば私の魔法で洗脳するがな、とモモンガが冗談（魔王ジョーク）を飛ばすと、

『是非！是非私にお任せくださいモモンガ様！このセバス・チャン、必ずやご期待以上の成果を納めてみせます！』

セバスはこれまでに見せたことの無いような必死の形相でモモンガに懇願した。

至高の御方であるモモンガより下された「人間との信頼関係の構築」は、彼にとってその存在意義、つまり「ナザリックで善性として創造された者」の存在意義が試される試練であり、セバスは避けては通れない道だと理解した。

一方モモンガはセバスの豹変ぶりに困惑していた。

モモンガが下した任務は『現地人との間に友好関係を築く事』だった。

理由としては先の発言のとおりなのだが、当のモモンガにとっては本当に単なる思いつきである。

人選についても「セバスなら問題ないだろう」というガバガバ……、ではなく『部下の人柄を熟知している』采配だった。

絶対的支配者がガバガバ采配なんてするわけが無い。

その為、何故セバスがここまで食い付いてきたのか、その由を知るすべはなかった。

あくまで「やる気のスッゴい部下」として彼の目に写った事だろう。

『それだけやる気に満ちていれば何も問題はないだろう。ではセバスよ、私は吉報を待っているぞ』
『はっ！』
※※※※※※
（モモンガ様が与えてくださったこの機会……決して無下にはできません）
セバスは静かに寝息を立てる少女のもとを訪れ、決意を示すように拳を握りしめた。

クロエ奔走録①

「現在、王都再開発計画は当初想定した工程の４割が完了した。またこの計画の実施に伴った人的、物的資源の流通により王国経済は過去十数年の中でも断トツの好景気を迎えている。我が計画に賛同いただいた貴族の皆には改めて感謝の言葉を贈りたい。この事業の成功を足掛かりとして王国全土の主要幹線道路の整備を進めていけば、貴族だけでなく、王国臣民にも多大な利益をもたらし、帝国をはじめとした周辺各国に対しても王国の威を再び示すことができるだろう」

その日の宮廷会議はバルブロの計画進捗報告から始まった。

再開発計画は嘘偽りなく順調に進んでおり、ザナック第二王子による説得や、利益に敏い有力貴族による協力表明により無関心であった大半の貴族からの支持を得るに至った。

第一王子直々の労いに貴族も思わずニッコリだ。

しかし、彼が続けて放った言葉によって場の空気が一変した。

「しかし、先日王都を視察した際に俺は偶然にも人身遺棄の現場に出くわしてしまった。事もあろうに王の膝下たるこの王都でだ。しかも、その下手人は犯罪結社『八本指』の構成員であった」

今日の王国を裏社会から脅かす大物犯罪結社の名前が出ると貴族たちはざわめいた。

特に現王ランポッサ三世は犯罪結社の行いに憤りを覚えながらも表情にに出さぬ様努めていたのだろう、しかし杖を握る手が震えている事からその怒り様は明らかだ。

「突然の事であった故、件の下手人は取り逃がしてしまったが、これは王国の一大事であるという事は皆も理解してくれよう。そこでだ、今日は我が妻からその事について提案があるそうだ。クロエ、あとは任せる」

「ご紹介ありがとうございます王子」

バルブロに促されたクロエが貴族達に振り向けたのは、それはもうこれ以上に無い満面の笑みであった。

第1話から読んできた勤勉な読者諸氏ならもうお分かりだろうが、クロエの笑顔は悪属性特効精神兵器である。
故に今日の笑顔の破壊力は生後二十余年の中でも最強クラスに達し、敢えて言うならば笑顔のベストオブベストである。
僅かでもやましさがある者ならば、その笑顔がもたらすのは憤怒に相貌を歪めた大神、もしくは大龍を目と鼻の先に臨む心地であろう。
その証左に、会議に参加している貴族や警備を担当する衛兵の中には頭痛、目眩、吐き気を覚える者、急な動悸に胸を押さえる者、体表に発疹や発汗を浮かべる者、幻覚や幻聴に小さな悲鳴を上げる者など、反応は様々だがパニック症状を引き起こしていた。
しかしながらここは天下の宮廷会議、権謀術数の一丁目一番地である。
わずかな隙きを見せようものならば取って食われるが常の戦場に立つ者が己の軟弱を晒す訳もなく、ある者は文字通り体にムチを打擲(ちょう)ち、またある者は隠し持っていた酒精にて弱気を払うなど、己が矜持を守り抜かんと笑顔の怪物と対峙した。
まぁ心当たりのない人にとっては無害なんですがね。
現にバルブロ第一王子や実父ボウロロープ侯なんかは「いよっ！待ってました！」と言わんばかりにニッコニコでクロエの演説を待っているのである。
「さて、第一王子よりご説明いただきました再開発計画に加え、今年は法国の越境活動に端を発して、対帝国戦争回避の兆しが見えてきた事からもわかるように、我々は王国の歴史においても類を見ない重大な局面に立たされています」
「再開発計画により王国の経済は回復しておりますが、これを歓迎するの我々ばかりではありません。犯罪の温床たる裏社会も私腹を肥やそうと表社会にも影響を及ぼすでしょう。バルブロ第一王子が八本指の犯罪行為を目撃したのもその予兆と言っても過言ではありません」
精神兵器(クロエスマイル)の先制攻撃によってか、貴族達は茶化す事もなくクロエの言葉に耳を傾けていた。

「今ここで我々が八本指をはじめとした犯罪者らを抑え込めなければ、『王国はならず者にすら屈する無能』と誹(そしり)りを受ける事でしょう。そうなれば再び帝国は牙を向き、法国もまた凶刃を突き立て、今度こそ王国は一巻の終わりです。王国に生きる者として、これだけは避けねばいけない。そうは思いませんでしょうか!?」

この発言を受けて愛国心ある貴族たちからは「そうだそうだ」と賛同の声があがるが、それらはあくまで地方の小貴族からのみであり、六大貴族をはじめとした有力貴族は出方をうかがい静かに頷くのみに留めていた。

「ゆえに、私は今この場において王都全域における犯罪勢力一斉摘発作戦『王国頂上作戦』の実施を提案します！」

※※※※※※

王都全域における犯罪勢力一斉摘発作戦。

通称『王国頂上作戦』

王国最大勢力の犯罪結社『八本指』首脳陣および幹部構成員の逮捕、並びに八部門の活動拠点と一切の運営資産の押収を目的とした取り締まり作戦である。

作戦名の元ネタは検索してくれると助かる。

原作ではデミウルゴスの謀略によりその機能をごっそり丸ごとナザリックに吸収されてしまったが、クロエはそれを良しとしようと思っていなかった。

むしろ、王国(こちら)で雑に使い潰す。

原作では八本指編が大好きなクロエにとって、それだけは決して譲れないのだ。

「本日より作戦終了までの期間、王都全域と王都から全土に繋がる各種道路、水路の警備を強化、検問所の設置により夜間の人と物の出入りを制限します。これに伴い、既にボウロロープ侯より精鋭兵団２０００名の動員が確約されています」

「に、２０００ですと!?侯は戦でも始める気ですか！」

これには王派閥を自称するブルムラシュー侯(実は帝国に内通している拝金主義者)も流石に反論せざるを得なかった。

「相手はならず者と言えど悪名高い八本指、中にはアダマンタイト級冒険者に匹敵する者もいるとなれば、戦をするつもりで兵を揃えねば勝ち目がないと考えるのは当然であろう……」
「義父殿の肩を持つわけではないが、王都はその歴史の古さから公には知られていない古い地下道や水路が点在している。王都の騎士や衛兵を総動員しても見つけ切れるかがわからない程にだ。この作戦の成就には何よりもまず人手が重要なのだ」
ボウロロープ侯がさも当然と返し、バルブロも王都の特性という別の視点から援護射撃をした。
余りのド正論にブルムラシュー侯は唸る事しかできなくなり、すごすごと引き下がった。
「ブルムラシュー侯の懸念は私も承知しています。戦場の象徴たる兵士が日常生活の場に見えては市民も恐怖を感じずにはいられないでしょう。更には夜間のみと言えど流通を制限するため、経済にも影響が出る可能性があります。だからこそ短期間で決着をつけなければならないのです。王国の鍔際、派閥を越えて取り組まねば成功はありえません。……どうか皆様、ご検討をお願いします」
クロエは貴族達とランポッサ三世に深々と一礼すると自分の席に着いた。
バルブロとボウロロープ侯は満足といった様子で「よくやった！」とジェスチャーでクロエに伝えてきた。
それにしてもこの二人、相当仲が良い。
（とりあえず無事に作戦をぶち上げられましたわねぇ……）
あとは貴族連中が正しく損得勘定ができる事を祈るばかりですわー、とクロエは派閥に分かれて議論を交わす貴族たちをみやり心の中で呟く。
八本指の影響力は凄まじい。
当然、その甘い汁はライラの黒粉とセットで一部の貴族にも蔓延していた。
この作戦の情報はこの会議に参加した貴族から当然八本指にも伝わるだろう。

そして、当の貴族は作戦に賛同することで身の潔白を証明しようとするだろうとクロエは考えていた。
（まぁ～、んなぁ～事は見逃さねぇーんですがねぇ……）
鮮血帝の如く粛清するとまではいかないが、対象の貴族の皆様にはデトックスの為に『自然キャンプ（労働ボランティア）』に強制参加する権利（ぎむ）を与える予定である。
鬼か。
いや、公明正大なクロエ様である。

良かったな、ここがシベリアじゃなくて。

「……皆の者、結論を聞こう」
ランポッサ三世が貴族たちにたずねると、最初に王派閥のウロヴァーナ辺境伯が、続けて貴族派閥のレエブン侯が答える。
「王国２００年の歴史を連綿と受け継いできた我ら王国貴族、王国の未来のためにクロエ妃殿下の作戦に賛成いたします」
「我らの総力をもって国難を乗り切る所存であります」
両名からの答え、つまりこの場にいる貴族の総意を受け取ったランポッサ三世は深く頷いた後に王座から腰を上げて宣言した。
「良かろう、ではリ・エスティーゼ国王の名のもとに命ずる！八本指なる不届き者らを一人残らず引っ捕えよ！」
『ははぁーっ!!』
こうして、王国は八本指に対して事実上の宣戦布告を行うに至ったのである。
※※※※※
王都近郊　ボウロロープ侯私兵部隊「精鋭兵団」宿営地
「あれほど威厳あふれる国王陛下を目の当たりにしたのは数十年ぶりだ」
「そうなのですかお父様？」
宮廷会議の後にクロエは実父ボウロロープ侯に連れられて秘蔵の私兵部隊「精鋭兵団」の視察に訪れていた。

「うむ、陛下はああ見えてかつては勇猛果敢を文字通り体現されていた方でな。わしも若輩の身であった頃は何度叱咤されたことか」
父親が過去に思いを馳せている横で、宿営地内を行き来する兵士たちの様子を見てクロエはたずねた。
「それにしても兵士の武装が帝国戦のときと異なりますわね」
「お前に派遣を頼まれたときに市街地や室内であれば従来の装備は不向きだと感じてな。思い切って一新してみたのだ。一見すれば厚手の革服だが、下には鎖帷子と鋼鉄製の膝当て、肘当てを仕込んでおるし、靴にも鉄板を仕込んでおる。防御力を落とさずに歩兵の機動力を高める工夫だな」
「なるほど、あと装備が黒一色な理由は？」
「夜間の奇襲戦を想定したものだ。黒色であれば輪郭が把握しづらく存在の威圧感も高まるから一石二鳥だとは思わんか？」
「……私、お父様の口から突撃以外の戦術用語が出てきた事に凄いビックリしてますわ」
「親に向かって何だ貴様ァっ!?わしだってこの歳になっても勉強くらいはしとるわいっ！」
クロエが驚くのも仕方のないことだが、歴戦と謳われるボウロロープ侯も貴族であり、当然ながら突撃戦術を「伝統」として信奉していた一人である。
しかし、クロエとの図上演習が彼の戦術的価値観に衝撃を与えてしまったのだ。
クロエは自身が運営する武具工房の費用調達のために父親をはじめとした貴族相手に図上演習をふっかけて、その都度開催される賭けで稼いでいた。
ボウロロープ侯も最初は伝統に従い通常兵種による人海戦術を用いてきたが結果は惨敗。
ある時は少数のビーストテイマー部隊によるスタンピード戦術で蹴散らされ、
ある時は森林地帯に仕掛けられたブービートラップで兵士の数を減らされた所に高所からの集中射撃で蹂躙され、

またある時は要塞内に続くトンネルを掘られ、戦略物資を焼かれて兵糧攻めに遭うなど、戦争の王道とも言える「数でぶん殴るという行為」を許されなかったのだ。
「これが演習、しかも図上演習で本当に良かった」
ボウロロープ侯は敗北を喫する度にこの言葉を口にしていた。
国王直轄の戦士団に対抗して設立した「精鋭兵団」。
虎の子とも言える私兵部隊をもってしても覆らぬ敗北はボウロロープ侯に「いかにして部隊の生存率を高めるか」という事の重要性を気付かせた。
こうして「精鋭兵団」の改革は始まったのだ。
まずは指揮系統を分化し、各部隊に隊長職を設けた。
続けて伝令に変わる情報伝達手段を構築し、
更には陣地構築や偵察など戦闘以外の技能に特化した部隊を新たに設立した。
他にも上げればキリが無いが、ボウロロープ侯が中央政治の場から離れていた理由はこれが原因である。
「今ならば陛下の戦士団を相手にしても負ける気はせぬ」
「そりゃ数的有利を考えればお父様の兵団が上ですからねぇ」
「練度の高さでギャフンと言わせるのだ！」
「こう、ギャフンと！」と手のひらに手刀を振り下ろすようなジェスチャー付きで言うボウロロープ侯はその強面も相まって普段の厳つさからは想像もできない愛嬌が感じられて、クロエは思わず吹き出してしまった。
「ふふふ、その時は是非私も観戦させていただきますわ。本当にギャフンと言うのか楽しみですもの」
「お前いつもそうやってバルブロ殿下をからかっているのだろう？……ほどほどにしておけよ。やり過ぎると相手も雄としての自信を失ってしまうからな」
「あー、……善処しますわ」
※※※※※
「いやぁ、それにしてもすげぇ宿営地でしたわね……。キルハウスみ

たいなのもありましたし」
おそらく八本指の施設に乗り込む事を想定して設置したのだろうか、宿営地の隅みに設置されたハリボテを思い出しながら実父の先見性に改めて驚嘆していた。
自らも挑戦した軍制改革は王国の財務状況や人材不足が理由で挫折に終わってしまった。
しかし、実父は私兵という違いはあるが確実に改革を成し遂げていた。
図上演習にしてもそうだった。
実父は同じ手には二度とかからず、最近はクロエも危うい場面に遭うことが多くなっていた。
結局のところ「餅は餅屋」、未来の知識を有しているとはいえ小娘の付け焼刃程度の知識と歴戦の戦士の持つ感性では、後者に軍配が上がるのは明白であった。
「ぶっちゃけマリウスかくやと言うべき手腕……、私兵部隊の責任者として腐らせるのは勿体無いですわね」
実父を前世の偉人になぞらえて評価したクロエは、何としても手柄を挙げさせて、国家規模の軍制改革を任せたいとまで考えていた。
「さて、明日はラナーとラキュースに会って八本指捜査の情報交換もしなきゃですから、ちょっと休憩を……」
クロエは宮廷会議のスピーチ準備を徹夜でやっていたせいもあり、少し仮眠を取るためソファーに寝転がっていたが、部屋のドアをノックする音が聞こえたので飛び起きた。
「クロエ様、バルブロ様がお呼びになっております」
「んぇ？バルブロ王子が？」
「はい、なんでも客人がいらしゃったので会っていただきたいようです」
「うーん、わかったわ。王子にはすぐ行くと伝えて」
※※※※※
身だしなみを整え、バルブロの待つ部屋に向かったクロエが目にしたのは意外な人物であった。

「紹介しよう。こちらが我が妻のクロエだ。クロエ、この前話した執事のセバス殿だ」
「お初目にかかりますクロエ妃殿下。私、セバス・チャンともうします。本日はバルブロ王子殿下にお借りした上着をお返しする為に伺わせていただきました」
「お会いできて光栄ですわセバス様。貴方の勇姿は夫から聞いていましてよ」
（キャーッ！生セバス！生セバスキターっ！）
「ナザリックのぐう聖（クロエ談）」と名高いセバス・チャンを目の前にして興奮したい気持ちを抑え、クロエは笑顔で老執事に挨拶をした。
「お褒めに預かり光栄の極みでございます殿下。しかし、私は為すべきことをしたまでです」
「ハハハ、セバス殿は謙虚でもあらせられるのだな。ところで、あの時の少女の容態はそれからどうなっただろうか？」
「はい、予断を許さない状態ではありましたが、王都で知り合いました治癒師様の尽力により無事峠を越えました。しかし相当怯えているようでしたので、しばらくは当家にて保護を続けようかと考えております」
（なるほど、ここは原作基準って訳ですわね。すると今日か明日にでもスタッファンあたりが訪ねていく可能性があるという事……確かその後にソリュシャンが誤報を飛ばしてしまうのでしたわね）
（となると、モモンガさんに誤報が入ってしまう前にソリュシャンをそれとなく説得、「王家もサポートしますから心配いりませんよー」という事を直接アピールしなければ
いけないですわね！）
クロエはセバスが訪れた理由を「バルブロの上着を返却しに来た」と判断した。
そしてそれはたしかに間違いではなかった。
しかし、既にセバスはモモンガに事の次第を報告を終えており、その結果クロエはナザリックにおいて要注意人物に指定されていた。

その為、次のような展開となるのは必然であった。
「ねぇバルブロ王子、せっかくだからそのお嬢さんのお見舞いに行きましょうよ！」
「む、見舞いか。……確かに良いな！セバス殿、どうだろうか！」
突然の申し出にセバスは焦っていた。
確かに事情を知っている者が見舞いに訪れるというのはごく自然の反応である。
しかし相手はクロエ（要注意人物）である。
仮の拠点とはいえゴーレムやガーゴイルといった防衛機構を備えている為、仮に看破されてしまった際に背後のナザリックに気づかれる恐れが大いに有る。
（しかし、ここで断ってしまうのも不審がられてしまう可能性がありますね……）
どう答えればよいか、セバスは暫し黙考していると、在りし日のナザリックで至高の御方達がしていた会話の内容を思い出した。
『空城の計？』
『ええ、孫子の兵法ですよ。敢えて無防備に見せかけて相手に不要な警戒をさせるんです』
『つまりノーガード戦法って事だろ？大丈夫なのかそれ？』
『侵入者が対峙するのは天下御免のＤＱＮギルド「アインズ・ウール・ゴウン」ですよ？不自然なくらいまでノーガードで構えていても相手が勝手に警戒してくれますって』
『確かに……っていうかＤＱＮ言うなし』
いくら看破能力が高いといえど、看破する罠が無ければその能力は封じられたも同然。
そして有事となった場合も室内という限定された空間においては近接戦闘力に長けた自分とソリュシャンがいる。
殲滅はできずとも、ナザリックに危機を知らせることは可能だと、セバスは判断して答えた。
「ええ、私個人としては問題ございません。ただ、彼女の体調面の事もございますので、後日改めてご招待させていただいても宜しいでしょ

うか」
（駄目ですわ！セバスっ！それはダメッ……！悪手……！圧倒的悪手っ……！このままではツアレに向かって正拳突きしなきゃいけないルートまっしぐらですわよ！）
今度はクロエが焦った。
あまり他所様の事情に突っ込むのは感心できない行為だが、やはり原作を知っている以上、手助けしたいという気持ち生じてしまうのだ。
「む、そうか……。明日以降は王都南の工事で留守にしている事が多くなってしまうから都合が合いにくくなってしまうのだが……」
（バルブロ！ナイスアシスト！）
「じ、じゃあこうしませんこと？これからセバス様のお宅に挨拶だけさせて頂いて、お見舞いについては都合がついてからということで……どうかしら？」
（むぅ、なかなか引き下がりませんね。……仕方ありません。シャドウデーモンを使ってソリュシャンに王子夫妻の来訪を伝えましょう）
「それならば問題ないかと思います。お嬢様も両殿下とお会いできると知れば大層喜ばれる事でしょう」
「セバス殿、妻の急な申し出を受けていただき申し訳ない。この埋め合わせはいつかさせて頂こう」
バルブロが頭を下げたのと同時に、自らの影に潜ませていたシャドウデーモンを屋敷のソリュシャンに向けて放ったセバスは人の良さそうな表情で答えた。
「いえ、殿下には個人的に恩義を感じておりますので、今度はこちらからお返ししなければなりません。なので、今はそのお気持ちだけ頂いておきます」
※※※※※
王都　高級住宅街
「へぇ、つまりソリュシャン様はセバス様と二人で王国にいらしたのですね」
「はい。当主様の方針でお嬢様に見聞を広めていただく事が目的なの

です」
王城から屋敷までは王家所有の馬車で行く事となった。
というのも、バルブロの巨体では普通の馬車に収まりきらなかったからである。
なんとか収まったものの、同じシートに座るクロエがなんとか窮屈を避けられるだけであり、当のバルブロは背を屈めたりと窮屈な事に変わりがなかった。
「帝国と講和を結んだら帝国製の馬車を買いましょう」というのは、偶然その光景を目の当たりにした第二王子ザナックの言である。
「そろそろこの辺りですが……おや？」
「セバス殿、どうかされたか？」
「屋敷の前に衛兵が2名おりまして……何かあったのでしょうか？」
セバスの視線を追うようにバルブロも窓から外を覗くと、確かに一件の屋敷の前に衛兵が立っていた。
「……もしやあそこがセバス殿の屋敷なのか？」
「はい、間違いありません」
「……！ばっ、バルブロ王子に、敬礼っ！」
するとこちらに気付いたのか、衛兵は姿勢を正し敬礼を行った。
「御者、ここで停めてくれ。……衛兵、この屋敷で何かあったのか？」
「はっ！現在こちらの屋敷にヘーウィッシュ巡回使様が訪れており、我々はその警備の任に就いております！」
「巡回使だと？」
（ヘーウィッシュ？……スタッファン・ヘーウィッシュ!?）
八本指編における死に芸モブ（ベリュース枠）の名前を耳にしたクロエは心の中でガッツポーズを決めた。
（こいつぁ……なかなか愉しめそうですわね！）
「まぁ！ちょうど私達もこちらのお宅に用がありましたの。折角だからその巡回使さんのお仕事ぶりを見学させていただこうかしら」
「く、クロエ殿下ぁっ!?あ、し、失礼しました！いえ！しかし……ヘーウィッシュ様より誰も通すなとの命令を受けておりまして」
「まぁまぁ、王子夫妻の来訪だから寧ろ喜んでくれると思いますわよ

？ここはちょっとしたサプライズということで……通してくれませんこと？」
「あー済まない。クロエはこうなると止まらないのだ。俺から君たちの上司には後から説明するから、ここは通してくれまいか？」
　何が何でもゴリ押そうという姿に「絶対に譲らない」というメッセージ性を感じたバルブロも仕方なく援護に入ると衛兵達も仕方なくといった様子で三人を屋敷の中へと通した。
「……俺達、両殿下に声を掛けられたんだよな？」
「うん、会話の内容は別として王族の方と直接話せるって、これ誇っていいと思うわ」
「というか、バルブロ王子ってやっぱデケぇ」
「それな」
　その後屋敷の中では愉快な事が生じるのだが、門前の衛兵達は知る由もなかった。

クロエ奔走録②

王都某所
そこは日の当たる世界に住むものは知らない場所。
否、知るべきでない場所である。
何故ならそこは「八本指」が居座っているからである。

「さて、緊急の会合に集まってもらい感謝したいところなんだが、敢えて言わせてくれ……どうしてこうなった？」
その日、八本指の首脳陣は誰しもが同じ事を考えていた。
『どうしてこのタイミングで王国が乗り出してきたのか？』
ちょうど前日は定例会が行われる日であった為、各部門の代表や幹部は皆王都入りしていた。
そしてそれを待っていたかの様に発せられた王令、つまり『王都頂上作戦』の開始により彼らは足止めを食らってしまったのだ。
「あの忌々しい小娘めぇ……ボウロロープの青二才めぇ」
ある者はひたすらに計画（クロエ）の発案者を罵った。
「このタイミングで王都全域に移動制限をかけるとは……」
「それとなく王都外に出る通路を探させたが、そこらかしこに兵が張り付いておる」
ある者はこの窮地を抜け出す術を探った。
「表の茶番が落ち着くまで籠城するのはどうか？幸い非常時の食料も蓄えてある」
「帝国の『麻薬王』パスコバルは籠城してた所をやられたって言うじゃねーか。あまり縁起はよくねぇぜ」
ある者は嵐が過ぎ去るまで耐え忍ぶべきかを迷った。
「もしや、内通者か……？」
そしてある者は、思った所で誰も口に出そうとはしなかった一言を漏らしてしまった。
「……流石にその発言は許容できんのう」
「そうか？揃いも揃ってチンピラだ。裏切りの一つや二つ、あるかも

しれないぜ」
「ほらほら、皆さん落ち着いて……」
　誰も彼もが疑心暗鬼になっている最中、とてつもなく汚い悲鳴が上がった。
「あ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ーっ!?」
「……誰だ今のクッソ汚い声は？」
「……ごめん、アタシ」
　場のざわめきを制した悲鳴の主は奴隷売買部門の長、コッコドールだった。
「アレが君の地声か？……マジで汚かったぞ」
「そうだぞ。うちの犬が踏ん張ってる時よりひでぇや」
「いやん、もう！失礼ねっ！……っじゃなくて！ねぇゼロ？アンタのところのサキュロントのことよ～」
　普段のなよなよした彼からは想像できないほどに野太く汚い地声によって場の空気は少しばかりなごんだが、当のコッコドールはそれどころでは無いようで、沈黙を続けるゼロに話しかけた。
「サキュロント？やつがどうかしたのか」
「ほら、昨日の会議で話した処分予定の女の件あったでしょ？今頃何も知らずに動いてるかもしれないわん！……彼、大丈夫かしら？」
　大丈夫だ、問題ない。
　と、ゼロは答えたかったが、改めて状況を考えると本当に大丈夫かと不安がよぎった。
　サキュロントは確かに六腕に称される実力を持つが、戦士という面から見れば未熟の一言に尽きる。
　今回は女の回収ということで都合良く近くにいた彼を派遣したのだが、衛兵や騎士が巡回する今の王都で事が大きくなった場合、サキュロントが切り抜けられるかは良くて五分というのがゼロの結論だった。
　流石に正直に言うと警備部門の面子を汚すことにもなるだろうと考えたゼロは、徐に両手の手の平を合わせて目を閉じた。
「……合掌」

「おい！それってよぉ、『神のみぞ知る』ってえ修行僧（モンク）ジョークか!?合掌だけに!?」
「この状況で冗談かますか!?クッソ趣味悪いぞ！」
「アンタの事見損なったよ！」
ここは周囲の緊張をほぐす為にユーモアに富んだ返しをしよう。
そう考えて先の一発芸に踏み切ったゼロであったが、彼を罵る言葉はその心をひどく傷つけたという……。
※※※※※
どうしこうなった！
六腕『幻魔』サキュロントは何度目となるかわからない悪態をついた。
奴隷売買部門からの依頼で処分予定の女を取り返すなんていう『簡単な仕事』のはずが……
どうしてこうなった！

サキュロントは今回の仕事にあたり、八本指の息のかかった巡回使、スタッファン・ヘーウィッシュを連れて行くことにした。
スタッファンはサキュロントをしても度し難い変態であったが、傲慢さという点においては悪徳官吏的にポイントが高く、今回のような仕事にうってつけであった。
「……と言う訳で、おたくの執事がサキュロント君の経営する店舗から従業員を誘拐したところを目撃したと報告があがっているのですよ。お分かりいただけましたかな？」

ねっとりした口調で目の前の令嬢を嬲るような様子には吐き気を覚えたが、サキュロントの予想通りスタッファンは良い仕事をしていた。
令嬢の方も執事の失態を認めて、面倒を避けようとするまであと少しだろう。
そう思い始めた時、突然応接室のドアが叩かれた。
「ソリュシャンお嬢様、ただ今戻りました」

「あら……セバス、貴方にお客様よ。入ってきて貴方が相手なさい」
「かしこまりました」
（クソッ！あと少しだってのに）
サキュロントは内心で舌打ちをした。
ドアを開ける執事の横を通り過ぎるソリュシャンと呼ばれた令嬢を目で追っていると、突然彼女が立ち止まり、廊下にいるであろう何者かと言葉を交わしていたのに気がついた。
下調べでは、この屋敷には令嬢と執事しかいない事がわかっている。
そうなると考えられるのは一つの可能性だけだった。
（もしかしたら例の女か？なるほど、やはり面倒事は避けたかったらしいな）
「……スタッファンさん、おそらく執事と一緒に例の女が来ます。そうしたら一気に畳み掛けてください」
「うむ、私に任せておけ」
サキュロントの耳打ちにサムズアップで応えるスタッファン。
しかし、悲しいかな。
もしサキュロントが戦士としても秀でていれば、「第三の人物」の他に「第四の人物」の気配が控えていることがわかったであろうし、「強者」の気配にも気付けていただろう。
更に悲しい事に、二人は「知る機会」を逸していたのだ。
「王都頂上作戦」が開始されている事を。

「ヘーウィッシュ巡回使、貴公の職務の視察に参った。我々はいないものと思って仕事を続け給え」
「お邪魔しますわね、巡回使様。ところでそちらはどなたかしら？」
巨人（バルブロ）と死神（クロエ）がやってきた。
（いっやぁおかしいだろっ！なん、なんでこの二人がここにいるんだよっ！というかなんだこの存在感っ!?お、押しつぶされそうだっ……！）

サキュロントは発狂しそうな精神を現状分析をしつつ落ち着かせようとしていた。
一方スタッファンは泡を吹いて気絶していた。
しかし、死神(クロエ)は彼を気絶させたままにするほど優しく(無慈悲ではない)はなかった。
「まぁまぁ、巡回使さんってばお疲れなのねぇ。ちょっとごめんあそばせ……えいっ！」
パタパタとスタッファンの背後に駆け寄ってきたクロエは彼の両肩を掴み、更に肩甲骨と背骨の間の肉を親指で一気に押し込んだ。
「……アァイィッッ!?……はっ!?」
すると激痛に驚いたスタッファンが悲鳴を上げながらも意識を取り戻した。
「お目覚めですわね巡回使さん！どうぞお仕事を続けなさって！」
クロエが微笑むとまた気絶しそうになったスタッファンであったが、ここでまた気絶してしまえば違法な娼館に通っている云々を抜きに普通に不敬罪で処罰されると思い、何とか踏みとどまった。
「あ……はい、で、殿下……お仕事、がんばりましゅ……」
※※※※※
「それでは……ご用件をお聞きしましょう」
スタッファンが落ち着きを取り戻したのを見計らったセバスが、対面に座り、尋問(おはなし)は開始された。
字面がおかしい？
……いや、これで正しい。
「で、では改めて……お、お嬢様にはすでにお話しましたが、最近このあたりで不審者が目撃されていまして、治安を司る者としてこのように一軒ずつ伺ってお話を……」
(この役立たずっ!?)
サキュロントが怒りを覚えるのも仕方が無いが、スタッファンの行動は必然的と言える。
王国と八本指。
一つの国と一つの結社。
どちらも敵に回すのはゴメンだが、天秤に掛ければ一目瞭然。

スタッファンは「当たり前の選択」として八本指を裏切った。
しかし彼女の前では無意味だった。
「あっれれー、おかしいですわねー？ソリュシャンさんから聞いた話だとセバス様が誘拐を働かれたとか何とかだったような気がしますわー。王子も聞いてましたわよね？」
「う、うむ。確かにセバス殿を誘拐犯と貴公らが疑っていると話していたな」
クロエが何処ぞの少年探偵のようなセリフでカウンターを取ると、スタッファンは慌てて訂正した。
「そ、そうでした！こちらの執事殿と思しき人相だったと言う証言があったのでアリバイの調査に来たのです！」
「え、ええ、しかしどうやら違うみたいですねえ、はい。いやぁお時間を取らせてしまって申し訳……」
「お待ちくださいサキュロント様」
こんな場所じゃできる事もできやしねぇ。
とっととずらかろうと腰をあげようとしたサキュロントにセバスが声をかけた。
「ど、どうかしましたか？」
「いえ、個人的に気になった事が。好奇心といいましょうか、一つだけお答えいただければ構いません」
まるで蛇に睨まれた蛙の心地。
目を逸らすことすら許さぬという気迫を感じながらサキュロントは目の前の執事の質問を待ち構えていた。

「お仕事は、何を？」
サキュロントは思わずスタッファンと目を合わせた。
質問の真意を掴めない。
しかしスタッファンが嘘を付いたことにより追い詰められた事から、でまかせを言うのも得策ではない事は明白だった。
故にサキュロントは台本（カバーストーリー）通りに答える。

「し、仕事って……せっ、接客業ですが？」
「そうですか。では貴方がたが私を疑うのも無理はありませんね」
対してセバスはやれやれといった様子でサキュロントに返す。
「昨日、私はとある少女を保護しました。容態も芳しくなかったので、当家で手当を施し安静にさせています」
「おぉ!?つ、つまり誘拐を認めるというのだね？」
「ちょっスタッファン！……さん」
スタッファンの追求は誰の目から見ても早計であった。
頼むから勝手なことをしないでくれ。
今更ながら人選ミスだったのではと後悔したサキュロントであった。
「おい待てスタッファン巡回使。セバス殿は保護したと言っているのだ。それを誘拐と決め付けるなどどういう了簡だ！答えによってはタダでは済まさんぞ！」
これに怒りを覚えたのはバルブロだった。
あの場に居合わせた者として、事実と異なる認識に異を唱えねばならぬと立ち上がり声を上げた。
「そもそもだ！俺もその場に居合わせたというのに、なぜセバス殿だけしか目撃されていないのだ!?」
「そ、それはたまたま視界に入らなかったのでは」
「この巨躯が視界に入らぬだと!?はっきりさせよう巡回使、お前たちの発言は出鱈目に過ぎる！どのようにしてことの経緯を知り得たかは知らぬが、セバス殿が八本指に虐げられていた少女を救い出したというのが真実だ！」
巨躯、大声量、そして怒気。
バルブロから発せられる迫力はまたしてもスタッファンの意識を狩り取ろうとしていた。
もちろんサキュロントも例には漏れない。いくら六腕の末席と言えど、怒れる巨人を前にしては軽口を叩けるほどの精神力を彼は持っていなかった。
（バルブロのくせにカッコいいですわね……私も負けてられませんわ

！）

そしてクロエもここぞとばかりに行動を始めた。

「それじゃあお二人に私からも質問です。私、嘘は嫌いなので正直に答えてくださいな」

音も気配も無くサキュロントとスタッファンの背後に移動したクロエは、二人の肩に手を置いてたずねる。

「セバス様と王子の発言を聞く限り、これには犯罪結社『八本指』が絡んでいるということがわかりましたわ。王国を揺るがすならず者！なんて恐ろしい存在でしょう！……触らぬ神に何とやら、普通は誰も関わりたくないし、見て見ぬふりをするのが当たり前ですわね」

無駄に芝居がかったセリフと共に肩に置かれた手に力が入る。

まるで万力に締め上げられるような力強さに、二人は思わず顔を歪めた。

「じゃあ、貴方たちはどうやって此処に辿り着いたのか？誰が目撃して誰が通報したのか？気になりません？私は気になりますわ」

（何だこの握力!?身動きが取れねぇ！）

サキュロントの独白にそろそろ飽きてきた頃だと思うが、もう少し付き合って欲しい。

クロエの握力は普通の成人女性のそれとはワケが違う。

時に鍛冶師として金床に向かい、時にワーカーとして剣を振るう。

意識下、無意識下を問わず二十余年という年月を費やした鍛錬によって培われた「握力」はそれだけで英雄（面白人間レベル）の領域に達していた！

実にその握力！　計測不能！

そしてクロエは貴族、現在の王族の身分を自覚し、スタイル保持、肌のケアには人一倍気を使っているため、初見でその化け物じみた怪力に気づくのは至難の一言に尽きる！

つまり、掴まれたが最後、サキュロントとスタッファンの「鎖骨から上腕骨にかけた一帯」の生殺与奪はクロエの思うがまま！

鬼か。

いや、勧善懲悪モノも好きなクロエ様である。

（……おっと、私とした事が端ないですわ）

流石に熱が入り過ぎていた事に気がつき、クロエが握力を緩めた瞬間、
「は、八本指ですっ……！」
恐怖に耐えきれなくなったスタッファンは泣き叫ぶように叫んだ。
「そ、その男は八本指の警備部門、六腕のサキュロントですっ！わ、私はその男に脅されてっ、し、仕方なく手伝わされてましたぁっ！」
「スタッファン！てめぇっ！」
サキュロントはスタッファンの二度目の裏切りに腹を立てて立ち上がろうとするが、それを制するように未だ肩に置かれたクロエの手に力がこもり阻まれた。
一方クロエの手を払いのけたスタッファンは地面に手を付き頭を擦り付けるとクロエに嘆願した。
彼が行う事のできる精一杯の生存戦略だった。
「な、何でも話します！八本指の内通者！違法な娼館の場所！く、黒粉を取り扱ってるし、商人も知っています！だ、だだだ、だからっ……！」
「だまらっしゃい!!!」

しかし、スタッファンの嘆願を雷鳴の如き一喝が遮った。

（あ、流れ変わりましたわね）
※※※ここからは『暴れん坊将軍オリジナルサウンドトラック』収録曲「M―72」と合わせてお楽しみください※※※
「巡回使スタッファン・ヘーウィッシュ。貴公は脅されたと申したが、俺は貴公の悪行の数々を知っておるぞ」
「へっ、はっ？」
「恐喝まがいの徴税、婦女暴行、収賄に伴う違法な地上げ行為、更には八本指の息のかかった店にあしげく通っての淫蕩三昧な私生活、……貴公は隠し通せていると思っても市井の眼は誤魔化せぬ！」

バルブロの口から語られるスタッファンの汚職の数々。
それらがすべて事実であると物語るようにスタッファンの顔が青ざめていく。
「な、なぜ殿下がそのような事を……」
「戯け者！俺が普段から何をしていようか知らぬと申すか!?」
その瞬間、その場に居た者たちの脳裏を走馬灯のように王都の普段の風景がよぎった。
老婆の荷物を運ぶバルブロ
木から降りられなくなった猫を助けるバルブロ
足を取られた馬車の荷台を押すバルブロ
子どもたちの遊び相手をするバルブロ
工事現場でツルハシを振るうバルブロ
酔っぱらいの相談に乗るバルブロ
そう、どの場面にもバルブロは「居る」のだ。
「王都の民は我が眼、我が耳。殊悪党の所業においては見逃すはずもなかろう」
（何処ぞの風来坊兼８代将軍じゃねーですの！……私もやってみたいですわねぇ）
前世の大人気時代劇の主人公を思い出したクロエはバルブロの事を少し羨ましいと思った。
「貴公は王都、王国に仕える巡回使という役職に付きながら、市民を食い物にして私服を肥やすに飽き足らず、あろう事か八本指の手先として悪事を働くとは官吏の風上にもおけん。そして此度、セバス殿に濡れ衣を着せて王国と帝国の間に軋轢を生じさせようとしたその方等の行いは国家への叛逆にも等しき蛮行。もはや言い逃れはできぬものと知れぃ！」
「は、ははぁーっ！」
それは悪徳官吏スタッファン・ヘーウィッシュの事実上の敗北宣言。
これが騎士や官吏（同僚）相手であれば打つ手はあったのであろうが、王族、それも次期国王と目される王子直々の舌鋒をやり過ごす術など持

ち合わせてはいなかった。
彼に残された道は唯一、獄に入り法の裁きを待つのみである。
「てっ、手前ぇら動くなぁーっ！こっこ『この女』がどうなってもいいのかぁー!?」
しかしサキュ札ロント付は違った。
端からの悪人で、普段から権力者など屁でもないと構えるこの男はクロエの拘束から脱出するとともに隠し持っていたナイフを、あろう事かクロエの喉元に押し付けたのだ。
「この女は人質だ！俺を追ってくるようなら躊躇いなくこのナイフをこの女の喉にブッ刺す！」
サキュロントは邸外への逃走経路を『窓』と定めていた。
多少高さはあれど、伊達に六腕『幻魔』は名乗っていない。
軽戦士の身軽さを活かせばなんのその、あとは真面目さが取り柄の衛兵を撒けば逃走完了だ。
「ま、まぁ待て。お前には手を出さないから、下手な真似はやめろ。わかったか？下手な、真似は、するな」
「テメェーはだぁー黙っってろぉーっ！」
バルブロが諭すようにサキュロントに忠告するが、絶賛逃走モード中の彼の耳には届かない。
口角に泡を飛ばし、クロエを盾にしながら脱出路と定めた窓を開け放った。
「……『開け』ましたわね、『窓』を？」
サキュロントは気づくべきだった。
人質にされているのに何故ここまで落ち着いているのか。
なぜ自分はあの怪力の拘束から抜け出せたのか。
なぜこの女は『笑って』いるのか。
そしてクロエは既にサキュロントの拘束から抜け出していた。

「あっやびぇ」
左頬へのビンタ、続けざまに右頬を拳打が襲う。
更に目潰しにより思考力が一瞬奪われる。

そして顎先を掠める切れ味鋭い右フックが脳を揺らす。
「ホアーッ！アタタタタターッ！」
それらが下準備であったと言わんばかりに、クロエの放った怪鳥の如き叫びとともに繰り出される拳打、蹴撃がサキュロントを襲う！
時間にして僅か１０秒。
しかし総打撃数、実に１５０発！
故に毎秒１５発！
これは現代のアメリカ軍で使用されているＭ２４０軽機関銃の発射速度に相当する！
そして驚くなかれ、「武技」を使わずにコレである。
「～～～～～～っっ!?!!」
（動けねぇっ……！）
拳打蹴撃の嵐に晒されるサキュロントは防御することも、悲鳴を上げることも許されず、ただ巻藁の如く打たれ続けた。
「ひ、ひひ、ひいいいっ！」
その光景を目にしたスタッファンは、その連撃を受けたかもしれない自分を想像して悲鳴を上げた。
（あの連撃、力任せ且つ我武者羅に打ち込んでいるように見えて、その実的確に急所のみに打ち込んでいる……。威力、技術力ともに侮れません。格闘戦に限れば実力はプレアデス以上、まだ私には劣るものの油断はできません。……モモンガ様がおっしゃった通り、やはりプレイヤーなのでしょうか）
セバスはその身に備えた修行僧（モンク）の性か、クロエの連撃の一つ一つを目で追いながらその戦闘力を評価していた。
「……あー、窓ってそう言う」
そして『クロエの打撃を受け切れる男』バルブロはと言うと、クロエの発した言葉の真意を察して呟いただけだった。
「ホワッチャアアッ！」
次の瞬間、すでに満身創痍のサキュロントに向けて、クロエ渾身の

バックスピンキックが放たれた。
それを受けたサキュロントは宙に舞い上がり、
綺麗な放物線を描きながら窓から外に放り出される。
意識が途切れていたのか、サキュロントは何言も発さず、そのまま地面へと叩きつけられた。
「う、うわあぁぁ！」
「屋敷の中から人が降ってきたぞ!?」
「さっきの悲鳴といいなんだってんだコレぇ！」
「ヘーウィッシュ様！ご無事ですかヘーウィッシュ様！」
「ん？……こっコイツ！まだ息してるぞ！」
門前で待機していた衛兵がサキュロントに駆け寄っていく様子を見守り、クロエは一言呟いた。
「やれやれですわ」
※※※※※
「やれやれですわ、……じゃあないだろ！……ソリュシャン嬢にセバス殿、迷惑をかけて本当に申し訳ない！」
「恐怖のあまりつい……お見苦しいものをお見せして申し訳ございません！」
スタッファンとサキュロントを収監するために周囲で衛兵が忙しく動き回る中、バルブロとクロエはセバスとソリュシャンに謝罪をしていた。
流石に王族に頭を下げさせるのは不味いと感じたセバスが口を開こうとするが、その前にソリュシャンが「商人の令嬢」として癇癪を起こした。
「全く良い迷惑だわ！官吏には下卑た表情を向けられる！訳のわからない脅迫を受ける！貴方達が来たと思ったら人の家で怒鳴り声を上げる！お次は暴力沙汰ときたわ！セバス！貴方が近くにいながらなぜ見過ごすようなことをしてたの!?もう、王国なんてコリゴリよ！」
「ソ、ソリュシャン嬢。どうかセバス殿を責めないで頂きたいのだが……」
バルブロはセバスを非難の矛先から逸らそうとしたが、「お前は口

を出すな」というソリュシャンの剣幕のせいで引き下がらざるを得なかった。
　続いてソリュシャンはクロエに顔を向けた。
「そして貴女！……は、まぁ噂通りの人だったのね」
「え、私の噂……まさかっ!?」
「『武器を持つのは手加減の証拠』のクロエ様だったかしら？裏を返せば『素手のほうがおっかない』なんて、あの男もついてなかったわねぇ。ねぇ、お茶の代わりに生き血を飲むって本当なの？」
（アレ（クロエ・ファクト）の事、知ってんのかーい！）
　クロエはソリュシャンの叱責を甘んじて受けようと身構えていたが、予想外にも都市伝説の方で食い付かれて、困惑していた。
「い、いや……、それは戦場の噂ってやつですわよ。女だてらに戦場で武功をたててしまってるから、アハハ……」
（これ確実にマークされちまってるじゃねーですの……。変に誤魔化して後々拗れるよりは、ここは正直に話すしかねぇですわ！）
「へぇ、じゃあ戦場でも素手で戦うの？」
「それは最終手段ですわ。……んー、素手喧嘩（ステゴロ）なんかそうそう見せる機会も無いのになんでそんな噂が流れてるのかしらね？」
「ふーん？」
　なるべく平静を装って応対するクロエ。
　しかし、顔を近づけてくるソリュシャンに同性ながらもドキがムネムネ（死語）であり、そろそろ限界というところまで来ていた。
「ソリュシャンお嬢様、両殿下にも聞き取りをしたいも衛兵の方が仰ってますので、そろそろよろしいでしょうか？」
「あら残念。もっとお話ししたかったのに」
　そこに助け舟を出したのはセバスであった。
　クロエにだけ分かるように目配せをしながらソリュシャンを誘導する。
（んー、情報収集目的でフレンドリーな感じで絡んできたとすれば、こっちも準備万端で臨みたいもんですわね。……だったら先手を取るまで！）

「ソリュシャンさん、今日はいきなり押しかけたりご迷惑をお掛けしっぱなしでごめんなさい。ことが落ち着きましたらお茶にご招待させていただいてもいいかしら？そこで今日の続きをお話もしたいですし、ね？」
「……ええ、楽しみにしていますわ」
改めての謝罪に合わせて埋め直しの提案をするクロエ。
これに対してソリュシャンは僅かに微笑んで返した。
魔法対策ガバガバに定評のある王国とはいえ、クロエにとってのホームである。
ソリュシャン側から招待された場合、下手を打てばナザリック直行は確実であると考えた末、「王族が直々に招く」という一般的に断りづらい提案をしたのだった。
結果ソリュシャンはこの提案を飲み、クロエはその事に安堵した。
こうしてソリュシャン邸（クロエ命名）での一波乱は幕を閉じるのであった。
※※※※※
場所は戻り、八本指の会合場
「おい、コッコドールのやつがパクられたってのは本当か？」
「あと六腕の『幻魔』サキュロント、協力者の巡回使もだ。粗方、その二人がゲロしたと見て良いだろう……」
奴隷売買部門長、コッコドールは私用のために娼館に戻っていた所を精鋭兵団の突入部隊に待ち伏せされて拘束された。
何とか追手を出し抜いた構成員の話では周辺一区画すべての家屋に臨検が入っており、それは首脳陣を戦慄させるには十分な情報だった。
「精鋭兵団、突撃しか能のない猪武者どもと侮っておったが……」
「警備部門といえど正規部隊相手に敵うかどうか……」
二人の部門長が言葉を交わしていると、怒りを顕にした警備部門長、『闘鬼』ゼロが口を開いた。
「サキュロント……六腕の面汚しめがぁっ！」
「アンタも笑えない冗談カマしてただけって時点で同罪だからね。は

い、合掌」
看板に泥を塗られた事に腹を立てていると麻薬取引部門長のヒルマから鋭いツッコミがはいる。
他の部門長も「そうだそうだ」と言いたげな表情だ。
「まぁさ、今回の件で王国が本気で潰しにかかってるってのがわかって良かったじゃないか。……このままじゃアタシら『麻薬王』の二の舞だよ」
ヒルマが続けて発した言葉に首脳陣たちも息を呑む。
『麻薬王』ナスコール・パスコバル。
八本指創設よりも昔に帝国裏社会で一財を築き上げた稀代の大悪党。
敵対するものは貴族であろうと一族郎党根絶やしにするという残忍な性格であり、その最期は敵を作り過ぎたことによって籠城していた所を帝国軍に見つかるという、大悪党としては惨めなものであった。
「王都の外には近隣貴族の兵が集結してるし、もう逃げ場は無いさね。だったらやる事は一つだよ」
ヒルマの言葉を待っていた八本指首脳陣はその内容に驚愕した。
それは王国建国史上類を見ない、クロエですら予想だにしない凶悪犯罪、その計画であった。
※※※※※
アベリオン丘陵某所
通称『デミウルゴス牧場』
「はは、ハハハハハハッ！面白いっ！実に面白い人間だクロエ・カティナ・デイル・ボウロロープッ！」
バルブロとクロエが屋敷に訪れるという情報はソリュシャンからナザリックにも伝わっており、一部の守護者はその様子をそれぞれ見ていた。
もちろん、この大笑いしている悪魔（デミウルゴス）も例外ではなかった。
「善人の様に振る舞いながらその内面は混沌！残忍さにおいてはライ

ヘンバッハ以上か！『黄金』とはまた違った精神の異形！プレイヤー疑惑があるとは言え、これは実に興味深い！」
新しい玩具を目の前にした子供のように騒ぐデミウルゴス。
どうするクロエ、お前が一番苦手な奴に目をつけられてるぞ。
※※※※※
王都　ソリュシャン邸
「ソリュシャン、先程のは一体何ですか？」
クロエ達が去ったのを確認したセバスはソリュシャンがクロエに一芝居を打った理由を訪ねた。
「『我儘な令嬢』という役割を利用できる良い機会と思い、彼女の口から噂の実態を聞き出そうと思いました」
「……なるほど。であるならば特に言うことはありません。それと、彼女との『お茶会』については一度モモンガ様にご報告し、対策を考えたほうが良いでしょう」
ソリュシャンの説明に理解を示したセバスであったが、実のところソリュシャンの行動は公私が混じった物だった。
（クロエ妃……人間のわりにいい趣味（嗜虐嗜好）してるわね）
何を隠そう彼女「も」一部始終を見ていた一人である。
最初のうちはただの観察であったが、途中からクロエの「精神的に追い詰めていく手法」に魅入っていたのだ。
（それにあの表情（笑顔）……思い出すたびにゾクゾクとするこの感情は何？）
更には悪属性特攻精神兵器（クロエ・スマイル）に晒され、彼女自身もドキがムネムネ（死語）してしまうという事故が発生。人間と違い、あからさまなバッドステータス化はしないものの、「気になる」程度にはクロエを意識してしまう原因となっていた。
おいおい、まさかデミウルゴスだけでなくソリュシャンからもガチマークされるとか、さすクロだぜ。

義姉なるもの

私には義姉がいる。

私が物心がついて間もない頃のことだ。

私のもとに一人の女の子が訪ねてきた。

「あなたがラナーね？私はクロエ！よっろしくぅーねっ！」

私よりも5歳年上のその女の子は、とても明るくて

「おはようからおやすみまで、窓から上がり込むクロエですわっ！」

「ラナー！お菓子《お宝》を探しに冒険の海に漕ぎ出す（厨房忍び込む）わよっ！」

「はわわっ！料理長に見つかりましたわっ！後方に向かって全速前進ですわっ！」

「う、うおおーっ!?お菓子、お菓子があぁーっ!?わ、私は諦めねぇですわーっ！」

……とても変人。

でもそんな彼女を「姉」として慕っていた時期があったのは事実だ。

曰く、私は「賢すぎる」らしい。

そのせいで周囲の大人は私を不気味がっていたし、私も周囲の大人が不気味がって避けようとしているのは理解できた。

そしてこの国が滅びの道を辿っているという実情も。

だからだろうか、彼女（クロエ）の陽気、奇想天外な性格はそうした現実から私を遠ざけてくれる「聖域」のように思えてしまうのだ。

「クロエ姉さま、なんで姉さまは私に構ってくれるのですか？」

「え？だってラナー、あなた友達いねぇじゃねーですの」

「ひどい!?」

それはふとした思いつきの質問だった。

彼女は陽気な変人というだけで愚者ではない。

不気味がられる私にどうして親身になってくれるのか？

聞けばボウロロープ侯の一人娘らしく、政略的な意図で近づいてきたのだと勘繰った末の質問。

それに対して、彼女は決定的な事実を私に突きつけることで答えと

した。
「アハハ、メンゴメンゴですわ。まぁ、王様に蝶よ花よと育てられてるとはいえボッチじゃあ性根の歪んだ王女様になりそうだなぁって思って、ここぞとばかりに友だち一号の座を獲っただけですわよ」
「ぼ、ボッチ……」
「小鳥や花に話しかける麗しの王女様……。でもボッチじゃあ……ねぇ？」
「わ、わぁーん！ボッチって言わないでください～！」
「ギャーッ!?ゴメン、ゴメンって！だから目に指を突っ込もうとするのはやめるのですわーっ!?」
……いま思い出しても恥ずかしさの余りに顔から火が出そう。
事実を認めるのは癪だが、そう、たしかに当時の私には同世代の友人がいない、いわゆるボッチだった。
だからこそ、「友だち一号」の彼女には心を許せたのかもしれない。

要するに、私は彼女に魅了されていたのだ。

しかし、時の流れは残酷で、「友だち一号」はいつしか「義姉」になった。

「えぇっ!?あのバカ……バルブロお兄様と結婚されるのですか!?」
「いまフッツーにバカって言いましたわよね？」
「……いや？」
「えぇ……」
私が13歳の時に彼女はバカ……長兄のバルブロ第一王子との結婚話が来ていることを教えてくれた。
「ねぇお姉さま、ふとした弾みで第一王子の首を蹴り飛ばしたりできませんか？」
「できるわきゃーねぇですのっ！全身を壁にめり込ませるのが関の山ですわっ！」
「あっ、それならできるんだァ……」

やっぱり義姉は変人だった。
義姉が普通じゃない事には気付いていたつもりだったが、それは片鱗でしかなかったという事をこの頃は痛感させられた。
ば……長兄は殴るわ、「鍛冶師になった！」と工房を建てた事を報告するわ、「ちょっと戦争行ってきた」とボロボロになって報告してくるわ……
基本的に事後報告が多い。
あと御前試合にどういう訳か参加していた時は「本当にどうかしている」と思ったものだ。
※※※※※
『えぇー、続きましての試合は……』
『いぇーい！ラナー見てるー？このスーパークロエちゃんがビシッと決めてやりますから目ぇかっぽじって見るんでしてよぉー！』
『ブフゥッ!?クロエっ！貴様そこで何をしているっ!?』
『まぁまぁお父様。軽ぅーく勝ち進んでやりますからどっしり構えてほしいですわ！』
『ハッハッハ。侯の息女は父親譲りの豪快さがあるのぅ』
『陛下……娘には後でキツく言い聞かせますので、どうかご容赦を……』
※※※※※
「あっそうでしたわ。ラナー、あの娘とは仲良くできてる？」
「ラキュースですか？えぇ、昨日も彼女とは一緒に楽しくお茶をしましたよ」
そしてアインドラ家の令嬢、ラキュースを私と引き合わせた事。
彼女もまた英雄に憧れて冒険者になった変人だが、義姉のそれと比べると凡人、下位互換的な存在である。
「良かった……ボッチの変人で私以外に友だちを作れないんじゃないかと心配してたけど杞憂でしたわね」
「えっ、お姉さまだけには変人って言われたくないです」
「え？」
「それと、私にはクライムという素敵な騎士がいるのです。だから、

ボッチ呼ばわりはやめてください！」
そう、可愛いクライム。
子犬のような瞳で見つめられて以来、彼無しの生活は考えられなくなった。
うへへ……。クライムは最高だぜぇ。
だからこれ以上のボッチ呼ばわりは控えて欲しい。
……話がそれた。
「まぁほら、私も結婚したら晴れて王族の一員になるわけだけど、政治や領地経営の勉強にも力を入れたいし、そしたらボッ……ラナーともこうしてゆっくり過ごす時間も少なくなるからって理由もあるのだけれど……」
「どーにも私には防げなかったみたいですわね。貴女の心の歪みは」
……あぁ、やっぱり貴女は嫌いだ。
そうも簡単に私の本性を見抜いてしまうなんて。
でも、ボッチと口走ろうとしたのはいただけない。
「あぁ……、王女がしちゃいけないような顔になっちゃってますわよ」
「あぁ、ごめんなさい。ちょっと直しますね」
「その顔芸は可愛らしいのに……」
それはフォローのつもりなのか。
でも、ちょっとだけ嬉しい……。
まぁ義姉に看破された通り、私の性根は常人に比べて歪んでいる。
と言ってもそれは客観的評価であり、主観的には「周りの人間のほうが理解できない」のだ。
ただし、義姉は例外とする。
あの理解の出来なさは、私じゃなくても理解できないということだけは分かる。
「あ、いつもの顔に戻りましたわね。……で、私が構えなくなる時間が多くなっちゃうからラキュースやクライムに容赦なく支えられろってぇ事ですわ、私が言いたいのは！オーケー？」
「ふふ……オーケーです」

確かなことは、義姉の訳のわからなさに私は助けられていたという事。
もし義姉が「友だち一号」じゃなかったら、心の歪みは今以上に酷くなっていたかも知れない。
それこそ、「化け物」と呼ばれてもおかしくない位には。
そして今、そんな義姉ならこの国を変えられるのではないか。
そんなことを私は考えていた。
※※※※※
「ラナーよ、俺に知恵を貸してはくれまいか？」
その日、初めて人に頼られた。
その人はバルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフ。
要するに長兄、第一王子だ。
何でも王都の道路整備をする方法が知りたいらしい。
「お兄様、どこかで頭でも打ちましたか？」
「……？いや、転びはしたが、頭は打ってないぞ？」
うーん、この皮肉も通じぬ脳筋王子純情派！
……今のは一体？
……まぁ、せっかく頼られたのだし？
ここは妹として素直に知恵も貸しても良いのだろう。
理解できるかは別として。
「……お、お兄様？お兄様はどのような道路をお望みなんですか？」
「む、民の意見書はお前に渡しただろう。それが質問への答えだ。まぁ、俺のわがままを言えば王国の都にふさわしい立派な道路を敷き詰めたいな！」
このあと、滅茶苦茶頭が痛くなった。
あと表情筋も引きつったのでムニムニした。
あの長兄（バルブロ）が人に教えを乞う。

そんな長兄の成長に正直感動した。
立ち会った事はないが、赤ん坊が二足歩行を始めたり、初めて言葉を喋ったりしたときの感動というのは、恐らく今回のような事に近いのかも知れない。
ラキュースがこの成長のことを知ったら、一体どういう顔をするのだろうか。
里帰り中の義姉は……、あぁ、なるほど。
長兄の成長は彼女の影響か。
確か義姉の振るう暴力（本当に訳がわからない）から逃れる為に市街地に向かったのをきっかけに、最近は市民との交流を深めているらしい。
あの貴族然とした「下々の苦労など分からぬわ！ガッハッハッハ」といった価値観を変えさせるとは……本当に義姉の力は底が知れない。
それにしても、自分が転んだのをきっかけにって、……フフ。まるで義姉みたいな発想だ。
※※※※※
義姉、義姉さま。
今ほど貴女に頼りたいと思ったことはありません。
「御機嫌よう。王国の『黄金』、ラナー第三王女」
悪魔。
知識としてその存在は理解していたが、そこには「恐怖」というものはなかった。
だが、いま確実に。
私は「恐怖」している。
「一体、何のご用でしょうか？」
「なに、ちょっとした世間話だよ。ただ、盗聴対策は取らせてもらうがね」
その悪魔、デミウルゴス曰く、
「至高の御方」なる人物にこの世界を献上するという使命があり、その足掛かりを作る為に私に接触してきたらしい。

「聞けば王国は周辺国に比べて落ち目なのだろう？……あぁ、確か第一王子をはじめとして王族が改善に奔走しているのは知っているよ。しかし、人間は脆弱だ。君の兄上や義姉上がどれだけ尽力しようとできる事などたかが知れている。それに、人間の行為に『絶対』はあり得ない」

随分と遠回しな言い方だが、要するに「王国を売れ」と。

そして私にとって悪魔的（悪魔の言だから当然である）な魅力のある提案を持ちかけてきた。

「君の理想の実現は保証しよう」

あぁ、なんという事か。

悪魔は人を誘惑するというが、これほど魅力的な誘惑は人外の所業と言えるだろう。

彼の悪魔が醸す存在感こそが、ある種の担保と言っても良いだろう。

この悪魔に任せれば、まず間違いなく私の理想は実現されるだろう。

しかし、その代償は王国。

なんとも、なんとも馬鹿げた取引だろうか？

だからこそ、私はハッキリとこの悪魔に伝えなければならない。

「話になりませんね」

「……ほう？」

話にならない。

人間の行為に『絶対』はあり得ない？

ええ、それは至極当然。

人間の歴史は「過ち」の上に成り立つ物だ。

しかしそれでも、六大神や十三英雄の助けがあったとはいえど、人間は６００年の歴史を積み重ねた。

故に『絶対』などは不要。

必要なのは来たる『必然』に対処する知恵と力だ。

そして現在の王家は知恵（私とザナック兄様バルブロ兄様）と力を有しているし、

知恵と力の両方を有する個人(義姉)も有している。
つまり理想の実現のためには悪魔の甘言に乗る必要がないのだ。
そして今、私は初めて私が『嘗められた』事に怒りを覚えた。
「貴方に心配されずとも、王国の問題は王国の力で、王家の力で解決します。そして、――私は私の手で理想の実現を成し遂げます」
「だからあまり、王家(私たち)を嘗めないでください。デミウルゴスさん」
義姉さまに『顔芸』なんて言われる私も、流石に悪魔向けの顔なんて当然準備していない。
目の前の悪魔は「呆気にとられた」とも言っていいような表情で固まっている。
だから今、私はどのような顔でこの悪魔に啖呵を切っているのだろうか。
「……これはまた何とも予想外の反応ですね。こちらとしては大人しく恭順して貰いたかったのですが、まぁいいでしょう」
「あら、貴方ほどの悪魔であれば魔法を使って無理矢理にでも私を傀儡にする事ができるのでは?」
「勿論できますが我が主はそれを望まないでしょう。……後日改めて王国の真価については見定めさせていただきます」
それでは御機嫌よう。
悪魔はそう言うと夜の帳に溶けるように姿を消した。
その瞬間、全身からどっと汗粒が吹き出した。
足腰に力が入らず、堪らずうずくまった。
胃がきりきりと悲鳴を上げた。
心臓が激しく鼓動した。
感情が爆発しそうになった。
「こっ……!」
怖かった……!
これが恐怖……!
あれ(悪魔)は不味い。
あれは、あの悪魔は間違いなく王国、人類に災厄をもたらす存在だ。
唯一の救いは悪魔の主(至高の御方)という存在。

言葉の端々から察するに、悪魔の主は力に任せた支配は好まない。
いや、それは楽観的に過ぎる。
あの悪魔は王国の真価を見定めると言った。
価値を定めるには何かしらの基準が必要だ。
悪魔の行動原理は『主にこの世界を献上する』こと。
その足がかりとして王国に接触してきた。
なぜ王国だったのか？
帝国や法国に比べて土地や資源に恵まれる反面で政治的腐敗を抱えていたからだ。
つまり「乗っ取り」の為に王国に接触した。
しかし私が提案を断った事で悪魔は予定を変更しなければならなくなった。
焦る様子も伺わせなかったことから予備の作戦がある事はまず間違いない。
王国の穏便な掌握は断念。
強硬手段は悪手。
つまり、この時点で悪魔は「王国の扱い方」を見直さなければならなくなったのは確かだ。
つまり王国は『利用』される事を前提とした生存戦略が必要となる。
しかし使い潰されるような立場になってはいけない。
「利用価値なし」となった王国の末路は想像に容易い。
であれば「相互利用関係の構築」が最低条件、ベストは「政治的友好関係の構築」だ。
……ふう。
頭を使っていたら恐怖も薄らいできた。
まだ色々と疑問はあるが、それを解明するのは今じゃなくても良い。
今対処しなければいけないのは、近いうちに悪魔が何かしらの形で再び現れたときの対策。
その時の行動次第で王国の命運は決まるだろう。
……うん、ここはやはり義姉に頼るしかない。

義姉は変人だけど、何だかんだで実力者だ。
政治手腕も軍人としての腕も確かだし、度胸もある。
変人だけど。
そうと決まれば明日の朝一番にでも話をしなければ！
王国と世界の命運は義姉、クロエ・カティナ・デイル・ボウロロープの双肩にかかっているのだからっ！

クロエ奔走録③

「……ふぅー、いいお茶ですわね」
「義姉さま、私の話本当に理解してます？」
「チッチッチ。ラナー、私クラスの人間は『言葉』ではなく『心』で理解できるのですわっ！」
「……まぁ理解されているのなら良いですよ？」
ふふふ、この「１０年」も修羅場を潜り抜けてきたようなスゴみで納得してくれて何よりですわね。
それはともかく……、
どうしてこうなった！

八本指のヘイトを王国に集めてツアレ誘拐フラグを圧し折ればゲヘナ発動によるナザリック介入のきっかけも潰せる算段だったってのに……。
そうなりゃ後は頂上作戦の決行で犯罪者（無償労働力）もしこたま溜め込まれた資産も全部王国の総取り、考えるだけでワクワクが止まりませんわ
ファッハッハァー！ってなるはずだったのに……！
どうしてこうなったんですわぁ～っ！
修正力、修正力のせい!?またぁ!?
……ふぅ、起きてしまったものは仕方がありませんわね。
こうなりゃガチでゲヘナを乗り切るしか道はねぇ……！
やってやりますわよ！
「ふっ、これも世界の選択か……」
「義姉さま。ラキュースみたいな事してないで話の続きを」
ラナーよ。
世界の選択（修正力）って割とマジな話ですわよ？
「とりあえず、貴女のところに悪魔がやってきて『僕と契約して王国を滅ぼそうよ！』って勧誘してきたって事ですわね。で、貴女がそれをツッパネたら次回のアポを取り付けて消えた」
「そのセリフを聞いてると腹が立ってきますね……。まぁ大まかな流

れはそんな感じです……アポ？」
「にしても悪魔相手によくツッパネられましたわね。私ならビビって何もできなくなりますわよ？」
「そ、それは……やっぱり義姉さまの勇まｓ「ブェッくしょぃ!!」汚いです義姉さま!?」
いかんいかん、ついくしゃみが。
……さては誰か私の噂でもしてますわね？
「あ、そういえば何か言いかけてましたわよね？」
「な、なんでもないですっ！」
「えぇーホントでござるかー？」
「ほ・ん・と・う・で・すぅっ！……ゴザル？」
そっかー、本当なら仕方ないですわねー。
※※※※※
「んー、でも王国の真価ねぇ……。ラナー、貴女が考える王国の長所ってなんですの？」
「肥沃な国土に農業力、農民人口に比例する軍事力……ですか？」
「それに追加するならアダマンタイト級冒険者やガゼフ戦士長といった「強者」の存在ですわね。戦時の戦力には数えられないけど、個の戦力として質が高いし、王国は周辺国に比べて保有率が高いですもの」
……ぶっちゃけデミウルゴス、というか守護者勢が王国乗っ取りを諦めるとは思えないですわね。
結論から言えばナザリックが表舞台に出てくるのは確定事項。
未確定なのは、それまでに王国が被る被害の規模。
勝利条件なんてあってない（無理）ようなもの（ゲー）だから、どれだけ王国へのダメージを減らすかが重要ですわね。
その為にもまずは王国へのイメージを改善してもらい、できる限り対等な関係を築くことが優先になりますわね。
であれば「強い王国」をアピールするのがベストッ！
……問題はどうやってその話題を振るかなんですけど。

「義姉さま。もしかしたら悪魔や『至高の御方』という存在は個人ではなく『国家』、もしくはそれに準ずる勢力ではないでしょうか？」
「……え？」
ラナーさんスゲぇ。スゲぇ！
それもう大正解ですわよ！
え、どうやって気づいたの。
私、気になります！
「面白い仮説ですわね。詳しく聞かせていただけます？」
「あの悪魔……デミウルゴスとの会話を思い出したんです。『世界の献上』、つまり人類社会のみならず世界全てを手中に収める事が彼の仕事。では何故、わざわざ交渉などという手順を踏む必要があるのでしょうか？」
なるほど、その疑問は最もだ。
確か原作ではリザードマン部族へはいきなり宣戦布告してたわけだし、力を見せつけるのであれば外交的な手続きを無視できたと考えるのが正しいですわね。
「仮想敵国要人への接触、国家転覆の片棒を担がせようとする提案……。他種族とは弱肉強食が基本であるこの世界では確かに珍しい行動ですわね」
「あれほどの存在であれば周辺の人類国家も纏めて一夜で掌握できたとしても不思議ではありません。だからこそ、わざわざ外交的手順を踏まえてきた事が不自然なんです」
「悪魔の流儀という可能性は？」
「それならば現王のお父様や継承序列順に兄様達が真っ先に狙われるはずです。それに悪魔の主は強硬手段を望まない、個人の矜持や流儀は無関係だと思います」
このラナーさん凄いよぉ！
流石王国の「黄金（チート頭脳）」！
たった一夜限りの会談でナザリックの正体に辿り着くなんて……！
……デミウルゴスが私のところに来なくて本当に良かったです

わっ！
「なるほど、つまり『国家規模の正体不明の勢力』の使者としてその悪魔がやって来た。そう考えたほうが良さそうですわね」
「はい、国家に準ずる勢力と想定のもとに考えれば王国の再評価の意味や評価時期も想像がつきます」
「評価の狙いは国交の締結、もしくは侵略。どちらが自分達にとっての最大利益になるか。……それにタイミングは頂上作戦、それも一斉検挙執行中が狙い目ですわね。」
　間を置いて私が答えると、ラナーは首を縦に振った。
「現在王都周辺には衛兵、騎士、近隣貴族領の常備戦力が集結しています。軍事力は国力の目安になりますから何かしらのトラブルを発生させて、その対処能力で評価してくるのではないでしょうか」
「……そうだったとしたらかなり厄介ですわ。逮捕者の護送、証拠品押収に加えて市民の避難誘導に襲撃者の迎撃、しかも王国史上初の本格的な市街地戦闘に発展する可能性もある訳ですし……使える物は何でも使うしかないですわね」
　それからラナーとあれこれとやるべき事を話し合っていると、部屋のドアを叩く音が聞こえた。
「クロエ様、ラナー様。蒼の薔薇の方々がいらっしゃいました」
「蒼の薔薇？ラキュース達を呼んでましたの？」
「本当は八本指の拠点襲撃について擦り合わせをする予定だったんです。義姉さまも同席なさいますか？」
　……あー、同席せざるを得ないですわね。
　ほっといたら絶対ナザリックと揉め事……というより貰い事故に遭いそうだし。
「もちのロンですわ！」
「義姉さんって時々変な言葉を使うのが癖なんですか？」
　※※※※※
「お姉さま、お久しぶりでございます」
「へぇ、あんたが第一王子の嫁さんか」
「こらガガーランっ！態度がなってないぞ」

「よろしくー」
「……スンスン」
蒼の薔薇の方々って聞いてはいたけどさ、
まさか揃い踏(フルパック)みなんて聞いてねぇですわよ……。
「スンスンスンスン、ススンスンスンスンスンスン」
「あのー、ラキュース？彼女は一体……」
「ティア、お姉さまから離れなさい！ガガーラン手伝って！」
「鬼リーダー、ティアは狙った獲物は逃さない。既に手遅れ」
それに、さっきからティア(レズバーサーカー)がリズミカルに鼻を鳴らしながら匂いを嗅いでくる。
これティアだから許されるような構図だけど、割と真面目にサイコホラーですわよ。

「……やっぱりライヘンバッハの匂いがする」
「マ〝ッ!?」
怖えですわ!?
一昔前に流行ったヤンデレ妹ＣＤみたいで怖えですわよ!?
というかバレた!?嘘ぉ!?
「ライヘンバッハの匂い！吸わずにはいられない！スゥーッ！ハァーッ！スゥーッ！ハァーッ！」
「駄目だ！俺の力じゃ引き剥がせねぇ」
「あれは忍者の究極奥義、チャードコ・キュ。あの呼吸に入ったティアは無敵」
「アホかっ!?お前の姉妹だろ、何とかしろぉっ！」
「というよりもお姉さまが、ライヘンバッハ……？」
お、おお落ち着くのですわ私！
まだ、まだ誤魔化せるはず！……多分。
……ごまかせるかなぁ？
「あーその、つ、つい最近ライヘンバッハと会う機会があったので……」
「義姉さま、年貢のおさめ時かと思いますよ」

「ラナーさん!?」
「次に義姉さまは『なんでわかったこの義妹(ラナー)!』と言う」
「なんでわかったこの義妹(ラナー)ぁっ!……ハッ!?」

「初歩的なことですよ。ライヘンバッハの目撃された時期と義姉さまが里帰りされる時期が合致していた事、それとティアさんがライヘンバッハに密着していた際に匂いを覚えていたというのがこの状況で証明されたので、ライヘンバッハの正体がわかっちゃいました」
「どうせ目立つ事が好きな義姉さまの事だから、どこかのタイミングで大発表したいのだろうと思いますが、このメンバー相手なら先にバラしてしまってもいいのではないでしょうか?今後もライヘンバッハとして活動する際に有利に働くと思いますよ?」
こ、この義妹……、
安楽椅子探偵な立ち位置のくせにシャーロック・ホームズみてぇなセリフを使って解説しやがりましたわね。
正直カッコいいですわっ!
あとアドバイスもありがとうですわ!
「……ふぅ〜、とんだところに名探偵が居たものね。……そうよ、ラナーの言う通り、私がライヘンバッハですわ。あっ、国民(クラスのみんな)にはナイショ、ですわよっ!」
チャードコ(チャードコの呼吸)・キュを続けるティアをお姫様だっこで抱え上げて宣言。
抱き上げられたティアは歓喜のあまり昇天した。
「なっ!?ガガーランですら御せなかったティアを一瞬で……!」
「恐らく触れられた瞬間にチャードコ・キュが解除された。彼女がライヘンバッハなのは間違いない」
「……すまん、俺には理解できない世界だわ」
大丈夫ですわよマッチョメン(ガガーラン)。
私も理解できないから、貴女の反応は真っ当なものですわ。
「表の顔は一国の王子妃、しかしその正体は悪党に天誅を下す正義の魔剣使い……!王国が誇る護国の姫騎士……!いや騎士王、騎士女王!良いわぁ、実に良い響き……!」

これこれ、ラキュースさんや。
あと１８０度回らないと皆さんにノートの中身を見られますわよ。
既にラナーはガン見してますけどね。
「黄昏よりもくらきもの……」
これこれ、ラナーさんや。
人のノートを音読してはいけませんよ。
それは結構『効き』ますわ。マジで。
やめたげてよぉ！

「ん？するってぇと竜王国に単身乗り込んだってのも姐さんだったのか？」
「あぁ、迫り来るビーストマン共をちぎっては投げちぎっては投げ、まさに王国無双といったありさまで近づく敵を片っ端から真っ二つにして最終的に全身返り血塗れで敵本陣を荒らしまくったってやつですわね。まぁ……７割くらいは真実ぅ、ですわね」
「いやそこまで言ってねぇよ!?というか７割はマジなのかよ!?」
「実際は敵大将を討ち漏らしてしまったと言う所で余り自慢できない顛末付きでしてよ？まぁ、竜王国の民を鼓舞する為に都合の悪いところを隠して広まったという所だと思いますわ」
※※噂の出どころニグンさん※※
『彼の者こそ人類の守護者、迫り来るビーストマン共をちぎっては投げちぎっては投げ、まさに王国無双といったありさまで近づく敵を片っ端から真っ二つにして最終的に全身返り血塗れで敵本陣において蹂躙の限りを尽くす武功を収めております。自分の頬の傷もその時の必殺剣の巻き添えです』
『え、でもその傷ってアダマンタイト級冒険者につけられたって『本当です、本当に本当です』え、あ……うん』
『本当なので隊員の補充お願いしますね』
※※噂の出どころニグンさん終※※
「……なぁ、アイツは本当に人間なのか？」
「多分人外、七色に光る血が流れてる」

実戦果は誤魔化しませんわよ。どこぞの「3度の飯より出撃好きなドイツ空軍大佐」じゃありませんし。
おい後そこのちびっこ吸血鬼とショタコンバーサーカー、全部聞こえてやがりますわよ。
「……姐さん、なかなか面白え女じゃねぇか。なぁ、あとでオレと戦ろうや」
「蒼の薔薇が誇る最高の戦士との手合わせとはとても素敵な提案ですわね。でも今日来たのはそれが目的じゃない、そうですわね？」
ティアのせいで盛大に話がそれた、というよりスタート地点から迷子になっていたが正しいですわね。
全く、ティアさんったらいけない子ですわねっ！
とりあえず「王都頂上作戦」の擦り合わせ、そして悪魔の襲撃の可能性について話し合う事となった。
※※※※※
「……説明は以上です。皆さん何かしら質問はあると思いますので順番にどうぞ」
ラナーの超わかりやすい話が終わると、まず真っ先にイビルアイが質問した。
「八本指検挙の段取りについては分かった。私が聞きたいのは悪魔の方だ。その悪魔の特徴はわかるか？」
「羽が生えた人型で性別的には男性、メガネと南方のスーツ……でしたっけ。それを身に着けていました。それで何かわかるのですか？」
「いや、はっきりした個体まではわからないが、南方には八欲王が残した浮游都市エリュエンティウがある。もしかしたらその周囲で発生した上位の悪魔である可能性が高い。かなり危険な相手だ」
よっしゃ！肝心要のイビルアイが警戒してくれましたわ！これなら絶対無理はしな
「だが私なら何とかなるかもしれん。その悪魔が出てきた際は私が相手をしてやる」
……
……は？

「ええ、じゃあ頼むわねイビルア「ちょっと、ちょっとちょっと」お、お姉さま？」
こ、これは困りましたわ……。
まぁ確かにイビルアイは現地人的にも戦闘力高めだし？
しかも経験に裏付けられた自信なんだろうけどさ？
デミウルゴス相手にサシの勝負はさせられませんわよ……。
……ここは嫌われるのを覚悟で説得するしかなさそうですわね。
「ちょっと待ってほしいですわねイビルアイさん。貴女先程『正面から挑んではいけない』と言ってましたわよね？」
「う、うむ。普通に戦えば勝ち目はない。だからこそ蒼の薔薇の最高戦力である私が……」
「自分の命を代償にしてでも皆を守るってのはナシですわよ」
「ぐっ……」
図星でしたのね……。
「改めて皆さんに言いますけど、これは王国の興廃だけでなく人類の存亡すらも決めかねない戦いに発展する可能性がありますわ」
「故に戦力の摩耗は承知の上、しかし大損失を被ると分かっているような状況にぶち込めるほどの余裕は無いと心得なさいな」
そう、法国の言を借りるつもりは無いがマジでこの世界の人類には余裕が無いのだ。
特にユグドラシルプレイヤーを相手取るのであれば尚の事。
故に引き際を常に意識する事が何よりも重要。
迷う余裕すら、惜しい。
「で、ですがお姉さま……。仮に件の悪魔が現れたとして、どうするおつもりなのですか？」
「そりゃあ打てる手を打ったらさっさと撤退。避難民とともにエ・ランテルまで後退して臨時政府を建てて凌ぐしかないですわね。天災の如く時と共に過ぎされば良し、そのまま居座って周辺にちょっかいを掛けてくるようであれば評議国も黙っちゃいねーでしょうし、帝国や法国と連合を組んで立ち向かう必要も出てくる可能性も最悪考えなきゃならないですわ」

「王都を、捨てるのですか……？」
「ラキュース、義姉さまの仰っていることは国家を存続させる為の手段として理に適っています。だからどうか、責めないであげてください……」
……あー、やっぱりこう湿っぽくなっちゃいましたわね。
住み慣れた土地、思い入れのある土地を捨てるっていうのはかなり覚悟のいる事だもの。
本来は領民を守る立場の貴族であれば尚更、ラキュースの心境も十分に理解できますわ。
……仕方ない、ここはスーパークロエちゃんマジックで空気を変えてやりますわぜ。
「あぁもう、ほら。ラキュースの質問に答えただけなのに勝手に湿っぽくなっちゃってぇ！見てご覧なさいこの湿っしめの空気！そういうところですわよラキュースぅ！」
「私のせいですか!?」
しょんぼりしたラキュースの肩を叩きからかうと、反射的にツッコミが返ってきた。
うん、大丈夫そうですわね！
「酷い責任転嫁を見た」
「こりゃひでぇや」
「というか皆さん早合点が過ぎますわよ。私の言ったことを思い出してご覧なさいな」
「『打てる手は打つ』……はっ！何か隠し玉があるんだな!?」
「イビルアイさん、そのとぉーり！……実は法国の漆黒聖典と土の神官長レイモン・ザーグ・ローランサンが王都に向かってますわ」
「「「「……」」」」
「「「「はぁっ!!??」」」」
「義姉さま、私そんなの聞いてませんよっ!?」
「お姉さまついに頭が……!?」

「きさっ、お、お前ぇー！何考えてるんだぁーっ!?」
エッヒャヒャヒャ！（上流階級特有の笑い声）
皆さん驚きまくりですわね。
あとラキュース、私の頭がどうかしましたか？
「お、おい姐さんよぉ。何がどうしてそうなってんだよ？」
「そ、そうだ！法国の暗部とも言える存在達を動かすなんて、それこそ敵に回して動くかどうかという存在なんだぞ!?」
「フフーフ、よくぞ聞いてくれました」
法国神官長と漆黒聖典が王国へ来る理由は２つ。
ひとつは『王国領内における法国兵の不法活動に対する謝罪』。
これは政治外交的なケジメという側面が強く、ぶっちゃけると書面で貰えば一応の義務は果たされるはずなのだ。それを態々神官長が出向くというのであるから、どちらかと言えば「建前上」の理由と考えられる。
そして本命は『ライヘンバッハのヘッドハンティング』である。
「……おいおい、つまり法国は姐さんを引き抜く気かよ」
「まぁ向こうはライヘンバッハの正体が私と気付いてないみたいですし。私も直接勧誘を受けましたけどね」
法国が私（ライヘンバッハ）を引き込みたい理由は実際理解（わか）る。
ビーストマン相手に無双するし、脱走者といえど第九席次（クレマンティーヌ）をワンパンで倒しているし、その実績に裏打ちされているような噂（クロエの30の真実）も存在しているし……。
「そこで挑発がてら『そんなに引き抜きたいなら現役隊員の雁首揃えてかかって来い』って手紙を送ってみたら素直に来たみたいですわね」
「……なんというか、お姉さまらしいですね」
「鬼リーダーより鬼。修羅。でもそこが好き。抱いて。ワキワキ」
「まったく、本当に王族に連なる者の思考回路なのか疑わしいほどだ」
蒼の薔薇の面々が好き放題に言ってくれる。
ところでティアさん？そのワキワキする手を止めて？
止めて。

「……なるほど、義姉さまがその事を伏せられていた理由がわかりました」
　すると顎に手を当て黙考していたラナーが口を開いた。
「悪魔の出現があった場合は彼らは『不運にも巻き込まれる』だけ。自衛や信仰を理由に自発的に動くため指揮系統下に組み込めないからですね？」
「その通りですわ。あくまでも独立戦力であるなら、最初から王国の戦力として数えられない。しかし、盤上荒らしという役割であれば十分に隠し玉として活用できるってぇ事でしてよ」
「なるほど、人類の守護者を自称しているのであれば悪魔相手にも奮闘せざるを得ない……、最悪殿軍（しんがり）を押し付けられるということか。全く、法国すら利用するとは恐ろしい女だな」
「フフーン、褒め言葉として受け取っておきますわね」
　実のところ箔付けの為に漆黒聖典の肩書も欲しいなぁとは思ってましたが「言わぬが花」ですわね！
「そうと決まれば、蒼の薔薇は悪魔出現後は強力個体の捜索と下級悪魔の殲滅。それに他冒険者や部隊のサポートが仕事になりそうね。そして件の悪魔らしき個体が現れたら……」
「即時撤退と避難誘導、要するに『いのちをだいじに』だな。承知した」
「応よ！」
「了解鬼リーダー」
「右に同じく」
　ふぅ、これで蒼の薔薇のフォローはできましたわね。
　イビルアイの発言にはヒヤッとさせられましたけど、これでデミウルゴスとかに喧嘩を売るなんて事にはならずに済むでしょう！
　やったぜ。
「それじゃあラナー、お姉さま。私達は準備のために城下に戻ります」
「ええ、皆さんくれぐれもお気をつけて」
　こうして、蒼の薔薇との話し合いは終わった。
※※※※※
　王都の別邸への帰路。

タイミングよくお父様の馬車を見つけた私は便乗させてもらうことにした。
「こうやってお前と馬車に乗るのも久方ぶりだな」
「どうにも私は馬に乗ってるのが性分に合ってるみたいでして……ふぁ～あぁ」
「フッ、お転婆は死ぬまで治りそうにもないのう。それにしても徹夜か？美容がどうとか言ってるお前がらしくもない」
「あははは……」
よく考えてみると、数時間の仮眠程度しか取れてないですわ……眠い。
やはり徹夜などする物じゃないですわね……眠い。
今更ながらポルコ・ロッソの名言を思い出しましたわ……クソネミ。
「ところでだな、八本指の件が一段落付いたら、そろそろワシも孫の話とかに興味を持つ頃だと思うのだ。そう孫だ、つまりお前と王子の子だな。良いよな、子供って。……み、見たいなー孫の顔スゴい見たいなー。ワシ、じいじとか呼ばれてみたいなー」
「い、いきなりブッ込んできましたわねお父様……」
「お前が王子を避けてるような行動を取るからであろうがっ!?」
そういえばバルブロも「最近父上が孫を見たい」って私に漏らしてましたわね……。
確かに頂上作戦さえ無事に終われば大虐殺フラグもへし折られたも同然ですし、ようやくビビらずに自由を謳歌できるし、……うん。ヤるかぁ！
「ご心配なさらずにお父様。大事を目の前にしてフラグを建てるのは余り縁起がよろしく無いですが、敢えていいますわ！ーー私、この作戦が終わったら王子と」
子作りするぅ！そう宣言しようとした瞬間、馬車が大きく揺れた。
否、ひっくり返った。
座席から放り出され、浮遊感に襲われる。
床か、それとも天井が近づいてくる中、私は後悔した。

やっぱりフラグなんて建てるものじゃねぇ……ですわ、と。

※※※※※

「緊急！緊急の報告になります！クロエ殿下、ボウロロープ侯閣下搭乗の馬車が襲撃されました！護衛全滅！お二方は消息不明！」

その急報は、後世の歴史書において『ゲヘナの日』の始まりを告げた言葉として記憶されるようになった。

幕間・集う者たち

※※※※王都東門につながる街道上※※※※

「よし、通れ！次い！」

王都頂上作戦の一環で設置された検問所を一台の馬車が通過する。

その荷台には所狭しと商売道具が積まれており、王都で一山当ててやろうという御者台の商人の野心を如実にあらわしていた。

「それにしてもよぉ、検問が多過ぎやしないか？エ・ランテルからここまででもう六回だぜ？」

馬車の護衛として雇われた冒険者が愚痴をこぼした。

機動性を重視した革鎧と背負った合成長弓から野伏（レンジャー）である事が伺える。

そして、冒険者の証たるプレートの色は「金」であった。

「そうだな。それに街道付近以外にも兵士が配置されている……かなり物々しいな」

レンジャーの彼に応えるのは、リーダー格の冒険者。

当然彼のプレートも「金」である。

前衛職らしく、目立った所は見当たらずも攻守のバランスを考えて整えたであろう装備の数々からは、彼の真面目な性格が反映されている。

「王都からやって来た商人は八本指の行動を押さえつけるための作戦の一つだと言ってましたね」

「遂に王国が本気を出したのであるな！」

続けてチームメイトの魔法詠唱者（マジックキャスター）と森司祭（ドルイド）が口にした。

読者の皆さんならもうおわかりだろう。

彼らは冒険者チーム『漆黒の剣』。

エ・ランテルを襲った「死の螺旋」の夜を生き延びた彼らはその際の功績を讃えられ、無事に金級冒険者に昇格を果たした。

「おいお前ら！無駄話してないで周囲に気を配りやがれっ！昇格したからって浮かれてんじゃあねぇぞ全く……」

そして彼らを怒鳴る声の主はミスリル級冒険者チーム「クラルグ

ラ」の「元」冒険者、イグヴァルジである。
彼もまた「死の螺旋」の夜を生き延びた一人であり、自らを鍛え直すために冒険者稼業を休業し「戦士団」の入団試験を受けるべく馬車に便乗しているのだ。
「すみませんイグヴァルジさん」
漆黒の剣のリーダー、ペテルが謝罪しメンバーに指示を飛ばす。
彼らにとってイグヴァルジは冒険者の先輩であり、その性格については良くも悪くも理解していた。
「あっ！そういやイグヴァルジさんって見たんすよね!?モモンさんとライヘンバッハを！」
「そうである！ミスリル級冒険者から見たお二人とはどんな姿だったのであるか!?」
「お願いしますイグヴァルジさん！僕たち、気になります！聞かせてくれませんか……？」
まずはルクルットが奇襲（話題）を仕掛（振）け、
続けざまにダインが援護（興味）に入（煽）る。
とどめはニニャの魔法攻撃（おねだり）でキメるのが、『漆黒の剣』式・対イグヴァルジ戦術だ。
「し、……しょうがねぇなぁお前らぁ！いいか？一度しか話さねぇから耳かっぽじって聞くんだぞ？ありゃなぁ……」
ご覧の通り、イグヴァルジは煽てられるのにとても弱い。
特にあの晩、モモンとライヘンバッハという「二大英雄と共に戦った事」は彼の誇りであり、一生の宝である為、効果は抜群だ。
（やはりイグヴァルジ氏はチョロいであるな！）
（やめろダイン！聞いてないってドヤされるぞ！）
※※※※※
ーーエ・ランテル　『死の螺旋』発生時
「イグヴァルジ！ここはもう駄目だ、撤退するぞ！」
「馬鹿言ってんじゃねぇっ！ここを抜かれたら街に入られちまうだろうがっ！」
その晩、現場に真っ先に急行したのはイグヴァルジ達「クラルグラ」

であった。
墓場にアンデッドが発生するのは当たり前、出現したアンデッドの難度的にも自分達の実力であれば十分に対処できると高を括ってしまったのが過ちであった。
結果、先行し過ぎて窮地に陥っていた。
「お、おい……何なんだあれはぁっ!?」
チームの誰かが発した悲鳴か、その声に反応して目を向けると巨大なアンデッドが今まさに起き上がろうとしていた。
集合する死体の巨人（ネクロスウォーム・ジャイアント）、『クラルグラ』の面々にとっては未知の存在であった。
「う、うわあああ!?」
「おい逃げるなっ！……クソッ！」
逃げる場所なんて無い。
イグヴァルジはその事を理解していたからこそ、パニックで逃げ出す仲間たちに叫んだ。
しかしその声は届かず、クラルグラのメンバーは各個撃破された。
（……ここまでかっ！）
残されたイグヴァルジは武器を構え直すが、全く勝算の見えない現状に抗う事に意味を見いだせなくなっていた……。
哀れイグヴァルジの命潰えるか。そんな時、彼の頭上を風切り音を立てて大剣が飛んでいった。
そして大剣はイグヴァルジの目の前に立ちはだかる巨大アンデッドに直撃する。
『グウオオオオ……』
大剣が直撃した集合する死体の巨人（ネクロスウォーム・ジャイアント）はうめき声を上げて倒れた。
「そこの冒険者さん！よくぞ耐えきりましたねっ！」
続け様にイグヴァルジに向けて女性の声が、そしてアンデッドには無数の短剣が飛んできた。
短剣は尽くが一撃必殺でアンデッドを活動不能に追い込み、イグヴァルジへの包囲は瞬く間に消滅した。
「あ、アンタは……？」

「簡略で失礼します。私はライヘンバッハ、通りすがりの王国所属のワーカーです」
「ライヘンバッハ！」
その名はイグヴァルジも知っていた。
数年前に突如と現れたと凄腕の女騎士。
竜王国ではビーストマン相手に一騎当千の働きを見せ、王国内でも悪事以外は何でもこなす万能の英雄、護国の騎士。
「じゃあ、あのデカブツを殺ったのもアン……いや、貴女が？」
「あれは私じゃありません。ほら、おそらく彼らですよ」
そう言う彼女が指差す方向を見ると、イグヴァルジは驚愕した。
指の先にはちょうど自分達の方に降りてくる二人の人影と、一頭の魔獣がいた。
一人は全身鎧に身を包んだ偉丈夫、もう一人は黒髪のポニーテールが特徴の美女であり、どちらもイグヴァルジが見た事のない人物であった。
更に彼らが使役しているだろう魔獣は白銀の毛皮に覆われており、イグヴァルジはその魔獣から強大な力を持つ印象を受けた。
（こんな魔獣を使役するなんて、相当の手練なのか？）
「おや、ライヘンバッハさん。貴女もいらしてたのですか」
「モモンさんとナーベさんこそ。意外と早い再会になりましたね」
「ライヘンバッハ…さんは、この二人を知ってるん……ですか？」
敬語を使う機会など縁がないと高を括っていた事を後悔しながら、イグヴァルジはたどたどしい言葉遣いで訪ねてきた。
ナーベと呼ばれた黒髪の美女はまるで虫けらを見るような視線を向けてくるが、ライヘンバッハはそれを気にせず紹介を始めた。
「彼らは冒険者チーム『漆黒』の戦士モモンさんと魔法詠唱者のナーベさんです。魔獣のほうは……」
「それがしは殿の忠臣、ハムスケでござる！」
「……ハムスケさんです。つい先日から冒険者稼業を始めたばかりの銅級だそうですが、先程の見事な攻撃を見た貴方なら階級以上の実力があるとおわかりですね？」

「ど、銅級……？」
ーー銅級ってなんだっけ？
イグヴァルジは困惑した。
まだ王都や帝国のアダマンタイト級冒険者と紹介されたほうが納得のいく風格である。
「モモンさん、ナーベさん。彼はイグヴァルジさん、ここエ・ランテルを拠点とするチームのリーダーで貴方達の先輩にあたる冒険者です。困った事があったら彼に頼れば手助けをしてくれるはずですよ？」
「あ、どうも……ってええ!?俺、いや私なんかの事を知ってるんですか!?」
続けてライヘンバッハから放たれた言葉にイグヴァルジは驚愕した。
「貴方の事はこの街でも有数の実力者と伺っています。しかし、実力を過信する傾向もあると」
「ぐっ……」
英雄が自分のことを知っていた事に嬉しい反面、仲間を失った事実も相まって恥ずかしくなったイグヴァルジ。
「……それでも、貴方は死地を生き延びた。実力については階級相応を名乗って申し分ないでしょう。故に此度の経験を活かせるよう鍛錬に励み、先達として若輩を導けるような冒険者になりなさい」
「は、はいっ……！」
英雄（ライヘンバッハ）の口から続けて放たれた言葉は、イグヴァルジの心を打つには十分すぎたものであり、彼はその慈悲深さに膝をついた。
「それでは我々は更に奥へと進みますが、ライヘンバッハさんとイグヴァルジさんはどうされますか？」
「そうですね、イグヴァルジさんを街まで一旦送り、その後合流させていただきましょう。貴方達の実力を疑うわけではないですが、戦力は多いに越した事は「まっ、待ってくれ！」」
ライヘンバッハの言葉を遮るイグヴァルジ。
ナーベのゴミを見るような視線が刺さりたじろぐが、何とか踏みとどまった彼は言葉を続けた。

「お、俺も連れて行ってくれ！これでもミスリル級冒険者、自分の身は自分で護れるから足手まといにはならない！頼む、この通りだ！」
「身の程を弁えなさいアブラムシ、お前程度が足手まといになら「やめろナーベ」……失礼しました」
ナーベが不満をぶつけようとするが、それをモモンが止めた。
そして、モモンが代わりにイグヴァルジに問う。
「イグヴァルジさん、私達について来れば……最悪死にますよ。それでも良いのですね？」
「あぁっ、アンタら、いや、貴方達の勇姿を目に焼き付けて死ねるなら本望だ！」
「俺は英雄に憧れて、村を飛び出して冒険者になった！だから見てぇんだ！英雄達の戦いってやつを！」
それは嘘偽りの無い、イグヴァルジの本気（マジ）な言葉であった。
とてもワガママな申し出だと理解していたから、駄目だと言われたら諦める覚悟もできていた。
「……フッ、わかりましたイグヴァルジさん。貴方の同行を許可します。ライヘンバッハさんも異論はありませんか？」
「こちらも問題ありません。イグヴァルジさんは私から離れないように行動してください」
「は、はい！ありがとうございますっ！」
どのような思惑があってか、モモンは同行を了承し、ライヘンバッハも同意した。
ただ、イグヴァルジにとっては何物にも変え難いという事実に変わりはなかった。
「そうと決まれば代用の武器が必要ですね。……ではイグヴァルジさん、これを。あと先程の戦いで消耗されてるでしょうからポーションもどうぞ」
イグヴァルジを気遣ったライヘンバッハが彼に渡したのは数本のポーションに一振りのショートソードだった。
「私が懇意にしている鍛冶師の作品です。数打ち品ですが折れず曲がらず、切れ味は折り紙付きですよ」

その剣を手にとった瞬間、イグヴァルジは今夜何度目かの驚きを覚えた。
（か、軽い!?それに手にしだけで力が湧き上がってくるようだぞ!?……もしや魔法武器の類か？）
とんでもない代物を借りてしまったと恐縮していたイグヴァルジにライヘンバッハが思いついたかのように声をかけた。
「あ、その剣ですが貴方に差し上げましょう」
「えっ……ええ！良いんですか!?」
英雄からの小粋な贈り物に素っ頓狂な声を上げるイグヴァルジ。
それがツボに入ったのか、ライヘンバッハは微笑みながら告げた。
「言ったでしょう、数打ち品だと。貴方がその剣を使いこなせるようになったら、私が懇意にしている鍛冶師を紹介しましょう」
（神、いや女神……ライヘンバッハ様ってスゲぇ！）
助けてくれただけでは無く、愛用品まで貰ってしまったら、これはもう崇拝せざるを得ないだろう。
イグヴァルジの中ではライヘンバッハは英雄から英雄神に昇格していた。
そうとなれば神から与えられた試練に挑まざるを得ない。
イグヴァルジは気合を入れて応える。
「ウッス！俺、頑張るッス！」
「えー、ゴホン。それでは皆さん、準備はいいですか？」
「申し訳ありません、いつでも大丈夫です」
「ウッス！よろしくお願いしますっ！」
こうしてモモン、ナーベ、ハムスケ、ライヘンバッハ、そしてイグヴァルジの5名は「死の螺旋」を引き起こした元凶に辿り着くため、アンデッドの犇めく死地に飛び込んだのである。
※※※※※
「それからはもう圧倒の展開だったぜ！モモンの大剣一振りで数十のアンデッドがブッ飛び、ライヘンバッハの容赦ない打撃と斬撃のコンビネーションはアンデッドの尽くを塵に還す！優劣をつけるなんておこがましい程だ！特に漆黒の二人組、アイツら何で銅級なんて名

乗ってたんだろうな？」
「それは組合の規則であるからな」
「カァーッ！規則、規則ってお堅いこったぜ全く！俺が組合長なら初日にでもアダマンタイトのプレートを進呈するってのによぉっ！」
「イグヴァルジさん、彼らはもうアダマンタイト級冒険者ですよ？」
「んなのは知ってるっての！というか、あの吸血鬼への対策会議には俺だって出席してたんだぜ？まぁ、俺にはライヘンバッハの試練を乗り越えるっていう偉大な目的があるから参加できなかったけどよぉ、ヤツらだけで解決できるってことはわかってたぜ！」
それにしてもこのイグヴァルジ、ノリノリである。
この後も真に迫るイグヴァルジの語りは続き、一行は王都へと向かうのであった。

※※※※王都南門につながる街道上※※※※※
「ご協力いただきありがとうございました！」
王都頂上作戦の一環で設置された検問所を馬車の一団が通過する。
その馬車の特徴を一言で言い表すならば「清楚」である。
華美な装飾は無く、必要最低限、アクセントとして取り入れている程度なのだが、手綱を握る御者も含め、全てにおいて洗練され、自然と見苦しくない上品さを漂わせていた。
人類国家の知識がある者であれば、その車体に取り付けられた紋章も含めて、馬車が「スレイン法国」の所属であることは一目瞭然であった。
「神官長様、このペースで進めば夕刻までには王都入りできるそうです」
「うむ、すまんな隊長。破滅（カタストロフ）の竜王（ドラゴンロード）の調査という任務があったにも関わらず呼び出してしまって」
神官長レイモン・ザーグ・ローランサンが申し訳なく「隊長」と呼んだ男に声をかける。
しかし隊長は不満を述べるわけでもなく、寧ろ期待を抱いているかのような声色で応えた。

「いえ、私としても強者として名高いライヘンバッハに興味がなかったと言えば嘘になります。彼女を漆黒聖典に迎え入れらるのならば今まで以上の働きができるようになりるでしょう」
「そう言ってもらえると嬉しいよ。それにしても漆黒聖典の雁首を揃えろとは……王国も思い切った要求を突きつけてきたものだ」
レイモンは天井を仰ぎ見ながらぼやく。
漆黒聖典の王国派遣については、一部神官長の反対を押し切り、非難轟々の中で決行されている。
千載一遇故にしくじる事はできないと考えたレイモンは、王国の要求（というよりクロエの煽り）通り「漆黒聖典の雁首」を揃えた。
まぁ、流石に死亡したばかりの「巨万巨壁」と「神領縛鎖」は置いてかざるを得なかったが。
「しかし、『彼女達』まで連れてくるのはやり過ぎだったのでは？」
漆黒聖典の総戦力の投入。
その中でも隊長が懸念するのは二人の女性隊員についてであった。
元第九席次「疾風走破」クレマンティーヌ。
本来裏切り者である彼女はエ・ランテルにて『死の螺旋』を巻き起こそうと企てていた一団の一人であったが、漆黒の剣の助太刀に入ったライヘンバッハとの遭遇戦において敗北を喫した挙げ句、簀巻き状態で馬に積まれていたところを風花聖典に保護されるという戦士として、相当屈辱的な扱いを受けた。
『アイツ……アイツぅ！私の刺突に合わせてカウンターを入れやがった！』
しかし、クレマンティーヌを屈辱的な仕打ち以上に苛立たせたのは自分の土俵（一撃勝負）で遅れをとったという事実であった。
彼女の刺突攻撃は「英雄の領域に踏み入った」と自負するに足る絶技である。
格上とはいえ、並の反射神経では見切れるはずもなく、魔剣使いと名高いライヘンバッハすら容易く屠れると彼女は判断していた。
しかし、彼女の不運はライヘンバッハの正体を知らなかった事に尽きる。

クレマンティーヌがクラウチングスタートに似た体勢を取り、必殺技の準備に入ると、ライヘンバッハは突如、正眼の構えを解いた。
それを嘗められたと受け取ったクレマンティーヌは絶技を繰り出し、あとは「スッて行ってドスっ」という勝ちパターンが待っているはずだった。
あと半歩という間合いまで両者が迫った瞬間、
ふいにライヘンバッハの上体が動き、クレマンティーヌの剣先の外へと抜け出した。
「小癪な真似を」、内心で舌打ちをしたクレマンティーヌは二の矢とばかりにもう一方の手に構えたスティレットで追撃を試みるが、ライヘンバッハの白鯨丸を握りしめた左手が迎撃とばかりに眼前に飛び出す。
完全に意表を突かれたクレマンティーヌはすかさずそれを防御てしまい、結果自慢の素早さが殺された。
軽戦士の戦いとしては致命傷に相当する状況。
歴戦の戦士としてのクレマンティーヌの決断は後方に飛び距離を稼ぐ事であり、すぐさま行動に移そうとしていた。
だからであろう、ライヘンバッハがフリーであった右手に拳を完成させていた事に僅かとはいえ気がつくのに遅れてしまったのだ。
その拳速はまさに「疾風」を超えた「閃光」。
慌ててクレマンティーヌは両腕を交差させて防御ようとするも、ライヘンバッハの拳は不完全な防御を破り、クレマンティーヌの顎を貫き彼女の意識を奪った。
絶技を封じたのは、更に上を征く絶技。
ここに『ライヘンバッハ式・二重迎撃術』が誕生したのである。
この顛末は偶然にも彼女の姿を捉えた風花聖典隊員が記録した映像情報により明らかになり、法国上層部に衝撃を与えた。
魔剣ならざる「魔拳」使い。
徒手空拳のほうが強いなんて、どこの王国貴族だよ……。
王国ヤバい、と。
そしてその事実を把握したクレマンティーヌはというと、兄クアイ

エッセをして「俺の知ってる愚妹とちゃいまっせ……。あ、今のは『愚妹とちゃいまっせ』と『クアイエッセ』を掛けたギャグでして」と語るほどの変貌を遂げた。

「あら、御機嫌よう神官様」

「精が出ますね。よければお手伝いしましょうか？」

「良い？ 暴力をふるっていい相手は異教徒共と異形種共だけだよー？」

……最後のセリフについては置いておくとして、クレマンティーヌは物腰の柔らかい優しげな性格の女性となった。

最近では「聖女」なんて呼ばれていると風の噂に流れてくるほどの変貌である。

「クインティアの片割れ」と言われればブチ切れ、実兄の安い挑発にも乗ってしまうほど感情の沸点の低さであった彼女を知る者は口を揃えて「きれいなクレマンティーヌ」と評した。

とはいえ、これはあくまでも人前での人格であり、本性の方はというと

「ライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺すライヘンバッハ殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺」

ライヘンバッハ憎し、ならば殺すしかない。

「雑魚専クレマンティーヌ」から「ライヘンバッハ絶殺(ブッコロ)ウーマン・クレマンティーヌ」に進化した彼女はそれこそ全身の穴という穴から血が出るような鍛錬に打ち込むようになった。

その他にも戦闘スタイルや装備にも変化があるのだが、これらについては省略する。

長くなっちゃうからね。

さて、隊長が懸念する二人目の女性隊員は法国の最終兵器(リーサル・ウェポン)とも称

される人物だ。
番外席次『絶死絶命』
本名不詳、エルフの血を引くということ以外のプロフィールは一切不明。趣味はルビクキューと敗北を知る事。
「えっ、王国の強者に会いに行くの？だったら私も行く。敗北を知りたい」
「漆黒聖典の雁首揃えろって話なんでしょ？だったら私も行かなきゃダメでしょ。ね？ね？」
本当は宝物庫の警備任務があるため置いていくつもりだったのだが、ゴリ押しで押し切られていまい、やむなく同行を許可することとなった。
彼女にとって敗北を知ると言うことは、子種を宿すに値する番を見つける事と等しい。
しかも最強を自負しているから、その成就の厄介さは「理想値を高く設定し過ぎた歴戦の婚活女子」のソレである。
ライヘンバッハは女性なのだが、自分よりも強ければ性別の壁すら気合で解決するだろうという謎の希望的観測を抱き、今頃は後方の馬車で胸を躍らせている事だろう。
「まぁ隊長。人事尽くし天命を待つ、という奴だ。こちらは王国の要求（オーダー）に従っただけだ。賽は投げられた。後はその出目を見守るとしよう。全ては六大神様の思し召しだ」
隊長の懸念に、心配し過ぎだと返したレイモンは手を組み、心の中で六大神に祈った。
ーーこの遠征が実りあるものでありますように、と。

※※※※※王都近郊の森※※※※※※
鬱蒼とした森林の奥深くに、一人の男がいた。
腰に佩いた南方独自の武器「刀」から、その男が戦闘を生業としている事は明らかである。
冒険者と言うには身軽に過ぎる軽装であり、何よりも証たるプレートがぶら下がっておらず、ワーカーか傭兵と言う所であろう。

しかし、人類国家で武の道をゆく者であればこの男が「ブレイン・アングラウス」であると気が付くのに時間はかからないだろう。
彼は傭兵団「死を撒く剣団」に用心棒として所属していたが、シャルティア・ブラッドフォールンの襲撃に遭い、命からがら逃げ延びた末に王都に辿り着いた。
人外の脅威に心が折れていた彼であったが、偶然にも工事現場に来ていたバルブロに保護された。
『ふむ、どうやら貴公は相当恐ろしいものと対峙したようだな……。しかし貴公はまだ生きている。であればまだ高みを諦めるのは早計ではないか？』
御前試合で見せたかつての勇姿を取り戻してほしいと思ったバルブロの後押しを受け、工事現場で日銭を稼ぎつつリハビリの為にこの森に通い詰める生活をしていた。
「……」
この日、ブレインは初めて「黙想」という修行を行っていた。
きっかけはバルブロの言葉であった。
『貴公程の剣士に俺ごときが教える技術はないと思うのだが……そうだな、修行僧（モンク）などが行っている精神統一の修行などはどうだろうか？』
バルブロの場合、クロエの特に理由のない暴力から逃れるために様々な武術、体術に触れていた経験から精神修行に関する知識を有していた。
近現代武道の教育思想において当たり前となる「黙想」であるが、そのルーツはヨーガ、禅宗などにおける宗教的行法である。
彼らの属する世界においてはそれこそ神職や修行僧（モンク）といった限定的な集団の中で共有された修行法であり、実戦における鍛錬を主とする兵士や冒険者はおろか、ブレインのような風来坊には知るすべも無かった。
物は試しと黙想を始めるブレインであったが、シャルティアに対する恐怖をはじめとする雑念が脳裏をよぎり、困難を極めていた。
そして数刻を置いて、ブレインはある事に気がついた。

「そういえば俺、アイツの攻撃を受けたわけじゃないんだよな……」
ブレインが気がついたのは、自分がシャルティアに抱いていた恐怖とはあくまで「シャルティアという存在」だった事。
渾身の必殺剣が通じなかった事から逃げの一手に至り、その強さを測らず妄想の中の「シャルティア・ブラッドフォールン」という存在に恐怖するという、客観的に考えると剣士として何とも滑稽な事態に陥っていたのである。
「……馬っ鹿だなぁ俺ぇ～」
大きな溜め息と一緒に吐露したのは自分の情けなさを痛感したブレイン(天才剣士)。
しかし同時に、その事に現状を打破するための奇策を見出した。
「それじゃあ、俺の代わりに増上慢な天才剣士サマをぶっ殺してもらうとするかねぇ」
つまり、雑念まみれの自身像を妄想のシャルティア・ブラッドフォールンに殺させることで「無心」を完成させるという事である。
かなり滅茶苦茶な考え方ではあるが、既に形のあるアイデンティティを否定し再確立させる手法としてはアリ……なのだろうか？
世の心理学者や宗教家が聞けば頭を悩ませそうな話ではあるが、ブレイン・アングラウスは己の直感を信じ早速実践にうつした。
その結果、ブレイン・アングラウスは何度も死(臨死)を体験する羽目となった。
元々優秀な剣士であるため、緻密な想像での体感が現実の身体にも影響を及ぼしていたのだ。
死しては息を吹き返す。
5回目以降は数えることすらやめた。
そして、死を重ねるに連れてブレインは心から余計なものが取れていくことがわかった。
傲慢、貪欲、嫉妬、それまで自らを飾り付けた煩悩が一つまた一つとシャルティア・ブラッドフォールンの手によって殺(消)されるごとに想像の中の剣閃に宿る煌きが一段また一段と増しているように思えてきたのだ。

そして日が傾き、逢魔が時が訪れる。
ブレインは既に百を越える死を経験していた。
流石は天才剣士と言うべきか、今日初めて挑んだ修行法のコツを掴み、恐怖を克服するに至っていた。
改めて黙想に入るブレイン。
その瞬間、周囲の音が消え聞こえるのは己の呼吸音のみ。
遂にはその呼吸音すら聞こえなくなり、真の静寂が彼を包み込む。
目の前に姿を表したのは銀髪の吸血鬼、シャルティア・ブラッドフォールン。
シャルティアはあの時と同じようにゆったりとした歩調で接近してくる。
対するブレインは居合の構えにて迎え撃つ。
両者の間合いが徐々に縮まる。
そしてーー

「チェリヤァァァアッッ!!」
気合の一声と共に、この日「初めて」刀が抜き放たれる。
その気迫に驚かされたか森中の鳥獣が騒ぎ出し、臨死から逃れたブレインは静かに目を見開いた。
確かな手応えを感じた。
薄皮一枚、いや爪先程の僅かな部位かもしれないが、確かに刃は人外の領域（シャルティア）に届いた。
その瞬間、妄想のシャルティア・ブラッドフォールンの気配がかき消え、気がつけば自分は剣を握りしめていた。
「無想の一閃、まさかこれ程とはな……」
大粒の汗を滴らせながらブレインは呟いた。
目の前には逆袈裟に切り裂かれた大木の幹。
黙想に入る前は無傷であったが、今は見るも無惨な姿を晒していた。
そして驚くことに、大木が根を張る場所は、ブレインの剣の間合いの外だという事である。

一日にして人外の恐怖にを打ち勝ち、あまつさえ微かとはいえ人外の領域に迫る一刀をモノとした天才剣士ブレイン・アングラウス。

実に「百九」回目の奇跡であった。

【外伝予告】バハルス帝国闘技場最大トーナメント編

バハルス帝国首都・アーウィンタール

「……あちぃねぇ」

「フゥ暑いなぁ」

いつものように警ら活動に従事する騎士たちは何となくボヤいた。

「鮮血帝」と恐れられる皇帝に仕える以上、睨まれることを避けるため、業務中の私語は慎まれているにも関わらずだ。

「もう秋も終わりだってのにねぇ……変だなぁ～」

彼らにとって、その時点では何気ない発言。

しかし、それはこれから起きる大珍事の幕開けの予兆だったのかもしれない……。

『地上最強の戦士を見たいかぁ～～ッッ！』

『ウオオオオオオオオッッ！』

『俺もだ！否ッ！俺「達」もだっ！全選手入場！』

「『闘鬼』ここに復活!!獄中にて更なる研鑽を積み、ついに闘技場入りだあっ!!!」

「六腕　ゼロッッ！」

「最強の剣技は私が完成させたッッ！」

「ワーカー『天武』より、エルヤー・ウズルスだぁーっ！」

「魔導国最強の最高の絶技がここ、帝国闘技場で爆発するッッ！」

「ご存じ『竜王国の英雄』『紅の戦乙女』ッッ！シャルティア・ブラッドフォールンだぁーッッ！」

「喧嘩は殴ってナンボのモン！俺の腕っぷしにかなう奴は出てこいやぁ！」

「リザードマン氏族『竜牙』より、ゼンベル・ググーだぁーッッ！」

「敗北を知りたいからここに来たッッ！彼氏婚約者募集中ッッ！」

「法国と評議国には内緒だよッッ！絶死絶命、コードネームで参戦だァーッッ!!」

「某の同族を探していますッッ！」
「ご存じ『森の賢王』、ハムスケだぁーッッ！」
「イケメンリザードマンのイケメンな戦いが見たいかぁッ!?」
「嫁さんにカッコいいとこ見せてやれっ！リザードマン氏族『緑の爪』、ザリュース・シャシャだァーッッ！」
「リ・エスティーゼ王国、炎の戦士団より最高の戦士が待望の闘技場入りだぁッッ!!」
「戦士長　ガゼフッ！ストロノーフだぁッッ！」
「氷河の絶対王者が究極の武を知らしめるッッ！」
「魔導国『蟲王』！コキュートスだァッッ！」
「戦闘経歴一切不明！どうやってここに潜り込んだんだッッ！」
「元八本指、アンペティフ・コッコドール！」
「ガゼフが王国最強戦士なら、俺は剣士で最強だ！」
「まさかこの人が来てくれるとはッッ！ブレイン・アングラウス！」
「闘技場チャンピオンのベスト・ディフェンスは伊達じゃない！」
「我らが武王がやって来た！ゴ・ギンだぁッッ！」
「冥土の土産に王座とはよく言ったものだ！」
「老獪なる槍術が嵐を呼ぶッッ！」
「ワーカー『ドラゴンハント』パルパトラ・オグリオン！」
「『童貞殺し』ここに見参！俺の大胸筋で安らかに眠れッッ！」
「冒険者チーム『蒼の薔薇』から、ガガーランの参戦だぁっ！」
「鎮西、ローブル聖王国より緊急参戦！今、聖剣のベールが脱がされる！」
「聖騎士団長、レメディオス・カストディオだぁっ!!」
「またしても皇帝の無茶振りか!?四騎士の意地を見せてやるっ！」
「皇帝の懐刀、『雷光』バジウッド・ペシュメル！」
『……以上、１６名によるトーナメントの開催を宣言するッッ!!』

帝国経済再生計画の名のもとに、
最大の「バカ騒ぎ」が開幕する。

オーバーロード二次創作『ボウロロープ侯の娘』外伝
「バハルス帝国闘技場最大トーナメント編」

【協賛】
アインズウールゴウン魔導国
バハルス帝国
リ・エスティーゼ王国
帝国魔法省
有限会社デミウルゴス牧場
ロフーレ商会
三国冒険者ギルド連盟
帝都商工会議所